

年報

平成 19 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences  
公立大学法人大分県立看護科学大学



## 看護系大学院修士課程の教育目標の明確化を目指して

年報の発行の時期を迎える度に、時間の経過の早さを改めて実感しております。

本学も、開学以来 10 年が経過し、節目の年を無事に終えることができました。

「10 年一昔」といいますが、過ぎてみればアッという間の 10 年間で、開学当時を懐かしく偲んでいるような優雅な状況ではないのが現状です。

医療に関する知識・技術は日進月歩で進歩しております。看護、看護学も進化を続けなければなりません。この 10 年で日本の看護、看護学はどれだけ進化したのだろうか、また、本学が日本の看護・看護学の進化にどれだけ寄与できたのだろうかと自問自答してみますが、納得のいくような回答が出せないもどかしさを感じております。

一方、この間に、約 500 名の卒業生を看護職として社会に送り出すことができました。極めて大所帯の看護界からみれば、ほんの一握りにすぎませんが、着実に毎年、看護界に送り出された人材が、専門職としてそれぞれの場で活動している姿を想像しただけで心なやむ思いがし、これが大学に籍を置く者の醍醐味であると実感しております。

看護系の大学は、年ごとに増加し、本学が開校した当時に比べてその数は、倍以上になっております。そのような中で、本学も看護系大学としての教育水準の維持・向上と、社会的なニーズに応える大学運営は当然のこととし、特色ある魅力的な大学・大学院であることを目指して教育・研究・地域貢献に取り組んでまいりました。とくに、看護系大学の大学院教育の目的の明確化と、その実現を目指して力を入れてまいりました。文部科学省の平成 19 年度大学教育の国際化推進プログラムでは、「21 世紀型のナースプラクティショナー教育」のテーマで競争的資金をいただき、国際会議の開催や教員の研修などを通して検討を進めて参り、平成 20 年度から大学院修士課程で高度な専門職を養成するための課程をスタートさせることができる段階にまでなりました。

大学がスタートした当時から、21 世紀の日本の医療保健を支えるのは「看護職」であるとの自負を持って教育・研究に当たって参りましたが、その実現のためには、社会のみなさまに味方になっていただき、今こそ、看護職者が一丸となって協同することの必要性を痛感しております。

年報の発行は、本学の教育・研究・地域貢献・大学運営における活動を定期的に自省する機会の一環であり、また足跡を記録として残しておくことを目的に開学以来続けてまいりました。年報を通して、学外のみなさまから評価をいただくことが、本学の進化の糧になります。どうぞ、本年の年報をご笑覧いただきご意見をお寄せ下さい。

平成 20 年 3 月

公立大学法人大分県立看護科学大学 理事長 草間 朋子



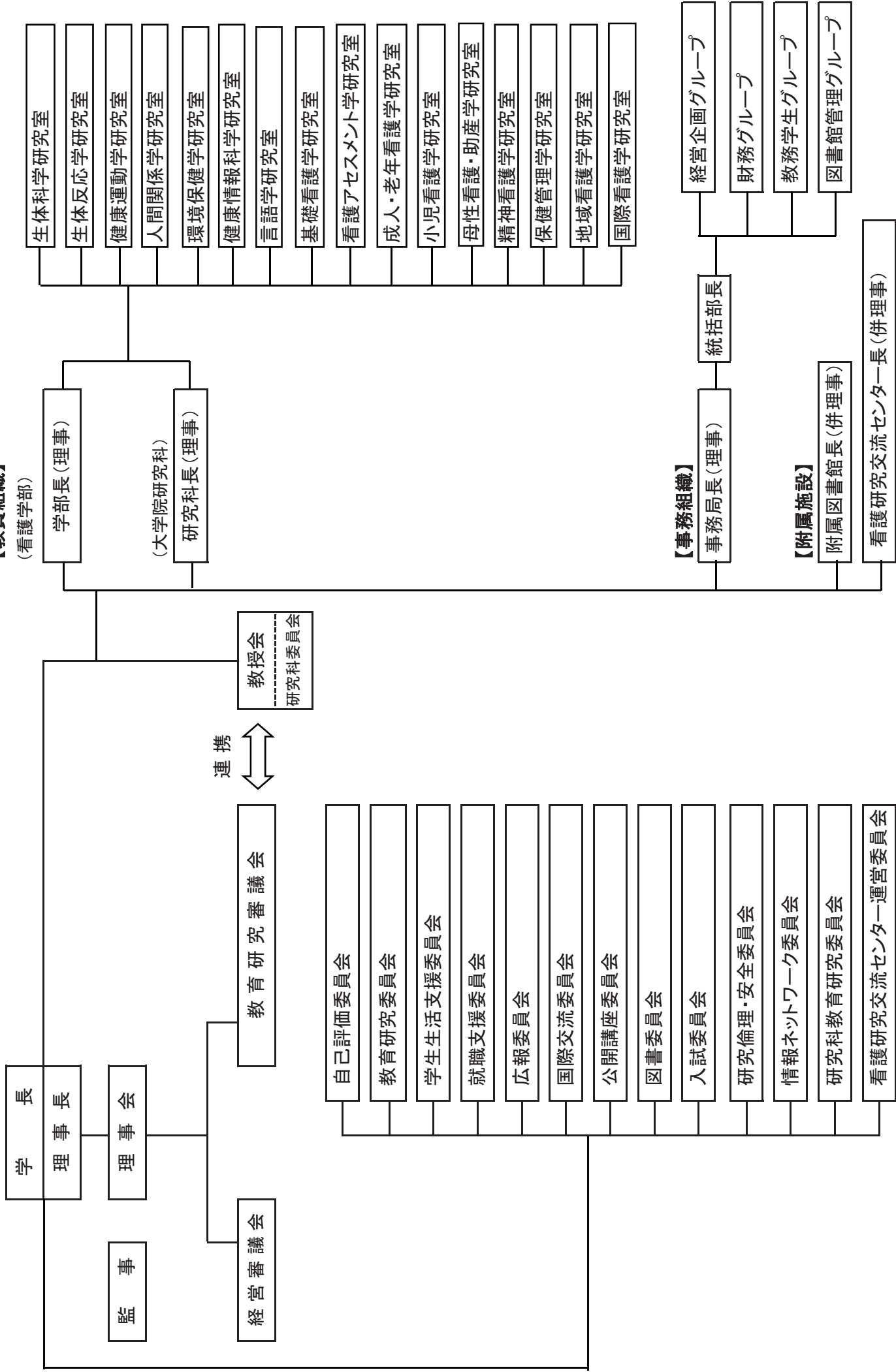
## 年報

### も く じ

1.	委員会／ワーキンググループの活動	2
2.	学内行事の概要	21
3.	教育活動	27
4.	学内セミナー	99
5.	学内プロジェクト研究	100
6.	先端研究	101
7.	奨励研究	103
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	107
9.	業績	108
10.	地域貢献	120
11.	外部資金	132
12.	各種研究・研修派遣	136
13.	学外者の受入	
14.	教職員名簿	142



# 大 学 組 織 図



## 1 委員会／ワーキンググループの活動

### 1-1 理事会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、高橋 賢一（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改廃、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

### 1-2 経営審議会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、高橋 賢一（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）、古賀 和枝、佐藤 誠治、森 哲也、高山 龍五郎（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改廃に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

### 1-3 教育研究審議会

委員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、高橋 賢一（事務局長）、三舟 求真（学外委員）、各研究室代表者、各種委員会委員長

本審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項を審議することである。本年度は15回の教育研究審議会を開催し、各委員会報告の後、年度計画に関する事項のうち教育研究に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち大学の教育研究に関するもの、重要な規程の制定又は改廃に関する事項のうち大学の教育研究に関するもの、教育課程の編成に関する方針、学生の円滑な修学等を支援するために必要な助言及び指導その他の援助、学生の入学、卒業又は課程の修了その他学生の在籍に関する方針及び学位の授与に関する方針、教員の人事及び評価、教育及び研究の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

教育研究審議会の審議内容は理事会に報告した。



#### 1-4 教授会

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、各准教授、各講師

教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、教授会に報告することとしている。

本年度は5回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定及び学生の表彰（学長賞、優秀賞）などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会から報告を受けた。

#### 1-5 研究科委員会

構成員 草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会の役割は、大学院の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、本委員会に報告することとしている。

本年度は6回の研究科委員会し、大学院入試の合否判定、論文の審査に関する事項、課程修了に関する事項などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会から報告を受けた。

## 1-6 自己評価委員会

構成員 赤司 千波、吉田 成一、稲垣 敦、小西 清美、宮内 信治、松尾 恭子、小野 美喜、安部 正雄（経営企画GL）

### 1) FD活動

(1) 平成19年4月において、平成19年度科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）の申請について、申請資格のある教員にその情報を提供し、申請を促した。また、6月19日に全学教員を対象とした「科学研究費補助金申請講習会 入門編」を実施し、申請未経験の教員への情報提供と、外部競争的資金獲得件数増加、申請に向けての全教員の意識向上と結果としての申請採択率向上を図った（平成20年度科学研究費補助金申請状況は、申請書提出数44件であった）。(2) 当委員会委員延べ6名が、大学評価フォーラム、FD研修会、ICT（活用教育支援研修、ICT活用教育の動向とe-ラーニング、APQNオープンシンポジウム、看護学の専門領域に特化した大学評価に関する研修に参加した。(3) 教員が国内の各種研修会へ参加しやすいように国内研修、講習会などの情報を収集し、それを紙媒体ファイリングの形で研究棟2階と同3階に開示し、環境を整備した。

(4) 前年度試行した看護系新人助手に対するサポートシステムの問題点を踏まえ、プリセプターとプリセプティは同じ研究室でペアリングを行った。また、プリセプティやプリセプター別の意見交換会を2回実施し、個別に意見を聞き実施状況の把握を行った。看護アセスメント学実習終了時に両者に対して行ったアンケート調査結果を踏まえて、今年度のプリセプターシップについての評価と次年度の運営について検討し、次年度新任教職員を対象とした研修プログラムを企画した。

### 2) 授業評価

前年度試行した授業評価（講義）の結果を踏まえて、学生による講義の授業評価の項目や実施方法について第三者による評価を行ない多面的に検討した。講義を担当した全教員を対象に前期36名、後期16名、計52名に対して実施した。これを集計し、試行年度の昨年度と比較した結果、71点から80点に改善した。また、看護学実習、健康科学実験、卒業研究の学生による授業評価票を新たに作成し、試行した。さらに、第三者による授業評価の試行を実施し、多面的な授業評価システムの構築について検討した。一方で、在学4年間に受講した授業の評価を4年次生（2/26）に、本年度の授業評価に対する意見や活用実態について全教員（3/6）にアンケート調査を行い、授業評価の問題点について検討した。

### 3) アニュアルミーティング

平成19年度のアニュアルミーティングを平成20年3月6日に公表形式で開催した。奨励研究10題、プロジェクト研究2題、先端研究3題、一般演題7題の発表があった。また、今年度は、全演題を学外公開とした。

### 4) セクシャル・ハラスメント等の防止に関する活動

学生便覧にセクシュアル・ハラスメント等防止規程を掲載するとともに、オリエンテーションの際、啓発活動を行った。また、平成20年2月24日に人権に関する講演会を行った。8月29日、教職員を対象に「アカデミック・ハラスメント研修会」を開催した。また、2月27日、3年次生を対象にアカデミック・ハラスメント関連の啓発活動を行った（学生生活支援委員会と共催）。

3月24日に、教職員を対象に人権研修会を開催した。

### 5) 年報

年報電子化のシステムにより平成18年度の年報作成・発行を行ったが、システムそのもの不具合や各教職員の入力時のミスがあり修正に時間を要したため、公開が11月となった。平成19年度の年報入力に関しては、3月末日までとし、早い時期から具体的な入力方法についてメール、学内web上等で周知を図った。

## 今後の課題

FD活動については、外部研究補助金に関する申請支援を、多様な背景をもった看護系新人助手に対しては特に具体的に早期支援活動を行う必要がある。また、看護系新人助手に対するプリセプターシップについては、担当自己評価委員が細やかにプリセプティとコミュニケーションをとったが、プリセプティの心身に配慮するには限界があったこと、新人教員が経験した病院におけるプリセプターシップとの混同があることから、システムおよび名称について再度検討する。

授業評価アンケートについては、学生と教員そして集計担当者にそれぞれ負担が大きいことから、評価方法の検討を行い、よりよい方法で実施する。また、試行であった実習、実験、卒論に対する評価については、次年度は本実施になり教員評価にも使用することから、より多面的な授業評価システムを構築し、実施する。

## 1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、佐伯 圭一郎、甲斐 倫明、宮崎 文子、李 笑雨、藤内 美保、江藤 真紀、佐藤 俊実（事務局）、梅木 満長（事務局）

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。

- 1) 平成20年度学部生の助産学選考に関しては、助産学選考WGが中心となって、口頭試問（実技含む）による選考を行い、4月の第2回教育審議会で承認を得た。
- 2) 本年度の国家試験対策に関しては、国試の補講は例年と同じく12月上旬に行い、模試については例年どおり国試直前まで実施、また国試終了直後に国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。
- 3) 卒業研究に関しては、例年どおり2つのサポートグループを設置し、卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成20年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎 Iの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。
- 4) 看護実習（第1段階～第5段階）に関しては、実習全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。実習関連WGと総合実習WGに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。
- 5) 本年度から大分大学との遠隔授業を単位互換科目として本格運用し、「家族と法（法学入門）」を後期より毎週水曜3限に15回にわたって行なった。また本学からは吉村准教授による人間関係学を遠隔講義によって大分大学に発信した。
- 6) カリキュラムの見直しに関しては、全授業科目について、科目名、科目の順序性、コマ数の見直し作業を行い、7科目について科目名、単位数、コマ数、開講時期等を変更すると共に、学則別表を改正し、平成19年8月末に文部科学省に変更申請を行った。また、保健師・助産師・看護師学校養成所指定規則の一部改正に伴う平成21年度から導入予定のカリキュラム改正を合わせて検討した。
- 7) 4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、全8回の講義を実施した。本講義は地域住民に対しても公開講義としている。
- 8) 2年次生を対象とした進級試験は本年度から正式施行し、進級試験WGによって試験問題を選別し12月18日に実施した。再試験は平成20年2月28日に実施し全員合格した。
- 9) 研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究については応募がなかったが、先端研究3件と奨励研究8件を採択して大学の研究機関としての使命の推進を図った。
- 10) 短期海外派遣研究員に関しては、本年度も教員3名を米国大学（ケースウエスタン大学）に派遣し、教員の研究の活性化を図った。
- 11) 平成19年度前期・後期の科目等履修生及び平成20年度の研究生の募集を行ったが、応募者はなかった。
- 12) 教育研究委員会が担当する平成19年度計画に関しては、計画に従って遂行し、ほぼ100%達成することができた。

## 1) 国家試験対策WG

構成員 宮崎 文子、赤司 千波、小西 清美、江藤 真紀、福田 広美、高波 利恵、定金 香里、小嶋 光明、吉田 智子、梅木 満長

今年度の国試受験対象者は94名と開学以来の学生数であった。しかし、看護師・助産師不足の折から地域の求人数は驚くほど多く、今年度も目標は高くし、保健師・助産師・看護師国家試験合格者を100%とした。教員・学生の対策委員は一丸となり役割分担を決め9月より精力的に対策の計画を実施した。具体的には成績の振るわない学生には集団面接2回、個人面接2回（1回目28人、2回目10人）実施した。また教室責任者の協力を得て、自己学習の意欲を引き出す努力も行った。今年度は国試WG会議を7回開催し計画はスムーズに行った。しかし合格者は100%におよばなかった。看護師88名中1名不合格、合格率98.9%（全国90.3%）、保健師92名中5人不合格、合格率94.6%、（全国91.1%）、助産師17名中1名不合格、合格率94.1%（全国98.1%）と看護師・保健師は全国平均を上回ったが、助産師は全国平均にみたなかった。来年度は3職100%を目指して頑張りたい。

## 2) 総合実習WG

構成員 大賀 淳子、安部 恭子、福田 広美

本年度総合実習終了後に、学生レポート、教員意見、施設指導者意見を取りまとめ、看護系教員へのフィードバックのための、あるいは次年度実習準備の参考資料として活用した。次に、次年度実習施設の決定に際して、担当・専任教員から総合実習施設としての適切性に関する意見を集約した。その結果、新規1施設を含む42施設を平成20年度総合実習施設として決定した。次年度実習学生に対しては、1～2月にかけてガイダンスおよびオリエンテーションを実施した。また、新任教員は着任と同時に学生への指導および施設との対応を開始することになるため、新任教員に対する専任教員の役割（前任者からの引き継ぎの仲介、施設への挨拶同行などの支援）について明文化した。

### 3) 実習関連WG

構成員 桜井 礼子、藤内 美保、小野 美喜、大賀 淳子、木下 結加里、関屋 伸子、田中 美樹、松尾 恭子、八代 利香（8月末まで）

#### 活動の概要

実習関連WGは、教育研究委員会のもと、看護系研究室からそれぞれ1名を選出し、ほぼ月1回の定例会議を開催し主に実習に関連した活動を行った。主な活動としては、看護技術修得プログラム（第1段階～第3段階）の実施、実習に関する事項について、実習ガイドブック、個人情報の取り扱いに関するガイドライン、事故対応マニュアル等の見直しを行うとともに、実習センター及び各領域の実習施設の実習環境の整備等を行った。また、第1段階～第5段階までの実習をまとめて、学生が自分で看護技術の達成度を確認できる看護技術修得確認シートの作成を試みた。

#### 1. 実習センターの運営・管理および各実習施設の整備

実習センターの管理については、各段階の実習担当者との連携を図りながら、施設および物品の管理等を実施した。また、実習センター利用細則の見直しを行った。また各実習施設についても学生の実習環境の整備を行った。

#### 2. 実習に関連する約束事等

##### 1) 実習ガイドブックの作成

2007年度版の実習ガイドブックを、第4段階の地域実習のオリエンテーションに間に合うように、4月18日に完成、600部を印刷した。2008年度のガイドブックは1月～3月にかけて見直し、作成準備を行った。

##### 2) 個人情報取り扱いに関するガイドラインの見直し

2007年度に作成した個人情報の取り扱いに関するガイドラインの見直しを行った。

##### 3) 事故対応マニュアルの見直し

事故対応マニュアルについては、基本的には実習中の事故に関するものを取り扱い、教員用のマニュアルとして冊子としてまとめていく（学生用はガイドブック内）。今年度は、結核対応について修正があり、今後、抗体価検査の追加等を行っていく予定である。

#### 3. 看護技術修得プログラム（総合看護学、技術チェック）の企画・実施

##### 1) 第1段階：3年次生対象 「第4段階実習前技術チェック」 9月の1週目に実施

オリエンテーション時に、卒業時までの全体プログラムの説明を行った。最もチェックに選択された技術は、「更衣・車椅子移動」であり、例年と同様の傾向であった。

##### 2) 第2段階：4年次生対象 「総合看護学」 後期前半（10月～11月）の月曜

事例を用いて、グループワークと、発表会ではロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、事例に関する看護過程の展開と看護技術の実施に重点をおいた課題とした。ロールプレイでは患者・家族役に教職員の協力を得て実施することができた。また、今年度は、実習期間中でありより多くの看護系教員に参加してもらうため、発表会の1日を帰学日に合わせて実施し、教員の参加を得ることができた。

##### 3) 第3段階：4年次生対象「卒業前技術チェック」2月末国試後～3月（時期は学生と調整）

今年度は、これまでの学生マニュアルに加えて教員用マニュアルを作成し、安全技術チェックが行えるよう配慮した。また、昨年作成したDVDを自己学習に使用、内容が一部変更になっているものについては注意点を加えたが、DVDは活用されていた。

#### 4. 実習関連予算の管理

平成19年度実習関連経費予算は300万円で、主に学内実習室の整備費、演習に使用する教材費、実習センター整備費、各実習施設で使用する消耗品費、実習ガイドブック印刷費、実習用ファイル（学生用）費等に使用した。また、開学以来10年が経過し、修理が必要な備品や部品等の交換などの費用が発生してきており、今後は定期的な器材のメンテナンス・修理費を考慮する必要がある。

#### 5. 今年度の新たな取組み

##### 1) 看護技術修得確認シートの作成

今年度は、第1段階～第5段階までの実習をまとめて、学生が自分で看護技術の達成度を確認できる看護技術修得確認シートの作成を試みた。作成にあたっては、あり方検討会の報告書などを参

考にしながら、卒業までに到達すべき内容を整理した。今後、作成されたシートを学生に施行し、改善を加えていく予定である。

2) 看護学実習に関する資料をWeb上にファイルを一本化

Pukiwikiに「看護学実習」のページを作成、順次実習マニュアル等、実習に関連した資料をアップしていく予定である。

#### 4) 進級試験WG

構成員 小西 恵美子、藤内 美保（12月まで）、江藤 真紀、吉田 成一、佐伯 圭一郎、小野 美喜、岩崎 香子

正式実施の初回となる進級試験を12月に実施した。

出題依頼、問題の作成、学生へのインフォメーションを経て、本試験では87名が受験し69名が6割以上の得点率で合格した。

2月末の再試験は18名が受験し、全員が合格した。

次年度以降の継続的な実施のため、問題の分析とプールを継続した。

今後は、学生の学習を促すための働きかけと、適切な問題作成をさらに推進することが必要である。

#### 5) 助産学選考WG

構成員 佐伯 圭一郎、宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子、G. T. Shirley、高橋 敬

4月に、平成20年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の議を経て15名に履修が許可された。また、平成21年度助産学実習履修許可者選考方法の検討と準備を行った。

## 1-8 学生生活支援委員会

構成員 吉村 匠平、伊東 朋子、大賀 淳子、佐藤 俊実、高橋 敬、林 猪都子、原田 幸代、宮内 信治

学生の大学生活を充実させるための環境整備、困難を抱えている学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に諸般の活動を展開している。前年度から引き続き行った業務は以下の通り。学生の健康管理支援（集団健康診断、個別相談、禁煙教育）、奨学金による経済支援（奨学金面接、奨学金情報の収集・周知活動）、サークル・ボランティア活動支援（サークル室移動の調整、サークル費分配についてのコンサルテーション業務）、自治会委員・若葉祭委員支援（学生からの意見収集窓口、各学生役員の相談窓口）、過年度学生（休学生）支援（学年担任による定期的なメールによるコンタクト）、学習相談（単位取得、進級相談）、担任による相談業務、保護者相談、休退学・復学相談、学外者対象の苦情対応、コンタクトグループ（グループの編成、開催依頼）、スポーツ交流会の企画・準備・運営（昼食手配）、各種講演会の企画・運営、交通安全（自動車学校での、自動車、原動機付き自転車実技講習の開催、許可交付面接、事故対応、事故状況統計の作成）、全体オリエンテーションの企画・運営、新入生宿泊研修の企画・運営、オフィスアワー（窓口の整備、利用状況の調査）、学生生活実態調査（調査用紙の作成、調査の実施、分析、報告書の作成、学生・教職員への周知、駐車場管理（無許可利用者、駐車場所違反への対応）、同窓会関連業務、コンソーシアム大分への運営委員・幹事派遣・WGメンバー派遣、委員会ブログの運用。

前年度からの継続事業に関しては、ほぼ目標どおりに遂行することができた。コンタクトグループに関しては、学生の凝集性を高めることを目的に、平成20年度以後学生メンバーを固定することとした。全体オリエンテーションに関しては、県派遣講師と学内講師の講演内容に一部重複があるため、内容を委員会で調整することとした。

本年度は、上記の活動に加え、下記の試みを新たに導入した。

- ・従来は、教員による聞き取り調査によって抗体検査を行っていたが、近年の麻疹の流行を受けて、健康診断時に抗体検査を実施することとした。
- ・平成20年度4月1日からの敷地内全面禁煙に向け、外部講師を招いて禁煙に関する講演会を行った。
- ・本学では、固定した試験がなく、教員相互で試験を調整するシステムもない。このため特定の時期に、試験、グループワーク、レポートが集中する場合があった。そこで、教室にスケジュール表を掲示し、学生が試験などの日程を記入、必要に応じて教員が学生のスケジュールを確認できるようにするシステムを試験的に導入した。
- ・学内環境の美化、意識向上のため、キャンパスクリーンデイを実施した。
- ・委員会メンバーの交代に伴う業務引き継ぎを円滑に行うための学年担任業務を文書化した。
- ・学生がハラスメント被害に遭った際に、一人で抱え込むことなく適切な対処行動を取ることができるよう、外部講師を招いて学生対象のアカデミックハラスメント講演会の開催した。
- ・学生の安全確保のために、18時15分以後第2駐車場を学生に開放した。

次年度10月の障害者スポーツ大会の開催に伴い、本学1年次生80名がボランティアとして派遣される。ボランティアの募集・要請・派遣など一連の業務を円滑に進める事が次年度の委員会の大きな課題である。

次年度は、学生支援業務を強化するため、新たに4年次生担任、編入生担任を設ける。学年担任が学生、保護者からの相談窓口である旨、周知活動を展開する。

## 1-9 就職支援委員会

構成員 宮崎 文子、平野 互、高野 政子、工藤 節美、小西 清美、大賀 淳子、福田 広美、梅木 満長

今年度は県内就職率50%目指すことを目標に掲げ活動を行った。具体的活動は以下の通りである。

1. 卒業生が5人以上在職する施設を訪問し、就業状況等のフォローを行った。  
併せて雇用条件等の情報を収集し、データベースの充実を図った。
2. 県内施設を対象にした求人票冊子を作成し、就職ガイダンスで配布した。  
(4年次生対象7月)
3. 県内医療施設の看護管理者を招聘し、4年次生を対象に県内就職説明会を実施した。  
(4年生対象6月)
4. 就職試験を支援するために、模擬面接を学生のニーズに添い8月から5回(39名)実施した。
5. 就職支援委員が全ての研究室を分担し、学生の就職活動の個別支援を行った。
6. 求人来学者への対応68件(全国求人数約25,000人内県内555人)を行った。
7. 卒業生の再就職の支援のため、学内規約を1年間から5年間に変更した。  
以上の結果から今年度の就職・進学先は94名中1名を除く93名(98.9%)が12月までに決定した。今年度の県内就職率の50%目標達成は48.4%とほぼ計画通り達成した。
8. 就職・進学ガイドブックの見直しを行った。

今後の課題

1. 平成20年度の就職ガイダンスは、学生の状況に合わせて適切な情報提供するため、3年次生向け(2月7月)と4年次生向け(6月)に区別して実施することにした。
2. 同窓会との連携をとって、再就職の紹介や県外からのUターンした卒業生の動向を掴むための方法を検討する。



## 1-10 広報委員会

構成員 稲垣 敦、影山 隆之、赤司 千波、平野 亙、伴 信彦、松尾 恭子、堀 潔己、高橋 賢一

### 1) 第10回若葉祭

5月19日(土)、20日(日)の両日、本学キャンパスで第10回若葉祭を開催し、2000名を超える参加者を得た。教職員による体験型イベントとパネル等展示の企画・調整、学生実行の指導を担当した。

### 2) 第2回地域ふれあい祭

11月10日(土)に、「健康を科学する」というテーマで第2回地域ふれあい祭を開催した。今年度は、iichico総合文化センターで行い、大分市の多くの地域の方々と交流を持つことができた。教員の公開講座マラソン、看護大生による健康科学講座、相談体験コーナーとして、健康チェック、介護予防体操、骨密度チェック等を実施した。

### 3) オープンキャンパス

本年度から7月下旬の日曜日開催とし、7月22日(日)に開催した結果、午前178名(県内165名、保護者26名)、午後52名(県内39名、保護者9名)と昨年を上回る参加者を得た。また、在学生との交流を増やすための新しい企画として、タキオソーラン(説明会オープニング)、合格体験談、お茶会(茶道部)を取り入れた結果、好評であった。例年通り、アンケートと交換でジュースを配付した。

### 4) 大学見学会

8月24日(金)6名、8月27日(月)3名を対象に、大学見学会を開催した。内容は大学紹介のポスター掲示、施設見学、模擬授業等であった。

### 5) 大学見学

大学見学は随時申込を受け入れており、8月16日(木)2名、9月4日(火)2名に対して、大学・入試概要説明や施設見学を行い、希望者には相談に応じた。また、3月5日(水)に佐賀関地区住民30名に大学施設案内を実施した。

### 6) チキリンばやし市民総おどり大会

8月5日(土)に、教職員、学生、ソウル大学交流学生の総勢42名で、大分七夕まつりのチキリンばやし市民総おどり大会に参加した。昨年からは大学のハッピーを着用しているが、今年からは幟も使用したことで、例年以上に大学の存在をアピールできた。日本文化の体験という意味で、ソウル大生にも好評であった。

### 7) 進学説明会・高校訪問

入試委員会と協力して、長崎市、大分市、中津市、臼杵市、日田市で開催された進学説明会で高校生、保護者、高校の進学担当者等に、大学や入試の概要を説明し、質問に答えた。また、開催地近隣の高校を訪問し、受験担当者に大学の説明を行った。

### 8) 模擬授業

竹田高校、日田高校、雄城台高校、大分西高校等からの模擬授業依頼に対して講師を選び派遣した。

### 9) 大学オリジナルグッズ

大学英名入りの4色ボールペン、ネックストラップ、自由布(風呂敷)および大学写真入りクリアフォルダーを作成し、地域ふれあい祭、公開講座等の大学イベントや国際交流で活用した。

### 10) 学外Web

学外Web-WGの協力を得て、法人情報、入試情報、年報、各種大学イベントの広報および事後報告等を随時掲載した。

### 11) 写真展

地域ふれあい祭のイベントとして、大学の写真展を開催した。また、スポーツ交流大会、若葉祭、地域ふれあい祭の写真のスライドショーを用いて教室前の廊下で映写した。

### 12) マスメディアでの広報

若葉祭はケーブルテレビで、地域ふれあい祭、卒業式はNHKで放映された。また、卒業研究発表会、卒業式、博士授与第1号等については、大分合同新聞に記事として掲載された。

平成20年度は以下の新規課題に取り組む。

- 1) 創立10周年記念事業の一環として、若葉祭、地域ふれあい祭、新聞広報を行う。
- 2) 大学見学会を廃止し、申請に応じて随時対応する。
- 3) 公開講座等の動画の配信する。
- 4) 学外Web管理システムを導入し、効率化を図る。

- 5) 大学オリジナルグッズを改善する。
- 6) マスコミとの連携を強化する。

#### 1) 大学案内パンフレットWG

構成員 影山 隆之、小嶋 光明、吉田 智子、高瀬 恵子、田中 美樹（12月から）、江月 優子（12月から）

前年度までの「受験生向け大学案内」から、法人としての活動全体を紹介する資料へと編集方針を修正し、卒業生への取材や学内撮影を行って大学案内パンフレットを編集した。12月から構成員の一部を変更し、次年度パンフレットの企画編集作業に着手した。

#### 2) 英文パンフレットWG

構成員 G. T. Shirley、伊東 朋子、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ、田中 美樹、福田 広美、吉武 康栄

本学の特徴と教育内容・活動を英文でまとめた “University Bulletin” を全面改訂した。配布の対象が主として海外の教育・研究関係者であることを考慮し、今回の改訂では写真を最小限にとどめ、文面の充実を図った。

#### 3) 学外WebWG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ

学外Webページの作成、情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など約120件）および管理・運営を行った。また、各ページに階層構造表記を付加し、閲覧者にサイト内の位置が把握できるように工夫をした。

#### 4) 英文WebWG

構成員 G. T. Shirley、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ、吉武 康栄

英文Webページの作成、情報の更新・掲載を担当するWGである。今年度は、英文パンフレットの改訂に合わせて、コンテンツを全体的に更新した。

## 1-11 国際交流委員会

構成員 G. T. Shirley、八代 利香（8月31日まで）、李 笑雨、伊東 朋子、関根 剛、高野 政子、田中 美樹、小野 順一、安部 正雄

国際交流委員会が平成19年度に行った活動は以下のとおりである。

### 1) 学部生のソウル国立大学校との派遣受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（7月22日～8月5日までの2週間）、学部生5名、大学院生1名、教員1名の短期派遣（7月29日～8月5日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療制度、福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

### 2) 本学の学部生および大学院生の派遣

学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月19日～26日まで8日間）、大学院生2名を長期派遣（8月12日～8月26日まで2週間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療、福祉、看護について視察等を行い理解を深めた、報告はWebに掲載した。

### 3) ソウル国立大学校100周年記念国際学会

平成19年10月17日～19日に開催されたソウル国立大学校看護大学の100周年記念大会に姉妹校として学長（招聘）のほか、教員7名を派遣した。

### 4) 第9回看護国際フォーラムの大分県看護協会との共催

「看護職のためのストレスマネジメント」をテーマに、平成19年10月21日（日）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。韓国から1名、国内から2名の講師を招聘した。参加者は279名と盛況であった。

### 5) 第6回NP国際会議の開催

平成19年11月1日に、本学23講義室にて、「日本における高度実践看護師（NP）はいかにあるべきか」をテーマに第6回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国カリフォルニア州立大学校サンフランシスコ大学の看護教員、および韓国保健診療員会会長を講師として招聘した。

### 6) 大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度は第7回NP国際会議として、「NP教育の進展と質の高い保健サービスの提供に際してのNPの効果」をテーマに、平成20年3月17日に本学23講義室で開催した。米国Pace大学看護学部、Washington大学看護学部およびソウル国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

平成19年度の計画を基本的に踏襲した計画を検討する予定である。具体的には、学生の国際的視野の養成と教員の研究の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と交流大学を増やすよう試みる。そして、毎年、フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

## 1-12 公開講座委員会

構成員 影山 隆之、伊東 朋子、小西 恵美子、G.T. シャーリー、佐藤 恭子、田中 美樹、宮崎  
文子、吉村 匠平

一般市民を対象とする有料公開講座を全4回開催した。今年度のメインテーマは「生活と健康」で、各回の題目(日程;講師)は、「知っておきたい食中毒の知識/知っていますか、正しい手洗い」(7/12;伴、伊東、松尾)、「認知症の予防には何が出来るか?」(7/19;大賀)、「美しい骨づくり-測ってみよう自分の骨」(7/26;岩崎、佐藤、岡崎)、「快適な睡眠と健康」(2/27;影山)、うち3回は学内で開講し最終回のみ看護研究交流センターで開講した。受講料は1回500円、高校生以下は無料とした。延べ参加者数は93名であった。初めの3回を全回受講した4名に修了証を授与した。

これと別に、若葉祭で無料公開講座を開催し、地域ふれあい祭りでも公開講座マラソンと題して無料公開講座を開催した。若葉祭(5/19~20)各回のテーマ(講師)は、「1万人がしている介護予防運動!お元気しゃんしゃん体操」(稲垣)、「易しい英語で楽しく読んで、めざせ100万冊!英語多読講座」(シャーリー、宮内、岡崎)の2つで、約50名が参加した。公開講座マラソン(11/10)のテーマ(講師)は、「身のまわりの気になる健康へのリスク-食品添加物、電磁波、タバコ煙」(甲斐倫)、「災害に強いまちづくり-いざというときの備え」(桜井)、「海外へのトラベルはトラブルがいっぱい」(三舟)、「あなたとわたしの更年期」(宮崎)、「当たるも八卦、当たらぬも八卦-生活の中の確からしさ」(佐伯)、「地域に根ざした大学をめざして」(市瀬)で、参加者アンケートの回答者だけでも40名にのぼり、実際の参加者はさらに多かった。

以上の開催にあたっては、前年度の住民希望調査および教員への「提供可能な講座テーマ」調査の結果に加え、南大分、植田、野津原の3公民館の利用者を対象として実施した「大学に希望する公開講座についてのニーズ調査」の結果、およびウェブページを通じて調査した他の看護系大学で開講している公開講座の内容を参考にした。

また、今後、大分市以外の県内遠隔地で開催する可能性について検討するため、複数の県内都市の状況について情報収集を開始した。

次年度も引き続き、同様の有料公開講座および大学祭での無料公開講座を計画する。ただし今後、再び看護研究交流センターで開催する場合には、会場がわかりにくいとの声に応じて案内標識等の工夫が必要なので、事務局と連携を取り対応を検討する。

今後、大分市以外の県内遠隔地で開催する可能性について検討するため、主な県内都市の状況について引き続き情報収集を行う。

## 1-13 図書委員会

構成員 高橋 敬、関根 剛、影山 隆之、小西 恵美子、小西 清美、福田 広美、小野 永子、牛島 聡子

毎月1回の定例委員会を開催し、報告と議題を議事進行した。教育研究に役立つための選書が中心になるが、とくに学生の勉学や生活に参考になるような書籍の紹介を毎月1回教員に原稿を依頼し、HPに載せた。この記事はよく目に触れる機会が多く、学生にも好評であった。

若葉祭や地域ふれあい祭りの機会には、図書館紹介のポスターを2つ（図書館の紹介、図書紹介の内容の一部）掲示した。以下、委員会の進行状況を記載する。

- 1) 図書・雑誌の情報検索システムを効果的に利用するためのマニュアルを整備する（ネットワーク委員会の協力で、次年度に向け準備中）。
- 2) 幅広い教養を身に付けてもらうため、各種新書シリーズの購入をその都度検討し充実しつつある。
- 3) 図書返却期日を厳守するためのルールを設け、徹底した。とくに、外部の者に対して再度督促し、徹底した。
- 4) 本学で開催された公開講座などを記録したビデオやDVDを貸出利用できるように整備した。

以上今年度内の計画はほぼ達成された。ただし、1)に関しては次年度以降も引き続き、情報ネットワーク委員会とタイアップして計画を具体的に進めることに決定した。また本学学生向けの休日開館に関してはほぼ例年通りに実行する事に決定した。

## 1-14 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成19年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、試験を統括した。入学試験の実施については全学教職員の協力のもとすべて大過なく終了した。

年度計画にそって、入学試験のあり方および高校訪問・進学説明会などによる広報を行っている。

## 1-15 研究倫理・安全委員会

構成員 委員：伴 信彦、桜井 礼子、安部 眞佐子、関根 剛、藤内 美保、吉田 成一  
学外委員：西 英久（大分大学）、二宮 孝富（大分大学）  
事務局：坪崎 勝（財務グループ）

当委員会では、本学の教員及び学生が行う研究について、倫理・安全面の審査を実施している。今年度は、延べ99件の研究計画について審査を行った。また、研究費の適正な取扱いを図るために、学内の指針及び関連する伺定を改定・制定し、当委員会を中心とする監督体制を整備した。

研究倫理・安全のために定められた手続きが確実に履行されるよう、教員・学生の意識を高めるとともに、研究計画の申請に係るルールを見直す。また、研究費の管理・監査を一層確かなものとするために、不正防止計画を策定し、不正の発生要因を未然に摘み取っていく。

## 1-16 情報ネットワーク委員会

構成員 佐伯 圭一郎、工藤 節美、大賀 淳子、品川 佳満、林 猪都子、八代 利香（8月まで）、吉田 成一、森 清（事務局）

各WGの担当する本学情報ネットワークの管理運用実務を統括し、諸問題に関する検討、意志決定を行った。これら委員会としての活動は、各WGリーダーを含む形で行われている。

特に、平成20年度に実施される教職員用情報機器更新について準備作業を行った。

現在の活動を堅実に維持するとともに、来年度において、1) 卒業生と教職員を結ぶSNSシステムの構築を実施し効果的な運用を行うこと、2) 学生、教職員それぞれの情報リテラシー、ITスキルの向上を支援するためのコンテンツのさらなる充実を目指すこと、が計画されている。

### 1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満（リーダー）、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、サイボウズ、ファイル、計算機など）を含めたインターネット・イントラネットの管理運営を行った。Webメールについてはバージョンアップを行い、メールシステムの構成について変更をおこなった。また、来年度のサーバ更新へ向けての準備を行った。

### 2) WinユーザーサポートWG

構成員 中山 晃志（リーダー）、大賀 淳子、吉田 成一（教材作成室担当）、佐伯 圭一郎、森 清（経営企画グループ）

教職員PC（Windows）、教材作成室・メディアセンターのPC、CALL用PCなどの管理（トラブル対応、ソフトウェアのバージョンアップなど）および教職員のメールソフト変更に関する案内・対応を行った。また、来年度のPC更新へ向けての準備を行った。

### 3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明（リーダー）、伴 信彦

学内に設置してある PC（Mac）の管理（トラブル対応、ソフトウェアのバージョンアップなど）および来年度のPC更新へ向けての準備を行った。

### 4) 看護研究交流センターサポートWG

構成員 林 猪都子、八代 利香（8月まで）、佐伯 圭一郎

看護研究交流センターの教員・学生用コンピュータの保守管理、特に障害時の対応を行った。

## 5) 看護メーリングリストWG

構成員 工藤 節美、吉田 智子

大分県看護メーリングリストの管理運営を行った。本年度の新規参加者は7名、離脱は2名。年度末の時点での登録数は119名。

## 1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、李 笑雨、安部 眞佐子、稲垣 敦、桜井 礼子、藤内 美保、佐藤 俊実、梅木 満長

大学院研究科の運営および計画に関する次の事項について審議した。

- (1) 修士課程の研究者養成コースと実践者養成コースを設置し、カリキュラムの作成および体制の整備を行った。
- (2) NP養成コースを対象にした長期履修制度を検討し、制度を整備した。
- (3) 大学を卒業した学生が引続き大学院に進学する前に臨床経験を積むために、休学期間の延長を認める大学院生実務経験推奨制度を検討し、整備した。
- (4) 看護職以外の受験を促進するための方策として、新専攻（健康科学）の設置を検討し、平成21年度に開設することに決定した。
- (5) 修士論文および博士論文の審査に関する事項を検討した。
- (6) 単位の実質化について検討し、テストの実施、対話を重視したtutorial方式の徹底、論文の指導のあり方の標準化について検討した。
- (7) 大学院生を対象としたアンケートを実施し、現在の教育・研究について改善の要望を調査した。調査結果を受けて、改善していく内容を院生に回答した。

## 1) 母性看護CNSWG

構成員 宮崎 文子、大賀 淳子、工藤 節美、小西 清美、高野 政子、伴 信彦

平成19年度専門看護師教育課程審査を受けるために、母性看護分野の専攻教育課程について申請書類をまとめた。本年度は、専攻分野専門科目を「周産期母子援助に関する科目」に変更して申請を行ったが、必要単位数の認定には至らなかった。

## 1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 桜井 礼子、林 猪都子、工藤 節美、佐伯 圭一郎、高野 政子、高橋 敬、関屋 伸子、高橋 賢一、伊藤 慎太郎、甲斐 倫明、草間 朋子（オブザーバー）

看護研究交流センターは、地域貢献活動として県内の看護職の現任教育に関すること、国際交流・国際協力活動、本学卒業生の継続教育事業に取り組んでいる。特に平成19年度は、平成20年度9月から開校となる認定看護師（訪問看護）コースの開設に向けた準備を行った。

### 1. 地域貢献・地域交流事業に関すること

#### 1) 看護職者を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

##### (1) 看護協会の事業への協力

- ・実習指導者講習会
- ・看護力再開発カリキュラム
- ・訪問看護研修ステップⅠ
- ・潜在助産師再就業サポート研修 等
- ・看護研究
- ・リスクマネジメント
- ・訪問看護研修ステップⅡ呼吸管理

##### (2) 講師派遣依頼

- ・大分県看護教員養成講習会
- ・看護研究
- ・看護教諭特別支援学校研修
- ・フィジカルアセスメント
- ・看護過程
- ・ターミナルケア 等

#### 2) 研究指導等

##### (1) 講師派遣

研究指導は施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師2名（人間科学講座から1名、看護系講座から1名）を派遣している。今年度は、7施設に対して14名の講師が派遣された。

##### (2) 統計・情報処理相談窓口の開設

昨年度から引き続き、統計・情報処理相談窓口を月1回開設した。相談件数は2件であった。

##### (3) アニュアルミーティングの公開

学内研究成果報告会を、今年度より全日公開とし、地域の看護職者等の参加をホームページ、および主な実習施設へFAXにて呼びかけた。その結果4名の参加者があった。

### 2. 国際協力・交流事業に関すること

#### 1) JICA「看護教育改善プロジェクト」への参加

##### (1) ウズベキスタンへの派遣

- 派遣期間と人数：平成19年8月15日（水）～25日（土） 5名
- 派遣期間と人数：平成19年9月21日（金）～10月3日（水） 2名
- 派遣期間と人数：平成20年2月12日（火）～16日（土） 2名

##### 2) JICAからの研修員の受入れ

- (1) ウズベキスタン長期研修（看護教育コース） 6名  
研修受け入れ期間：平成19年10月30日（火）～12月19日（水）
- (2) ウズベキスタン通訳研修 1名  
研修受け入れ期間：平成19年10月30日（火）～12月19日（水）

##### 3) その他の海外からの研修の受入れ

- (1) カナダ McMaster University 3名（NPプロジェクトと合同）  
研修受け入れ期間：平成19年5月25日（金）～29日（火）
- (2) 韓国老年看護学会 会員15名  
受け入れ期間：7月5日（木）～7月7日（土）  
研修目的：介護保険システムの運用の実態調査と関連施設の見学

### 3. 継続教育事業に関すること

#### 1) 卒業への研究支援・技術支援

第3回看護研究交流センターセミナーを平成19年8月4日（土）13時～16時、23講義室にて開催した。テーマは「専門看護師の役割とその活動」、講師はNTT東日本関東病院看護部・がん専門看護師小澤桂子氏に依頼した。参加者は本学の教員を含めて参加者37名、うち卒業生5名の参加であった。

#### 2) 卒業生の名簿作成（就職先ベース）の作業経過について



情報ネットワーク委員会、同窓会役員と協力して、卒業生の名簿作成の作業を行った。

#### 4. 知的財産・産官学連携事業に関すること

産学官交流集会に参加し情報を収集するとともに、産官学共同のためのe-seeds用教員プロフィールのパンフレットを作成し、関連機関への配布を行った。

#### 5. 訪問看護 認定看護師コースの開設準備

2008年度の開設を目指し、2007年8月に認定申請を行い12月に認定看護師（訪問看護）コースが認可された。申請作業のために、カリキュラム作成、学則等の作成、講師の依頼、実習施設の開拓等を行った。認可後平成20年1月からは、カリキュラム作成に関わる一連の作業の他に、広報活動、入試準備、設備・備品の整備等を行った。

継続教育の一環として「看護研究交流センターセミナー」を開催したが、卒業生の参加者が少ない傾向が続いており、今年度はメールでのお知らせの他に、卒業生が多く就職をしている県内の施設に卒業生個人宛でセミナーの案内を配布したが、効果はなかった。また開催時期が8月であったことも参加しにくい要因であったと考えられる。来年度は卒業生へのアンケートをもとにテーマおよび開催時期を検討したい。

また、研究指導の一環として、「統計・情報処理相談窓口」を継続しているが、利用数は少なかった。研究成果報告会（アニュアルミーティング）の公開についても、広報する期間が短かったこともあるが、参加者が少なかった。今後はホームページの充実を図るとともに広報に力を入れたと考えている。

### 1) インターネットジャーナルWG

構成員 草間 朋子、甲斐 倫明、G.T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、定金 香里、高波 利恵

看護系では国内唯一の電子ジャーナルである「看護科学研究」は、よりレベルの高い国際的なジャーナルを目指すため、PubMed登録申請をした。一方、学会大会等の各種イベントでの広報、チラシの作成、投稿規程や執筆要項の整備、編集委員会の準備と開催、第7巻第2号、第8巻第1号の審査・編集に関する実務が行われた。インターネットジャーナル「看護科学研究」第7巻第2号は平成19年9月に刊行され、本学ホームページ上 ([http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/7\\_2.html](http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/7_2.html)) で公開されている。

### 1-19 衛生委員会

構成員 【1号委員】高橋 賢一【2号委員】角 匡幸【3号委員】小野 順一【4号委員】影山 隆之、安部 正雄【オブザーバー】原田 幸代

職場巡視、定期健康診断結果の個別指導、保健室移動の検討などを行った。また、大学敷地内全面禁煙に対する取り組みを行い、12月の教育研究審議会平成20年4月1日からの全面禁煙が決定された。なお、大学が全面禁煙にスムーズに移行できるように、1月に学生・教職員を対象にした禁煙講習会を開催するとともに、個別相談にも対応した。

## 1-20 評価委員会

構成員 市瀬 孝道（学部長、理事）、甲斐 倫明（研究科長、理事）、高橋 賢一（事務局長、理事）、宮崎 文子（教授）

（1）平成18年度に実施した教員評価の見直しを行った。修正案は教員説明会を行って教育研究審議会に提案し承認された。

（2）平成19年度の教員評価を1月に実施し、評価結果を2月に各教員に配付した。

平成19年度に実施した評価結果および教員の質問・意見などを受けて、年度計画にしたがって評価のあり方とその反映の仕方について検討していく。

## 2 学内行事の概要

### 2-1 学年暦

前期

後期

#### 4月

- 6 入学式
- 9 オリエンテーション
- 10 2～4年次生授業開始
- 10, 11 新入生オリエンテーション
- 12 1年次生授業開始
- 10～20 前期履修登録
- 11, 18 健康診断
- 26 全学スポーツ交流会

#### 5月

- 14～ 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ (4年次生)
- 19, 20 若葉祭

#### 6月

- ～15 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ (4年次生)
- 11 前期後半授業開始
- 18～ 助産学実習 (4年次生選択)
- 19 開学記念日 (休講)
- 25～ 総合実習 (4年次生)

#### 7月

- ～6 総合実習 (4年次生)
- 10～18 初期体験実習 (1年次生)
- 21 夏季休業開始
- 22 オープンキャンパス
- ～27 助産学実習 (4年次生選択)

#### 8月

#### 9月

- 1 大学院(修士)入学試験
- 2 編入学, 大学院(博士)入学試験
- 6 授業開始
- 10～ 成人・老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習 (3年次生)
- 28 前期授業終了

#### 10月

- 1 後期授業開始
- 1～12 後期履修登録
- 21 看護国際フォーラム

#### 11月

- 10 地域ふれあい祭
- 18 特別選抜試験(推薦・社会人)
- ～30 成人・老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習 (3年次生)

#### 12月

- 3 後期後半授業開始
- 7 正午 卒業研究論文提出締切 (4年次生)
- 10～12 卒業研究発表会
- 18 進級試験 (2年次生)
- 22 冬季休業開始

#### 1月

- 8 授業開始
- 8～22 基礎看護学実習 (2年次生)
- 18 センター試験準備 (1,3,4年次生休講)
- 19, 20 センター試験

#### 2月

- 4～18 看護アセスメント学実習 (2年次生)
- 25 一般選抜試験(前期)および特別選抜試験(私費外国人留学生)(休講)
- 下旬 看護師・保健師および助産師国家試験
- 29 後期授業終了

#### 3月

- 1 春季休業開始
- 12 一般選抜試験(後期)
- 18 卒業式

## 2-2 オープンキャンパス

今年度から日曜日開催とし、7月22日（日）の10時から16時30分間に午前と午後の部に分け開催した結果、午前178名（県内165名、保護者26名）、午後52名（県内39名、保護者9名）と昨年以上の参加を得た。また、今年度は新たに学生の協力を得て、タキオソーラン（オープニング）、合格体験談、お茶会を取り入れた結果、在校生との交流が増して好評であった。参加者は、4つの模擬授業143名、合格体験談67名、お茶会39名、食堂利用者41名、売店利用者30名であった。大学見学会は、大学指定日の8月24日（金：13時～15時。参加申し込み8名中6名参加）と、8月27日（月：10時～12時。申し込みなし。飛び入り参加3名）に行き、計9名の見学者があった。また、指定日以外の8月16日（木：2名）と9月4日（火：2名）にも見学の希望があり、参加者計4名に対して大学紹介や施設案内を行った。

## 2-3 公開講座

一般県民を対象とする有料公開講座は、「生活と健康」というメインテーマで全4回開講した。延べ参加者数は93名であった。受講料は1回500円、高校生以下は無料で、各回のテーマ（日程；講師）は以下の通りであった。

「知っておきたい食中毒の知識／知っていますか、正しい手洗い」（7/12；伴、伊東、松尾）

「認知症の予防には何ができるか？」（7/19；大賀）

「美しい骨づくりー測ってみよう自分の骨」（7/26；岩崎、佐藤、岡崎）

「快適な睡眠と健康」（2/27；影山）

第1～3回は学内で、最終回は看護研究交流センターで開講した。第1～3回については、全回受講者4名に修了証を授与した。

若葉祭（5/19～20）では無料公開講座として、「1万人がしている介護予防運動！お元気ちゃんちゃん体操」（稲垣）、「易しい英語で楽しく読んで、めざせ100万冊！英語多読講座」（シャーリー、宮内、岡崎）の2つを開講し、約50名が参加した。

地域ふれあい祭り（11/10）では、公開講座マラソンと題した無料公開講座を連続開催した。テーマ（講師）は、「身のまわりの気になる健康へのリスクー食品添加物、電磁波、タバコ煙」（甲斐倫）、「災害に強いまちづくりーいざというときの備え」（桜井）、「海外へのトラベルはトラブルがいっぱい」（三舟）、「あなたとわたしの更年期」（宮崎）、「当たるも八卦、当たらぬも八卦ー生活の中の確からしさ」（佐伯）、「地域に根ざした大学をめざして」（市瀬）。

## 2-4 看護国際フォーラム

第9回看護国際フォーラムの大分県看護協会との共催

「看護職のためのストレスマネジメント」をテーマに、平成19年10月21日に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。韓国から1名、国内から2名の講師を招聘した。参加者は279名と盛況であった。

## 2-5 ソウル大／看科大研究交流会（インターナショナル・ミーティング）

今年度は第7回NP国際会議として、「NP教育の進展と質の高い保健サービスの提供に際してのNPの効果」をテーマに、平成20年3月17日に本学23講義室で開催した。米国Pace大学看護学部、Washington大学看護学部およびソウル国立大学校看護大学から1名ずつの講師を招聘した。

## 2-6 看護研究交流センターセミナー

第3回看護研究交流センターセミナーを下記の要領で開催した。参加者は本学の教員を含めて37名、うち卒業生は5名の参加であった。また、講演のあと、「専門看護師に求められる高度な看護実践技術とは」－看護師のキャリア・アップを考える－というテーマでディスカッションを行った。

-----  
テーマ：「より高度な看護実践を目指して」

日 時：平成19年8月4日（土）13時～16時

場 所：大分県立看護科学大学 23講義室

講 演：「がん専門看護師の役割とその活動」

講 師：小澤 桂子（がん専門看護師、NTT東日本関東病院看護部・がん相談支援室）

司 会：赤司 千波（大分県立看護科学大学 成人・老年看護学）

小西 清美（大分県立看護科学大学 母性看護・助産学）  
-----

## 2-7 NPプロジェクト

構成員：林 猪都子、甲斐 倫明、草間 朋子、赤司 千波、安部 正雄、江藤 真紀、小野 美喜、  
工藤 節美、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、福田 広美、宮内 信治、八代 利香

今年度は文部科学省の競争的資金：平成19年度大学教育国際化推進プログラム「21世紀型のナースプラクティショナー教育—韓国・米国に学ぶ国際的水準の実践型教育の構築を目指して—」が採択された。よって、教員9名を韓国・米国に2週間から4週間派遣し、海外研修を行った。

平成20年度から開講する大学院NP養成コースの入学者を募集して3名の入学者が決定した。また、NP養成コースの修了要件、共通科目と専門科目のカリキュラム、NPに求められる能力を作成した。

NPのモデル地区の検討として、5月10日（木）に佐伯中央病院、8月6日（月）に鶴見の太陽にて会議を開催した。無医地区の実態調査として佐伯地区、竹田地区での実態調査を予定している。

5月28日（月）に第5回International Meeting「高度実践看護師養成のための教育の変革」、11月1日（木）に第6回International Meeting「日本における高度実践看護師はいかにあるべきか」（大分県医師会と大分県看護協会による後援）、3月17日（月）に第7回International Meeting「NP教育の進展と質の高い保健サービスの提供に際してのNPの効果」（大分県看護協会による後援）を開催した。また、7月27日（金）に九州大学大学院医学部教授 信友 浩一先生の講演会と12月18日（火）に沖縄県看護協会から福盛 久子先生、新里 厚子先生による「沖縄県における駐在保健婦の活動について」の講演会を開催した。

12月8日（土）日本看護科学学会交流集会にて「大学院修士課程における高度な実践看護職の養成に向けて」をテーマに、東京大学から保健師教育、聖路加看護大学から助産師教育、本学からNP教育について発表した。また、平成20年2月大学教育改革プログラム合同フォーラムにてポスター発表を行った。

## 2-8 姉妹校学生交流

### 1) 学部生のソウル国立大学校との派遣受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（7月22日～8月5日までの2週間）、学部生5名、大学院生1名、教員1名の短期派遣（7月29日～8月5日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療制度、福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

### 2) 本学の学部生および大学院生の派遣

学部生6名と同行教員2名が短期派遣（8月19日～26日まで8日間）、大学院生2名を長期派遣（8月12日～8月26日まで2週間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療、福祉、看護について視察等を行い理解を深めた。報告はWebに掲載した。

## 2-9 若葉祭（大学祭）

3年次生と2年次生により構成された若葉祭実行委員会（布施 芳史・佐藤 圭祐委員長）が企画・運営の中心となり、学生・教職員全員の参加により開催された。ステージイベントや模擬店のほか、恒例の健康チェック、教職員と学生の協働によるコラボイベント、公開講座、地域の方の参加によるフリーマーケット等、たくさんの企画に関係者の暖かいご支援・ご協力をえて、無事成功裡に幕を閉じた。

日 時 平成19年5月19日（土）～20日（日）

テーマ ‘PEACE！’

参加者 約2000名

ステージイベント

実行委員プレゼンツ、腕相撲、カラオケ、ゲーム「友情診断」、Mr. ナースマン、抽選会、スカ☆バンド・ライブ、ゲーム「イントロどん」、「絵心どん」、「当てたらドボン」、若手お笑いライブ（とろサーモン、ネゴシックス、若井おさむ）、Ms. ナースコンテスト、鐵心太鼓×TAKIOソーラン

室内イベント

体育館で遊ぼう、ヨガ教室、フラワーアレンジメント教室、お茶会

教職員と学生のコラボイベント

健康・体力チェック、栄養相談、赤ちゃんのだっこ体操、妊婦体験、応急救護体験、高齢者疑似体験、禁煙相談、小児の救急法

公開講座

お元気しゃんしゃん体操（体育館）、英語多読講座

## 2-10 地域ふれあい祭

11月10日（土）に、「健康を科学する」というテーマで第2回地域ふれあい祭を開催した。今年度は、iichico総合文化センターで行い、大分市の多くの地域の方々と交流を持つことができた。教員の公開講座マラソン、看護大生による健康科学講座、相談体験コーナーとして、健康チェック、介護予防体操、骨密度チェック等を実施した。

## 2-11 アニュアル・ミーティング

平成19年度のアニュアルミーティングを平成20年3月6日に公表形式で開催した。奨励研究9題、プロジェクト研究2題、先端研究3題、一般演題7題の発表があった。また、今年度は、全演題を学外公開とし、8名参加があった。

開催場所 23講義室

開催時間 9時25分～16時15分

司会 小西 清美

1. 開会挨拶 自己評価委員会 委員長 赤司 千波

2. 演題

セッション I (9時30分～10時45分)座長：小西 清美

- 1) 独居高齢者の生活見守りシステムの開発—実用化に向けた取り組み— 品川 佳満
- 2) フィジカルアセスメントにおける口腔観察の意味 安部 恭子
- 3) 森林歩行のストレス低減効果 稲垣 敦
- 4) マタニティビクスの精神的効果—ビアンカZ(ストレス測定器)を使用して— 宮崎 文子
- 5) 精神科病院機能の評価に関する研究—「あるべき姿」の議論に基づく評価マトリックスの設定— 平野 互

セッション II (11時00分～12時15分)座長：吉田 成一

- 6) ディーゼル排気微粒子抽出物が誘発するアトピー性皮膚炎増悪作用におけるTSLPの関与について 定金 香里
- 7) 尿毒症物質と骨代謝 岩崎 香子
- 8) 放射線誘発DNA初期損傷の修復動態に関する研究—バイスタンダー効果による損傷が修復されない可能性の検討— 小嶋 光明
- 9) クリンゲルの生理機能部位と分子形態的特徴—タンパク質・データベース(PDB)を用いた生命情報学的研究— 高橋 敬
- 10) マウス白血病特異的遺伝子変異のin vivoスクリーニング 伴 信彦

セッション III (13時30分～14時45分)座長：松尾 恭子

- 11) 小児看護学実習における看護技術の実態と学内演習の課題 田中 美樹
- 12) 大分県自殺実態基礎調査の概要 影山 隆之
- 13) 在宅終末期がん患者家族に対する訪問看護師の援助内容の分析 安東 恵子
- 14) ボランティアに生きるある余命を宣告された方から得られた—ケーススタディーボランティアの意味に注目して— 河野 梢子
- 15) An Analysis of English Language Entrance Examinations at Japanese Nursing Colleges and Universities Gerald Shirley

セッション IV (15時00分～16時15分)座長：宮内 信治

- 16) アスベストによるマウス雄性生殖機能への影響 吉田 成一
- 17) 肘屈曲動作における効率的な力発揮  
—より負担度の少ない介助動作の開発を目指して— 吉武 康栄
- 18) 「大学間」「ライブ型」「遠隔講義」における学習環境の構築 吉村 匠平
- 19) 平成19年度「野津原プロジェクト」活動報告 桜井 礼子
- 20) 本学におけるNP教育のスタートにあたって 赤司 千波

3. 講評と閉会挨拶 大分県立看護科学大学学長 草間 朋子



### 3 教育活動

#### 3-1 平成19・20年度入学者選抜状況

##### 1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

##### 選抜の区分及び募集人員

###### 平成19年度

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員				
			一 般 選 抜		特 別 選 抜		
			前期日程	後期日程	推 薦	社 会 人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80人	40人	10人	30人	注1) 5人以内	注2) 若干名

注1) 社会人の募集人員「5人以内」は推薦の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

##### 入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者			
					計	県 内 (率)	男 (率)	
特 別	推 薦	62	62	28	2.2	28	28( 100.0)	0( 0.0)
	社会人	6	6	2	3.0	1	1( 100.0)	0( 0.0)
	私費外国人留学生	1	1	1	1.0	1	0( 0.0)	0( 0.0)
	計	69	69	31	2.2	30	29( 96.7)	0( 0.0)
一 般	前 期	182	171	44	3.9	37	19( 51.4)	4( 10.8)
	後 期	175	89	18	4.9	17	2( 11.8)	4( 23.5)
	計	357	260	62	4.2	54	21( 38.9)	8( 14.8)
合 計	426	329	93	3.5	84	50( 59.5)	8( 9.5)	

##### 試験教科等

区 分	教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成18年 11月19日(日)
	社会人		
	私費外国人留学生	総合問題、面接	平成19年 2月25日(日)
一 般	前 期	総合問題、面接	平成19年 2月25日(日)
	後 期	総合問題、面接	

平成 20 年度

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員					
			一 般 選 抜		特 別 選 抜			
			前期日程	後期日程	推 薦		社 会 人	私費外国人 留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80 人	35 人	10 人	30 人	5 人	注 1) 5 人以内	注 2) 若干名

注 1) 社会人の募集人員「5 人以内」は推薦（県内）の 30 人に含める。

注 2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 35 人に含める。

入学者選抜試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県 内 (率)	男 (率)
特 別	推 薦	県内	80	80	2.8	29	29( 100.0)	2( 6.9)
		県外	33	33	5	6.6	5	0( 0.0)
	社会人	4	3	1	3.0	0	0( 0.0)	0( 0.0)
	計	117	116	35	3.3	34	29( 85.3)	2( 5.9)
一 般	前 期	188	179	42	4.3	37	12( 32.4)	3( 8.1)
	後 期	160	99	14	7.1	12	3( 25.0)	1( 8.3)
	計	348	278	56	5.0	49	15( 30.6)	4( 8.2)
合 計		465	394	91	4.3	83	44( 53.0)	6( 7.2)

試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成 19 年 11 月 18 日 (日)	平成 19 年 11 月 1 日 (木) ~ 11 月 8 日 (木)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成 20 年 2 月 25 日 (月)	平成 20 年 1 月 28 日 (月) ~ 2 月 6 日 (水)
	後 期	総合問題、面接	平成 20 年 3 月 12 日 (水)	

## 2) 特別選抜試験

### 平成 19・20 年度

#### ① 推薦選抜

平成 19 年度においては大分県内の高等学校卒業見込者の中から、平成 20 年度においては、大分県内外の高等学校卒業見込み者の中から、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。

#### ② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

## 3) 一般選抜試験

### 平成 19 年度

平成 19 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4 教科 5 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学B』 から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」から 1 科目を選択		
		「生物Ⅰ」（必須）		
外国語	『英語』（必須）			
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

## 平成 20 年度

平成 20 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4 教科 5 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学B』 から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」から 1 科目を選択		
		「生物Ⅰ」（必須）		
外国語	『英語』（必須）			
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

### 3-2 平成19・20年度3年次編入学試験状況

#### 1) 平成19・20年度3年次編入学（一般）

##### 概要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

##### 募集人員

学部	学科	募集人員
看護学部	看護学科	10人

#### 平成19年度

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
大学	2	2	2	—	2	2(100.0)	0(0.0)
短期大学	2	2	—	—	—	—	—
専修学校	14	14	8	—	4	4(100.0)	0(0.0)
合計	18	18	10	1.8	6	6(100.0)	0(0.0)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成18年 9月3日(日)	平成18年 8月1日(火)～8月8日(火)

#### 平成20年度

##### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
大学	5	5	5	—	5	4(80.0)	0(0.0)
短期大学	2	2	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
専修学校	18	18	6	—	1	1(100.0)	0(0.0)
合計	25	25	11	2.3	6	5(83.3)	0(0.0)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成19年 9月2日(日)	平成19年 8月1日(水)～8月8日(水)

## 2) 平成 20 年度 3 年次編入学（社会人）

### 概 要

看護師又は保健師として就労しており、助産師の資格を希望する者に対して、3年次編入学（社会人）試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者を対象に、総合問題及び面接により実施した。

### 募集人員

学 部	学 科	募 集 人 員
看護学部	看護学科	若干名

### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
大 学	0	0	0	—	0	0( 0.0)	0( 0.0)
短 期 大 学	1	1	0	—	0	0( 0.0)	0( 0.0)
専 修 学 校	2	2	1	—	1	1( 100.0)	0( 0.0)
合 計	3	3	1	3.0	1	1( 100.0)	0( 0.0)

### 試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
英 語 総 合 問 題 面 接	平成 19 年 11 月 18 日 (日)	平成 19 年 11 月 1 日 (木) ~ 11 月 8 日 (木)

### 3-3 平成19・20年度大学院博士課程（前期）入学試験状況

#### 平成19年度

##### 概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	6名

##### 試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	4	4	3	1.3	3	3(100.0)	0(0.0)

##### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成18年 9月2日（土）	平成18年 8月1日（火）～8月8日（火）

#### 平成20年度

##### 概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

##### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻コース名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成コース	10名
			実践者養成コース	

##### 試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	17	17	13	1.3	12	10(83.3)	2(16.7)

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成19年 9月1日(土)	平成19年 8月1日(水)～8月8日(水)

## 3-4 平成19・20年度大学院博士課程(後期)入学試験状況

### 概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

### 募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(後期)	看護学専攻	2名

### 平成19年度

#### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	3	3	3	1.0	3	3(100.0)	0(0.0)

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成18年 9月3日(日)	平成18年 8月1日(火)～8月8日(火)

### 平成20年度

#### 試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	2	2	1	2.0	1	0(0.0)	0(0.0)

### 試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成19年 9月2日(日)	平成19年 8月1日(水)～8月8日(水)



### 3-5 教育

#### 3-5-1 生体科学研究室

##### 1 教育方針

生体科学では、正常な身体の構造と機能を系統的に理解してもらうために、あえてテキストの順番を再編成し、一般生理学の基本事項からスタートした。シラバスには各章の内容をキーワードで表現し、学習の指針となるように十分配慮した。

## 2 教育活動の現状と課題

骨格系や筋肉、循環、神経系等は小冊子を作成し、常に参照できるように取りはからった。またそれぞれの作詞を行い覚えやすくアレンジした。この小冊子は解剖実習見学のときに役立った。

今年度は生理学全般を小冊子にまとめ、全員に配布した。左に重要事項、右に赤字でその解説と図表を記述し、常に自分で参照できるようにした。

前年度と同じく「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を学生に復読本として購入させた。復習するのに効果があり、基本的な認識が得られるように十分に指導した。

骨格や筋系のプラスチックモデルを繰りかえし活用し、できるだけ具体的なイメージを持てるようにした。それと並行して、パワーポイントによるビジュアルな講義（分子と細胞生物学の動画）を通して、できるだけ具体的な知識を会得してもらうことを目指した。

頭蓋骨に関してはヒト、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの違いを立体折り紙で勉強してもらった。かなり興味をもってくれた。

本年度もできる限り講義に実験を導入した。1) 赤血球の溶血現象を目で観察してもらい、それを説明してもらった。2) フィブリノーゲン溶液にトロンビンを添加し、凝固するまでの時間を腕時計で測らせた。短時間で凝固（ゲル化）するようすに感嘆の声があった。3) メビウス環を用いて、裏と面の不思議さを体験させ、シートから形成される、身体の構造の整合性を理解してもらった。できるだけ講義には、自然科学に対する興味や疑問が出易くなるように、また理解が深まるように努力した。

今年度も「シャトルカード」を導入し、講義の度ごとに情報交換した。講義内容や、効果の程度、興味もてるかどうかを把握するのに十分に役立った。「レポートの書き方」を購入させ、レポートの書き方の指導を行い、課題を出し、提出してもらった。

今年度は比較的良く勉強する態度がみられた。「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を購入させたこと、また実験による理解、パワーポイントに挿入した動画によるビジュアルな教育が役立った。

大きな課題は何と言っても時間的な制約であってテキストの内容（解剖と生理学）からすると、前期だけで理解させるには、制約が伴う。できるだけハイスループットで、集中型の講義が望まれるが、一方、勉学には時間的なゆとりも大切な要素であると考える。

構造機能論の基盤は骨格系である。骨格系に対する興味と理解が他の理解の導火線になるため、本年度も骨格系や筋系の名称を覚えやすくするために、変え歌と楽曲を披露した結果、興味を引き出す効果があった。小テストでは全て漢字で書ける学生が多かった。

神経系が一般に苦手なので、今年度は講義と演習および演習問題で十分に理解させるように配慮した。解剖実習見学の経験も相まって効果があった。

一般に、生体科学の理解に必要なリテラシーをしっかりと把握させるため、1) 骨格系や筋肉系を中心とした構造機能小冊子の充実を計る。2) 全講義内容をキーワード表として完成する。この表は関連看護系の講義と比較検討できるために、自ら勉学しながら記入できるように配慮してあるので大いに活用してほしい。3) 生理学全般をまとめた小冊子は復習に効果が期待できる。

次年度はこれまでの成果を踏まえ、引き続きさまざまなことを考え実行し、勉学の効果がでることを期待したい。とくに多少の時間を割いても、問題を解かせる訓練をすること、そして、上の学年に繋がるような指導をすることが重要である。総じて興味や好奇心をいかに引き出すかが、自律的に勉学するためには特に大切であると感じている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 生体構造機能論

1年次 前期

高橋 敬、安部 眞佐子、岩崎 香子

生体構造機能論では解剖・生理学のテキストを基盤として、60兆の細胞が織りなす身体の機能がいかに構造に依存して成り立っているのかを、そのヒエラルキー、ホメオスターシス、内部環境中心に講義した。内容を十分に理解してもらうために、生命維持にはどれだけの分子や細胞が関係しているのかを力説した。時間数が足りない点は演習などで埋め合わせた。できるだけコンパクトにし、いかに効果をあげるのかがポイントである。そのためにはある程度の自律した学習ができるように指導をし、実験や問題提示などを行い好奇心や興味を引き出すことが大切である。

#### 2) 生体代謝論

1年次 前期前半

安部 眞佐子

生化学を身近に感じさせるために、看護と栄養のかかわり、食事バランスガイドの説明から入り、栄養素の簡略な解説をして、生体代謝論の導入とした。看護についてほとんど学んでいない状態から栄養学の導入をするため、いささか栄養学を学ぶ動機付けに欠ける感があった。食事バランスガイドについては実際に自分の食生活の振り返りのツールとして利用するために1日分の記入を行い、自己分析をさせた。

次いで、生体代謝の基本事項として、糖質、脂質、タンパク質、核酸の生体分子の特徴を解説した。そのうち、代謝に入り、代謝を統合するものの例として血糖値維持をとりあげホルモンの作用について解説した。それぞれの生体分子について、主にエネルギー代謝を中心にすえて講義し、代謝経路の連関を理解させるように努めた。最後に、情報代謝として、遺伝子による情報伝達がいかにタンパク質として発現するか、そして、世代を超えて伝わる遺伝子という視点を与え、遺伝学の基礎について触れた。

#### 3) 生体科学演習

1年次 後期後半

高橋 敬、安部 眞佐子

生体代謝論で食事バランスガイドにより栄養学の導入を行っているので、続いて演習の時間には栄養学の本論に入った。まず、人体を中心とした生体代謝論の中では取りあげられなかった食物繊維の解説を行った。次いで食品としての脂肪の種々の生理作用、タンパク質を窒素平衡としてとらえる考え方、ビタミン、ミネラルの作用について講義した。さらに半定量型の食物摂取頻度調査により自己の食事を詳しく分析する方法を体験した。まとめに栄養状態の判定法として、他の食事調査の種類、身体観察、臨床検査値の意義を解説し、身体計測法としては、上腕周囲の周囲径、皮下脂肪の測定を学び、実測した。先の食事調査の結果と身体計測測定値を活用し、自己の栄養状態を判定し、レポートとして提出させた。

カラーリングブックを利用した解剖と生理学に関する演習では、キーワード表を配付し、また問題集を与えて解かした。カラーリングブックは、解剖学と生理学を含むもので、真剣に取り組めばとても良い学習になる。10班に分け、グループで課題をまとめてパワーポイントで発表してもらった。出席とレポートと試験で評価した。

#### 4) 生体科学特論

4年次 前期後半

安部 眞佐子

特論では、栄養学のトピックスを講義した。内容は大学でこれまで学んでいないものを取りあげた。この学年はまだ食事バランスガイドを講義していなかったため、食生活指針や食育基本法にふれつつ諸外国の食事指導ツールとの比較も行い解説した。また自己記入をさせた。ついで、健康補助食品について分類のされかた、特別保健用食品との関わり、食品表示法の国際規格などを解説した。特に食品についての情報収集の留意ポイントには力点をおいた。健康補助食品の情報収集の演習として健康・栄養研究所のページにアクセスし自分の関心のある食品について情報を収集し、1人ずつ発表させた。ついで、テーラーメイド医療としての遺伝子診断の導入として、NHKビデオを見てレポートを提出させた。ビデオは栄養との関わりのあるリボ蛋白質関連遺伝子多型をテーマとしたもので、栄養と遺伝子多型との関わりを理解させるには有用であった。最後にライフステージ別栄養の問題を取りあげ、国民健康・栄養調査の結果や、厚生労働省が出している各種の年代別ガイドラインについて解説を行った。

#### 5) 生体構造機能特論

2年次 前期前半

高橋 敬、岩崎 香子

基本的でアップツーデイトなものをピックアップし、解説した。クローン生物学、老化の生物学、および再生医学については力点をおいた。クローンをよく理解することは、現代医療と生物の多様性を理解する上にもっとも基本的である。そのために、エクセルを用いてシミュレーションできることを体験させた。出席とレポートで評価したが、とくにクローン人間や臓器移植には興味をもったようである。またこの講義では医療に関わること（人工受精、クローン人間、老化問題）を具体的に触れ、自らが考える習慣がつくように配慮した。

#### 6) 健康科学実験 I 組織学

高橋 敬

組織学は目で見て手で触れ、観察することがもっとも基本的なものなので、ヒトやラットの組織切片を光学顕微鏡で、1人3種類のプレパラートを観察させ、スケッチさせた。さらに光学画像のもつ意味と、アナログ画像、デジタル画像との区別を解説した。実験を通して、小さな構造の大きな機能的な役割に感嘆し、少しでも興味をもち、理解が深まるように留意した。正常な構造を理解するばかりでなく、構造に科せられた機能にも注意を喚起した。

#### 7) 健康科学実験 II 血液生化学

安部 眞佐子

血液学で一番基本的なものである血液生化学実験を担当した。血液中の酵素活性（GOT、GPT）、タンパク質の分析、血糖値測定など血液検査でも行われている事項について詳しい説明を行った。

## 4 卒業研究

- ・培養がん細胞とそのMPが提示するフィブリン溶解反応の解析
- ・がん細胞とそのMPによるフィブリン凝集の生理学的意義
- ・上皮細胞が形成する2次元単層シート：幾何学的解析とその意義
- ・終末糖化産物（Advanced glycation endproducts: AGEs）が骨芽細胞に与える影響
- ・妊娠期の女性の食物アレルギーに対する意識調査
- ・大分市における乳児期の食物アレルギー児の実態把握と対応

## 3-5-2 生体反応学研究室

### 1 教育方針

生体反応学研究室では看護の基礎教育の一貫として、身体の基本的なメカニズム、体の変調、病態、生体内に侵入する微生物、薬物の作用等を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する種々の疾病、その発生メカニズムを科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらが2年次～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

### 2 教育活動の現状と課題

本研究室では生体反応論、生体反応学演習、病態特論、微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。看護学生はこれらの基礎科目を学ぶことの意識・関心が低くいためか、これらの科目の理解度が低く、2年次～4年次の実習に結びつけられていない場合が多い。看護実践を行ううえで疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識できるように、より看護の視点から講義を進めている。教育上の工夫として、生体反応学演習では、看護疾病病態論の講義に繋げるために、病理学各論の講義を行い、看護を行う基礎となる疾病病態を理解させるのに努めた。生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 生体反応論

1年次 後期

市瀬 孝道

病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

## 2) 生体反応学演習

1年次 後期後半

市瀬 孝道

生体反応学演習では病理学各論の講義を行い、病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患。

## 3) 生体微生物反応論

1年次 後期前半

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、を理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

今年度より、講義回数を8回として行った。そのため、内容を整理し、他の講義で別途習得可能な内容を省略し、重要な部分を中心に講義を行った。

## 4) 感染免疫学

2年次 前期前半 / 1年次 後期後半

吉田 成一

1年次後期（今年度入学者は1年次後期前半）に行った生体微生物反応論をもとに、病原微生物に対する生体の防御反応について理解させることを目標に講義を行った。また、免疫学の最新の知見も併せて講義した。学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。また、受講者は講義を受けるだけでなく、自ら学習し知識を習得しないと身に付かないと言うことを適宜、喚起した。

## 5) 生体薬物反応論

2年次 前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。内容が多岐に渡るため、今年度から講義回数を増やし、学生が余裕をもって学習できるようにした。また、他の科目で重複する内容を削除することで効率よい講義になるよう努めた。

## 6) 病態特論

4年次 前期

市瀬 孝道

これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを、本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的に行っている。本年度は病気の地図帳を基に、炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。また得に理解力が弱い免疫・アレルギーについて病態サンプルを見せながら説明、理解させた。

## 7) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

ラット静脈血およびマウス腹腔洗滌液を用い、貧血・感染症に関わるヘマトクリット値測定、CRP検査、赤・白血球数測定、血球形態観察を行った。学生全員が理解し容易に実施できるよう、各検査の意義・原理・手技について図、写真、見本試料を用いて説明した上、デモを行った。血球の形態観察では、各々が作成した塗抹標本から、好酸球、リンパ球、肥満細胞等の血球を見つけ出せるよう、その特徴を詳しく説明した。また、貧血の赤血球恒数を算出し、貧血の診断を行う考察を行った。

## 7) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

## 7) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段として実験動物として用いられているラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

## 4 卒業研究

- ・アスベストによる肺の炎症と炎症局所DNA損傷物質の検出
- ・界面活性剤原料がアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響
- ・大気中に含まれる微粒子の胎仔期暴露が雄性生殖機能に与える影響
- ・柑橘果皮抽出成分によるアトピー性皮膚炎軽減効果
- ・柑橘果皮抽出成分に含まれるアレルギー抑制作用を有する物質の検索
- ・マウス喘息モデルを用いた柑橘種子抽出成分のアレルギー低減効果の検討

## 1 教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体験して感じるとともに、ヒト・人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年、臨地において運動処方や健康運動が重要になり、看護職にも運動の理解や指導能力が期待されて来たため、それに応えられる知識および実践能力を身につけることを目指している。さらに、自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために運動習慣を身につけることも重視している。学生時代から健康と運動の関係を自分の体を通じて知識および実技両側面から捉えることにより、将来、自分の健康管理に役立つだけでなく、他者（たとえば、患者、地域住民）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育ができるよう教育を行っている。また、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、科学自体については教育されていない。大学では科学教育が重要であるため、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方などを学ぶ機会を取り入れている。

## 2 教育活動の現状と課題

大学生になると、ライフスタイルが変わる学生も多い。さらに、本学においては体育実技の時間も減るに加えて、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加が著しい。そこで、1年次生には年度始めと終わりに体力測定を実施し、1年間の自分の体力や身体組成の変化を自分で調べることにより、自身の身体状況を自覚させた。そして、身体運動科学では、この身体状況が変化する理由を生理学的に講義し、理論とその実際を感じさせるよう試みた。健康運動では、種々のニュースポーツを体験させ、体を動かす楽しさを体験させ、福祉レクリエーションについて考えさせている。2年次の健康運動論では、健康や体力と運動の関係を解説し、健康運動学演習では、日常生活を記録したり、日常生活の問題点を洗い出し、改善策を立てさせている。3年次の運動療法特論では、運動による疾病の予防や治療についてより専門的に解説し、4年次の運動指導特論では、種々の人々を対象とした運動やレクリエーションを体験させ、指導のポイントを教授した。大学院修士課程の健康増進科学特論でも、種々のME機器を用いた健康測定や評価を体験し、レポートにまとめさせた。以上のように、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れで、体験と科学的知見に基づいた教育を進めるよう努力する予定である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 身体運動科学（体育I）

1年次

吉武 康栄

単純に身体を動かすだけでなく、自分の身体機能を論理的に理解した上で身体運動を発現させる、また他者に対して運動の重要性を論理的に説明し実践できるようになる、ということをも目的とし、講義と実技を組み合わせた授業形態をとった。具体的には、a) エネルギー供給系＝脂肪燃焼（講義）→実践、b) 伸張反射（講義）→ストレッチによる柔軟性向上→実践、c) 運動単位の動員様式→筋力トレーニングによる筋肥大（講義）→実践、という具合に、単なるレクリエーション的な授業にはならないよう系統立てて授業を行うよう努めた。



## 2) 健康運動（体育II）

1年次 後期

稲垣 敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションやニュースポーツを実施し、運動量の確保にも十分に配慮した。一方で、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、レクリエーションの高齢者や障害者における重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

来年度は、各自の体力測定の結果を健康運動論の教材として活用したい。

## 3) 健康運動論

2年次 前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

来年度は、学生とのコミュニケーションをよりいっそう増やしてゆく。

## 4) 健康運動学演習

2年次 後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、基底面・重心・平衡性、筋力・パワー、エネルギー消費量等の測定実習も行った。

選択科目であるが、例年、受講生が多いので、実習の効率を高めて一人当たりの指導・実習時間を確保したい。

## 5) 運動療法特論（運動処方特論）

3年次 後期後半

稲垣 敦

概論では、運動処方についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

来年度は運動指導の指針・基準2006についても講義や実習を含める。

## 6) 運動指導特論

4年次 前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子

精神障害者の運動表現療法、マタニティビクス、子供のレクリエーション、介護予防運動、肩こり・腰痛体操、ウォーキング/スローピング、ネイチャーゲーム、ヨーガ等を体験し、指導法について講義した。

来年度は、アクアビクスや登山の可能性を検討する。

## 7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

## 7) 健康科学実験 X 心電図の成り立ちと心拍変動解析

吉武 康栄

看護の現場で頻繁に接することが多い心電図測定を行った。まず、心電図の成り立ちについて電気生理学的観点から理解できるよう講義を行った。続いて、学生全員が電極を装着し、自身の心電図波形をリアルタイムで確認した。さらに、生活習慣病外来などで用いられることが多い心拍変動解析による心臓自律神経活動評価を行った。

最終的には2年後の卒業論文作成を念頭に置き、できるだけ論理的な文章作成についての講義を行った上で、レポート作成を行わせた。

## 4 卒業研究

- ・ 上肢において効率的な力発揮を遂行するコツ～より負担度の少ない介助動作の開発を目指して～
- ・ 携帯電話を用いた会話が力調節能力に及ぼす影響
- ・ 呼吸循環器系動態からみた登山ルートの差異
- ・ 森林歩行のリラクゼーション効果

## 1 教育方針

人に関する深い理解を基盤とし、人の喜びや苦しみを分かち合える豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムの編成をとっている。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 外の世界を認識する存在としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、3) 人間関係の形成方法についての理解（「コミュニケーション論」）、4) 対人援助技術の習得（「行動療法論」「人間関係学演習」「心理アセスメント論」）、5) 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「行動療法論」「心理アセスメント論」）、6) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤担当科目）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「人間と社会」「家族と法（法学入門）」「経済学入門」「大分の歴史と文化」「文化人類学入門」）。

講義にあたっては、個々の心理現象を学生の日常生活場面における体験や看護実践と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

## 2 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標である、人のこころの基本的な知識の習得、集団・個人との人間関係の理解、対人援助技術の理解については、これまで同様である。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータを教育活動の改善へと結びつけることに関しても適宜行っている。本研究室の課題としては、他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を今後とも進めることがあげられる。

## 3 科目の教育活動

### 1) 人のこころの仕組み

1年次 前期

吉村 匠平

認識装置としての人の機能の特徴、2年前期「行動療法論」の理解に必要な学習心理学の知識、人の発達のプロセス等について、小実験やVTR視聴などを併用し講義を進めた。授業時間の厳守、パワーポイントファイルを用いた講義内容の復習については、十分に達成することができた。また、前年度までの課題であった「防衛機制」の講義中の位置づけについても、外の世界の認識という流れの中で位置づける事ができた。今年度は、Web上に「防衛機制」に関する練習問題を作成し、学生が好きな時間に自己ペースで学習できる環境を構築した。

## 2) コミュニケーション論

1年次 前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に、3回のグループエクササイズ、行動観察の方法とまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。昨年度からプロセスレコードの解説と作成の体験を導入している本科目の教育目標は、従来と同様、看護実践において必要不可欠なコミュニケーションの基礎を理解し身につけることにある。具体的には、相手の発信している情報に気づくこと、受け取った情報を自分がどのように理解しているのかを知る(自己を振り返る)、相手に対して情報を発信すること。そして、コミュニケーションは情報の受信－理解－発信(フィードバック)の繰り返しから成立していることを体験的に理解することである。

また、改善点については、(1)グループエクササイズの方法などについては、昨年度までの改善によって、一定の効果を得られたと考えられる。(2)行動観察については、昨年度よりも、具体的な観察計画モデルを示した上で実施した。(3)コミュニケーションスキルに関する講義については、実践となる人間関係学演習は1年後というカリキュラムになってしまっており、知識と体験を連続させて学ばせることが難しい。この点は、開講年度の変更、必修/選択など、カリキュラム変更が必要となることであるので、機会をみて修正をしていきたい。

## 3) 人間関係学

1年次 後期

吉村 匠平

本講義は、大分大学への遠隔講義を兼ねる形で行われた。毎回平均100人前後が大分大学で本講義を受講した。それに伴い90分の講義構成、講義時間外での学習環境の構築について、前年度までのやり方を大幅に見直した。内容的には、心理学における「性格」理解として、客観的理解を目指す「実体論」と人間関係の中での理解を目指す「関係論」について説明した。ケアを必要としている人との関係を作る上で援助職者に必要とされる基本的な態度として、ロジャースの3条件を取り上げた。知識の暗記に留まらず、知識の運用ができるようにするため、心理テスト体験、客観形式の問題演習、VTRを用いたケース検討、Web上での練習問題の提供などを行った。

## 4) カウンセリング論

2年次 前期

関根 剛、吉村 匠平

前半を吉村、後半を関根が担当した。講義前半では発達心理学領域を取り上げた。乳幼児期の言語発達、身体運動機能の発達のアウトライン、発達障がい(ダウン症、ADHD、自閉症、反応性愛着障がい)について講義した。発達障がいに関しては、障がい像の個人差が大きいことを繰り返し確認しながら、必要最低限な障がいの特徴を知識として完全に覚えることを求めた。

後半は、代表的なカウンセリング理論を中心に解説を行った。昨年に引き続き、養護教諭のための内容として、不登校、非行児童生徒への対応方法、犯罪や災害被害者への危機介入などについての内容を取り入れた。

## 5) 人間行動論

2年次 前期前半

関根 剛

今年の講義も、昨年とほぼ同様の展開であった。すなわち、学習心理学の原理を応用して人の行動を変化させるための考え方の基礎と技法について7回にわたり解説した。その際には、他人の行動に影響を与える上での倫理についての第1回目の講義を必ず受講することを条件とした。行動分析学・学習心理学の観点から、人間の行動理解および効果的な行動変容の技法について学び、行動療法的なアプローチについて基本的理解をもつことに加えて、認知行動療法の考え方を学ぶことも教育目標として追加している。

講義においては、従来のように座学中心のスタイルに加えて、それぞれの学生が行動変容の課題をもって、実際に自分自身の日常的な行動変容を試みることをレポートする形式も試みた。講義内容の理解が不十分であると適切なプログラムを作ることができないことなどから、応用的な知識と理解を得るためには効果的な方法であると思われるので、このような実践的で経験的な学習要素を増やしていきたいと考えている。

## 6) 人間関係学演習

2年次 後期前半

関根 剛

カウンセリングスキルを身につけるためのロールプレイを中心に8回の演習を実施した。展開は、昨年通り、ロールプレイにあたっては、毎回異なる想定状況を複数作成して実施した。想定状況は健康問題、日常的な人間関係、不快な出来事のほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など、多彩なものを用意している。

ロールプレイは、全員が集まることができるよう、営業終了後のカフェテリアで講義を行った。教員2名が各グループを回りながら、応対に対して助言指導を行っていった。昨年度同様、クライアント役に電話相談等のボランティアを行っている方の協力を得て、学外の方とロールプレイを行ない、今年は、2回延べ14名のボランティアの協力を得た。学生の感想などからは、日常、接する事が少ない外部の方とのロールプレイは、新鮮で有意義であったとの回答が多かった。

また、昨年に引き続き、カウンセリングスキルの獲得をより確実なものとするために、ロールプレイ内容をテープレコーダーに録音をして、その中の適当なものを逐語レポートとして随時、提出するように求めた。提出されたレポートは、応答に対して具体的に添削を行って返却をした。また、レポートは採点の上で返却をしており、よりよい評価を受けたい者は何回でも再提出をしてよいとするシステムも昨年と同様に継続した。

改善点としては、(1) 授業目標の達成度評価として第2、第3段階実習の成果を参考にする点については進んでおらず、課題として検討したい。(2) カフェテリアを利用しての講義となるため、ロールプレイにおける声の拡散で自分の応答が録音しづらくなる状況を避けるために、ヘッドセットを購入して利用した。そのため、ロールプレイの録音について聞こえづらいという声はなく、ヘッドセットがうまく機能したと思われる。(3) 本年度も、患者役のボランティアを依頼することが出来た。また、引き続き、相談についての基礎技能を持っているボランティアをお願いしたため、より効果的なロールプレイとすることができた。(4) 学生がばらばらの部屋でロールプレイを行うことの弊害については、カフェテリアを利用することで、改善することができた。

## 7) 心理アセスメント

2年次 後期前半

吉村 匠平

自分自身を対象として様々な視点からアセスメントを行い、その結果を他者の前でプレゼンテーション（自己開示）させた。課題内容は、自分で選択した絵本の読み聞かせ、標準化された心理テストを自分自身に実施・解釈し、それをプレゼンテーションする、自分自身をテーマにコラージュを作成し、鑑賞会を行う、の3つである。多くの受講者が「発表準備が大変だった」と回答する反面、「自分を振り返る機会になった」とも回答していた。シラバス上で「事前の準備、自己開示」が要求されることを明記しているためか、初回のオリエンテーションの受講者が18名、実際の受講者は6名であった。次年度以降の課題として、講義内容を事前に周知し、受講者の拡大を目指したい。

## 4 卒業研究

- ・髪の色と喫煙行動が看護師の印象形成に与える影響
- ・HIV/エイズに関する知識、社会的距離、その関連性
- ・看護プラクティス場面に対する学生と看護師の反応の違い –P-Fスタディを用いて–
- ・青年期の愛着スタイルと携帯メール依存との関係
- ・看護学生が求める看護教員のリーダーシップ –PM理論を用いて–
- ・発話速度が看護師の性格印象に与える印象

### 3-5-5 環境保健学研究室

#### 1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学全般に関する講義および演習を担当している。環境保健学で学ぶ事柄は社会的な問題と結びついたものが多く、さまざまな領域で学ぶものと重なることが多い。そのため、できるだけ基本的な考え方や知識を理解させることに主眼を置いた講義を行った。放射線の医療利用や健康影響・安全に関する講義と医療現場におけるMEに関する基本的な知識、とくに安全管理についての講義も担当した。これらは、看護系大学の看護の基礎教育としては他の大学では実施されていない教育であるが、将来、保健・医療に携わる者が基礎的な知識として身に付くように配慮した講義および演習を行った。

#### 2 教育活動の現状と課題

1年次生は環境保健に対する関心は高い。しかし、徐々に学年が進行するにつれて関心が低下してくる。看護の基礎教育の中で解剖生理などを臨床の看護を中心とした講義が大きなウエイトを占めているために、環境保健と看護職との関係が直接見だしにくくなるためである。モチベーションは理解を深めるので、講義の中で環境保健や放射線保健に関心をもたせるかを常々考えている。具体的には講義の冒頭で社会的な話題を紹介し、その背景になる学問的な問題につなげて講義に対する関心をもらせるような努力を行っている。ヘルスプロモーション教育の一環として、環境保健や健康リスク問題を捉え、学生に理解させるような講義を行う工夫をしている。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 環境保健学概論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

環境保健学全般をカバーするというよりも、環境保健学の基本的な考え方や知識を中心にポイントなる概念や知識を重点的に講義をしている。講義の内容は次の通りである。(1)環境問題の歴史、(2)大気汚染・水質汚濁と健康、(3)地球環境問題、(4)健康・環境影響と環境リスク論、(5)環境疫学、(6)リスクアセスメントと環境基準、(7)人における発がん、(8)がんの生物学、(9)環境化学物質による発がん、(10)がん以外の健康影響、(11)化学物質の安全性試験、(12)環境リスク対策、(13)環境リスク心理学、(14)リスクマネジメントとリスクコミュニケーション、(15)試験とその解説

#### 2) MEの原理と安全管理

1年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、梅木 正純 (学外講師)

医療機器の原理と機能および医療における役割と安全性のための基本的事項を講義した。とくに、安全性については電気の基礎から理解から実際的な管理までをカバーした。生命維持に関するME機器の臨床での現状を理解してもらうために、学外講師(臨床工学技士)を招き、臨床におけるMEの安全管理の重要性を認識させる工夫をしている。講義の内容は次の通りである。(1)医療機器の概要、(2)電磁気に関する基礎知識、(3)X線診断装置-CTの原理、(4)超音波診断装置およびMRI、(5)生命維持に関係するME機器の原理、(6)生命維持に関係するME機器の臨床、(7)ME機器の安全管理、(8)試験とその解説

#### 3) 生活環境論

2年次 前期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境と廃棄物についての基本的事項を解説し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健のあり方を論じた。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE問題、上水道と下水道、室内汚染、温熱環境と気圧、騒音・振動・悪臭。

#### 4) 放射線健康科学

2年次 後期前半

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線の健康影響とその防護の考え方を理解させるために、放射線の物理、生物、医学、リスクまで 広汎な知識をコンパクトに要点を講義した。多くの学生から、同時に試行している健康科学実験(放射線)とこの講義を通して、放射線の正体とその健康影響について理解できたと評価を受けている。講義内容は次の通りである。(1)放射線影響と放射線防護の歴史、(2)放射線とは何か、(3)放射性同位元素と放射能、(4)身近な放射線・放射線源、(5)放射線と物質との相互作用、(6)放射線の線量、(7)放射線の生体応答—DNA損傷と突然変異、(8)放射線の生体応答—染色体異常と細胞死、(9)放射線の健康影響(確定的影響)、(10)放射線の健康影響(確率的影響)、(11)放射線リスクの評価とその不確かさ、(12)安全の考え方と放射線防護基準、(13)患者のための放射線防護、(14)UV・電磁界の健康影響、(15)試験とその解説

#### 5) 環境保健学演習

2年次 後期後半

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3つの課題を与え、その課題をレポートにまとめるための作業を教員が支援するやり方で演習を行った。課題は、コンピュータを利用した計算が中心で、エクセル計算やグラフ作成などを通して統計的な考え方を理解させるように配慮している。課題は次の通りである。(1)メダカの死亡数分布によるデータのバラツキを調べるシミュレーション、(2)全国のがん死亡、がん罹患データからの部位別性別年齢階級別死亡率・罹患率のグラフ作成を通してがんの傾向を理解する、罹患率の高いのがんの致死率を求める、大分県の年齢調整罹患率を求める、(3)生命表を用いて平均余命の計算

#### 6) 環境リスク論

3年次 後期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。講義内容は次の通りである。環境リスク論とは、食品安全とリスク、環境ホルモンのリスク、鳥インフルエンザのリスク、地球温暖化のリスク、化学物質の発がんリスク、生態リスク。

#### 7) 環境倫理学

4年次 前期後半

甲斐 倫明

生命倫理に対する学生の関心は高い。しかし、環境倫理に対する関心は高くなく、選択の講義の履修者は年々減少している。これは身近な問題として理解できないからであろう。そこで、生命倫理の社会的な事例をあげ、生命倫理の考え方を説明しながら、環境倫理を対比的に理解させるようにした。また、講義中にできるだけ学生に考えさせ、問題の多面的な理解を促すようにした。学生の意見も講義の内容は次の通りである。(1)環境倫理学とは、(2)現代の環境問題と倫理、(3)人間中心主義と生命中心主義、(4)自然の生存権の問題、(5)世代間倫理の問題、(6)地球全体主義



## 8) 健康科学実験 VI 放射線

小嶋 光明

本実験では、日常生活で被ばくしているバックグラウンド放射線の存在と量を理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられている診療用X線装置からの散乱線を定量的に測定し、放射線防護のあり方について考察した。

## 8) 健康科学実験 VII 空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

本実験では、私たちの生活に欠かすことのできない空気と水に注目した簡易な測定を通して、環境の質について考えさせることを目的としている。水質汚染については、水道水に注目し、自宅の水道水中の残留塩素を測定することで、水道水の水質について考える。化学測定以外に、水道水の味を調べるために、水道水、水道水を沸騰したもの、ミネラルウォーターを一定の温度にしてブラインドで飲み比べ、味覚テストを行うことで質について考える。室内空気汚染については、室内の化学物質の濃度が機械測定で低くても測定可能な人間の嗅覚を用いて室内空気の汚染の程度を測定する。本実験から私たちの生活環境の質に対する関心を高め考えることができた。とくに、私たちの嗅覚や味覚を用いたテストは学生の質に対する関心が高くなることがわかった。

## 8) 健康科学実験 VIII 染色体異常

伴 信彦

正常染色体の標本と、放射線によって誘発した異常染色体の標本を検鏡し、染色体の構造的異常について学んだ。また、ダウン症候群の核型分析と慢性骨髄性白血病細胞の標本写真の観察を通して、疾病と染色体異常の関係について考察した。

## 4 卒業研究

- ・原爆被ばく生存者の若年齢被ばくに伴う乳がん発症の相対リスク解析
- ・全身照射マウスの造血細胞における細胞動態の解析
  - －放射線による白血病誘発との関係に着目して－
- ・DNA初期損傷を指標とした放射線適応応答
- ・放射線誘発DNA初期損傷の細胞動態による変化
  - －放射線発がんとの関係に着目して－
- ・乳がん治療経験者の社会的サポートのあり方に関する考察
- ・女性ホルモンの働きを考慮した乳がんモデルの考察

## 1 教育方針

保健統計・疫学、情報処理の領域は、指定規則上では大部分が保健師分野の専門科目として位置づけられているが、科学的根拠に基づいた看護に必要不可欠なものである。これら知識の修得とともに、情報収集・判断・発信の実践的能力を身につけることをねらいとしている。

特に、コンピュータおよびネットワークの活用は、当研究室の担当科目に限らず、本学における学修のツール、看護職としての基本的スキルとして早期に実践的な能力を獲得できるよう配慮している。

必修科目では保健師・看護師として必要十分な能力水準を目標とし、基本的な内容を単に知識として覚えるのではなく、理解して身につけるよう指導している。選択科目ではさらに高度なテーマについて取り扱い、学生の将来の目標にあわせた高度な情報処理能力の養成を目指している。

## 2 教育活動の現状と課題

統計学や保健統計・疫学の内容を必修科目として1年次に教育している現在のカリキュラムにおいて、この分野の学習の重要性を学生が実感しづらいという課題に対して、単なる知識・詳細な項目の伝授としてではなく、できるだけ具体的な場面を想定した例題を活用して、当該領域の意義を理解できるように配慮を行っている。さらにこの配慮を深めるとともに、一部については他の看護専門科目の学習の時期と関連してカリキュラム改訂に向けて、開講時期を検討する作業が必要であろう。

PCおよびインターネットの利用という情報処理のスキルについて、入学時点における学生の基本的能力は近年はかなり向上している。しかし、ICT(Information & Communication Technology) 技術以前の基礎的能力である言語的能力、数学的能力、論理的な判断力についての低下傾向は、継続していると感じられる。この点をふまえた講義資料や演習の課題設定などを行い、演習においては3名の教員で40名強の学生にきめ細かい対応を心がけている。また、今後は他の科目(演習等)における情報処理の場面に科目群として関与し、具体的な応用場面での能力向上に寄与することが考えられる。

## 3 科目の教育活動

### 1) 健康情報学

1年次 前期

佐伯 圭一郎

保健師領域の「保健統計・疫学」に対応する科目として、人口統計、疾病情報や保健情報など、様々な健康情報に関して、情報の発生源から、評価の方法までを体系的に学習した。単に様々な統計指標を理解するだけでなく、それらの数値から情報を読みとり、思考する能力を養った。ここで学んだ内容がどのように看護実践の場面で活用されるのか、という点を1年次生に理解させるために、1年次の後期科目も含んだ保健統計・疫学、情報処理の全体の流れを初回に講義し、全体の事例を適宜提示している。基本的な内容に重点を絞り、基礎の理解を十分にし、まずは保健統計を読みとれるという点について具体的な例を多用しながら講義を進めている。

## 2) 生物統計学

1年次 後期

中山 晃志、佐伯 圭一郎

基本的な統計学の知識を実際の調査・研究の場面と関連付けながら、目的に応じた情報の収集、データ分析の技法、結果の表現方法について学んだ。特に、統計的な方法論の考え方に重点を置き、統計情報の適切な解釈能力を高めることを目指した。数式は最小限にとどめ、演習もパソコンでソフトウェアによる統計処理を行い、結果を解釈することを中心としている。

基本的な事項に関しては反復を十分に言い、理解を深めるとともに、2年次の各論を取り扱う選択科目との連続性を考慮している。

## 3) 健康情報処理演習

1年次

品川 佳満、中山 晃志、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための知識と技術を学んだ。また、インターネットをコミュニケーションや情報収集に役立てる技法を習得した。内容は、ネットワークの利用（WWW、メール）、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、統計データの分析、医療における情報システムに関する講義である。演習では、情報処理に関する技能だけでなく、情報に関する基礎知識も習得できるように説明を行い、さらに理解の確認のための小テストを行った。小テストの結果、基礎知識に関する理解が不十分であることがわかり、来年度は、個別のチェック・指導を強化していきたい。

## 4) 応用情報処理学

2年次 前期後半

佐伯 圭一郎、中山 晃志

実質的にはほぼすべての学生が受講する科目となっているため、1年次必修科目である生物統計学および健康情報処理演習との連続性を持たせ、生物統計学各論と統計解析の演習を行っている。毎回の小テストにより、学習の定着をはかるとともに、具体的な例題として看護分野での題材を利用するように配慮している。学習の仕上げとして、事例を想定した統計データによる解析と解釈のレポートを課題としている。

## 5) 実務情報処理学

4年次 前期後半

佐伯 圭一郎

健康情報処理演習で学んだ情報処理能力を看護師・保健師の実務の場を想定した具体的事例を通じて、さらに高度なものへと高めることを目標としている。疫学調査法を深く学び、尺度構成法や食中毒の疫学についてのトピックも扱った。また今年度も、プレゼンテーションや印刷物のデザインについて、外部から商業デザイナーの講師を招き、演習形式を交えて教育的効果を高めることができた。

#### 4 卒業研究

- ・医療機関がWeb上で発信する情報 ー患者・国民が知りたい情報は提供されているのかー
- ・大分県における男児出生性比の経年変化
- ・朝食は大切 ー性別・年齢階級別にみた欠食の要因と対策ー
- ・筋萎縮性側索硬化症の自律神経活動 ー心拍変動スペクトル解析を中心とした検討ー
- ・学習しやすいホームページの検討 ー食育に関するサイトからー
- ・タイムスタディデータを用いた看護業務量変動要因の検討

### 3-5-7 言語学研究室

#### 1 教育方針

言語学研究室では、言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

## 2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習した。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について3-4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。また、1年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れた。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行った。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指した。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とした。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行った。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、実際に発声の反復練習を行った。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行った。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施した。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指した。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生に授業外でも多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IPを実施した。英語多読については、内容の紹介と普及を図るため、若葉祭とオープンキャンパスにて公開講座を実施した。若葉祭については5月19日 (土)、20日 (日) 両日、午前・午後それぞれにて2セッションずつ合計4回、オープンキャンパスでは7月22日 (日) 午前・午後にて1セッションずつ合計2回、実際に多読用教材を来訪者に公開し、英語多読を体験してもらった。11月10日 (土) に行われた地域ふれあい祭では、言語学研究室の教育活動を紹介するパネルを作成し、iichico総合文化センターに展示した。CALLについては、前期は1年次生の必修授業とし、後期は、1年次生も含め他学年の学生・大学院生全てが、自ら自由に英語学習に取り組めるよう配慮し、希望制にて実施した。受講した学生は、熱心に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

上記取組みを実施することで、学生の英語学習意欲の維持、学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索しているが、いかに実現していくか、さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な英語学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが、今後も課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 英語I-A1

1年次 前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読については、食料、環境、科学などをテーマとして、個別に具体的な内容の英文テキストに取り組んだ。日常生活を営む上では気がつかないが、実は自分自身にとって非常に身近でかつ深刻な問題に意識を向けることは大切である。そうした重要な主題も比較的平易な英文で表現できることを、英文テキストの暗唱をすることにより体得できたと考える。多読による総読書量は、前期期間中一人平均131000語、最も多く読んだ学生の語数は241000語であった。

## 2) 英語I-A2

1年次 後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。万病の元凶のひとつに高血圧が挙げられる。血圧の定義付け、血圧に関係のある医療専門用語をはじめ、高血圧の原因とそれによって起こる症状、さらには予防や治療に関する知識まで、高血圧というひとつの症状に特化して英文テキストに取り組んだ。一課の文章全体をパラグラフごととに暗唱することで、英文テキストの構成の特徴が体感できたと考える。多読による総読書量は通年で一人平均160000語、最も多く読んだ学生の語数は397000語であった。

## 3) 英語I-B1

1年次 前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

## 4) 英語I-B2

1年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 5) 英語II-A1

2年次 前期

宮内 信治

講読内容として、人間の精神活動の中核である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。音声・音韻的な視点から、英語の個々の音や単語ではなく、その総体としての英文の音の流れに着目し、その流れの中で自然に発生する音の変化に焦点を当てた。また、英文を読む際の音韻的特徴について、その音の流れを視覚的に捉えることができるような演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。音の英語らしさを具体的に捉えることに新鮮味を感じたようである。多読による総読書量は、一年次からの通算で前期終了時一人平均186000語、最も多く読んだ学生の語数は397000語であった。

## 6) 英語II-A2

2年次 後期

宮内 信治

講読においては、自らの辛かった体験について「書く」ことによる病気治癒の知見や、ヒトゲノム計画の発展とそれに伴う問題についての英文テキストに取り組んだ。また、ナイチンゲールが自らの看護観を述べた英文にも触れた。英語のイントネーションに特化した表記方法の特徴や意味について理解した後、その表記法を用いた英文テキストを繰り返し音読し音の流れを確認した。暗唱課題により、学生自らが英語らしい音の流れを再現できるようになった。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均222000語、最も多く読んだ学生の語数は441000語であった。

## 7) 英語II-B1

2年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 8) 英語II-B2

2年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 9) 英語III-A

3年次 前期

宮内 信治

講読担当 医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させた。

## 10) 英語III-B

3年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

## 4 卒業研究

- ・ O県内における外国人女性の出産体験と満足度
- ・ 外国人の母親への保健指導における困難点と工夫
- ・ 英語教科書における内容語の語源分析
- ・ 看護学生の言語使用の認識と実態
- ・ 看護師が聴覚障がいを持つ方と関わる際の認識と実態

## 3-5-8 基礎看護学研究室

### 1 教育方針

看護学についての概括的な知識と考え方を理解させるとともに、看護実践に必要な諸理論を学ぶことを通じて、自らの看護に対する姿勢を考えさせる機会としている。初学者であり、様々な志望動機を持つ学生に対して、看護専門職について理解させ、将来の進路に対しても方向づけができるように、教材の準備には時間を割いている。また第2段階実習などの臨床実習では、多くの担当教員が関わり、また実習現場である施設の問題など実習を展開する上で考慮すべき様々な要因があり、教育は主体である学生と教員とが共に作り上げていく過程であり、学生と担当教員との個性にも配慮が必要である。現在教授している具体的な科目は「看護学入門」「看護情報学概論」「生活援助論」「臨床看護総論」「基礎看護学演習」「基礎看護学実習」「看護と遺伝」の7科目であり、これらの科目が有機的に統合された状態で学生に定着することを目指して教授している。

### 2 教育活動の現状と課題

技術指導を伴う生活援助論では1単位で17～19コマを実施しており、1単位のコマ数が非常に多く、学内実習を少ない時間内で円滑に行うための準備や後片付に割かれる時間は多大である。また少ない講義時間の内容をより効果的に履修させるための講義前の予習プリントや講義後のレポート指導など事前・事後指導を実施しているが、更なる強化が必要である。臨床実習では主体である学生と教員とが共に作り上げていく過程であり、担当教員と学生との関係または学生どうしのグループダイナミクスなども現状では大きな問題は上がっていないが、より学習効果のあがる実習展開が求められ、これらが次年度の課題である。



### 3 科目の教育活動

#### 1) 看護学入門

1年次 前期～後期前半

伊東 朋子、松尾 恭子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。授業は講義形式が主となるので、できるだけ一方通行ではない双方向の授業展開ができるように取り組んだ。看護の場の広がり認識させるために外来講師による授業を取り入れたり、時にはグループワークをさせて、成果発表の時間などを設け、積極的な参加が可能となるように教材を精選した。

#### 2) 看護情報学概論

1年次 後期後半

粟屋 典子

看護活動に必要な看護管理に焦点を当てて、看護管理とは何か、看護管理の必要性、看護管理のプロセスなどについて理解させた。毎回、講義終了時に簡単な感想文を記載させ、学生の理解度や興味関心を知る資料とした。

#### 3) 生活援助論

1年次 前期後半～後期 2年次 前期前半

伊東 朋子、松尾 恭子、小野 さと子、吉田 智子、小野 富美子、江藤 真紀、高波 利恵、朝見 和佳

日常生活の援助技術及び医療に伴う看護技術の基礎を修得することをねらいとし、「生活過程」「生命維持」「診断治療」に関わる技術を教授した。全員が技術の体験が時間内にできるように、1組、2組と分けて授業を実施している。レポートは、2年次生には毎回予習を課して授業に取り組ませ、内容理解を深めるように記載する指導をし、毎回提出させコメントをして返却している。1年次生のレポートは、対象者の状況や心理を理解するために、患者役を行ったことに対する感想を毎回提出させコメントして返却している。生活援助論の試験は、筆記試験と実技試験で構成している。授業外の自己練習に対する動機付けを行い、実技試験を行っている。

#### 4) 臨床看護総論

2年次 前期

伊東 朋子、松尾 恭子

看護実践を展開するための問題解決法について学習させ、できるだけ平易に具体性を持たせて展開しながら、看護過程について学ばせ、臨地実習への方向付けも行った。前年度の反省をもとに、1回の講義ごとに、簡単な事例を与えてグループワークさせ、授業参加を促した。

## 5) 基礎看護学演習

2年次 後期

伊東 朋子、松尾 恭子

看護の目的、目標を達成するための方法論である「看護過程」を事例を通じて展開させた。発表会を設け、グループワークした内容を共有できるように配慮し、4年次後期に履修させる総合看護学への動機付けも行った。第2段階実習を前にして、発表会では臨地実習での担当教員にも参加してもらい、学生の学習状況の把握と同時に学生の取り組みに対する助言や感想を聞いた。

## 6) 基礎看護学実習

2年次 後期後半

伊東 朋子、小西 恵美子、松尾 恭子、藤内 美保、朝見 和佳、安部 恭子、安部 三枝子、江月 優子、大賀 淳子、小野 さと子、甲斐 和美、河野 梢子、後藤 愛、高波 利恵、田中 美樹、中原 基子、福田 広美、牧野 由佳里、吉田 智子

既習科目の理論と実践が統合できるように実習前指導・実習後指導には特に力を入れている。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を依頼し、実習に対する動機づけ等に配慮した。また2実習施設、15病棟での実習が望ましい形で展開できるように担当教員や学生のグループメンバー構成を十分に検討し、支援した。実習施設での備品・消耗品等の整備にも努めた。結果として、実習目標の達成度は高く、指導上困難な学生もいなかった。

## 7) 看護と遺伝

2年次 前期後半

吉河 康二、定金 香里、岩崎 香子

遺伝病が学生に理解されていないという指摘に基づき、講義前半は遺伝学の基礎に重点を置いた。遺伝子の本体であるDNAと染色体、およびヒトにおけるメンデル遺伝を高校生物レベルの知識で理解できる講義を行った。次段階として、遺伝情報伝達の仕組みを復習するとともに突然変異の発生、体質・疾患との関連について講義を行い、基礎的知識から臨床遺伝に繋がるように配慮した。講義後半は、さらに臨床における遺伝子疾患および遺伝カウンセリングについての講義を行った。

## 4 卒業研究

- ・透明文字盤を使用するALS療養者にとって負担の少ないコミュニケーション方法の検討
- ・術後患者が感じるADLに関する想像と現実
  - クリティカルパスを使用する患者に焦点をあてて -
- ・医療福祉系の1年生を対象としたAEDに関する実態調査
- ・看護力再開発講習会の周知拡大のための効果的な広報活動についての検討
- ・ストレスに対する「癒し」の文献的研究
- ・混合病棟に入院している児に付き添う母親への配慮-看護師の視点から -

## 1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護学の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的・心理的・社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している科目は、「看護疾病病態論I」「看護疾病病態論II」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。身体的な側面をアセスメントするために必要な知識を学ぶことが主な目的である。主要な疾病の理解や病態の理解に加え、これらの知識をもとにどのような方法で健康問題をアセスメントするか具体的な方法論を教授し、看護アセスメント学実習で理論と実践を統合できることを目的としている。

## 2 教育活動の現状と課題

フィジカルな部分を重点におき、対象の健康問題をアセスメントするための能力を高めるには、疾病や病態などの基本的・専門的な知識が必要である。人間科学講座での生体科学、生体反応学などの知識を想起させ、さらに成人・老人看護学へつなげられるための内容を教授するように配慮し、教授している。

## 3 科目の教育活動

### 1) 看護疾病病態論 I

1年次 後期後半

小西 恵美子、藤内 美保

看護疾病病態論Iでは、循環器系、呼吸器系、血液造血器系、腎、代謝・内分泌系の疾患を教授した。各系統の解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。可能な限り図式して理解を得やすいように配慮した。教科書は成人老年看護学研究室でも使用する系統看護学講座シリーズを使用し、学生が1冊の本をしっかりと読んで理解することが重要であると考え、教科書に基づき教授した。後期後半の3ヶ月間、週に4コマのペースで専門的な内容が膨大となり混乱しやすいため、各系統別の講義が終了するごとに中間試験を計5回実施した。また看護アセスメント学実習では病態関連図を記載させるため、病態関連図の資料を配布し授業で説明している。

### 2) 看護疾病病態論 II

2年次 前期前半

小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子、河野 梢子

看護疾病病態論IIは、筋骨格系、脳・神経系、腎、消化器系、アレルギー疾患、自己免疫疾患、感染症、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の疾患を教授した。教科書は系統看護学講座シリーズとし、成人老年看護学研究室と一貫性をもたせるよう配慮した。

### 3) 看護アセスメント方法論

2年次 前期後半

小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子、河野 梢子

看護アセスメント方法論は、フィジカルアセスメントの基礎知識、健康歴聴取、全身状態の観察、消化器系、循環器系、呼吸器系、運動・神経系をそれぞれ3コマ連続の講義を行った。講義の前半は病態の説明、後半は学内実習室でフィジカルイグザミネーションをした。4人の教員で80人の学生を指導するにはきめ細かな指導が困難であるため、フィジカルイグザミネーションのデモンストレーションでポイントを強調するように配慮するとともに、学内実習の終了時にまとめを行い、学生全員の理解が深まるよう工夫している。

臨床においてはその場での看護判断が重要であるため、臨床現場で遭遇しやすい場面を提示し、臨床判断する課題を提示した。同様の場面を2グループが検討する演習形式をとり、発表では同じ場面でも判断した内容が異なりディスカッションでき、学生の気づきも大きい。最後に病態に関する筆記試験を実施した。

### 4) 看護アセスメント学実習

2年次 後期

小西 恵美子、藤内 美保、伊東 朋子、松尾 恭子、朝見 和佳、安部 恭子、安部 三枝子、江月 優子、大賀 淳子、小野 さと子、甲斐 和美、河野 梢子、後藤 愛、高波 利恵、田中 美樹、中原 基子、福田 広美、牧野 由佳里、吉田 智子

看護アセスメント学実習においては、県立病院9病棟と大分赤十字病院6病棟の計15病棟に学生を各病棟5～6名を配置し、原則的に患者1名を受け持たせ、アセスメントのプロセスを学ぶための実習を行った。実習記録について詳しくオリエンテーションをしてほしいという担当教員からの要望もあり、昨年度から見本事例を提示しながら学生オリエンテーション時に実習記録の説明を行った。学生および担当教員との共通理解が得られたとの声があった。また昨年に引き続き、今年度も人間科学系の教員1名が実習の様子を見学し、大分赤十字病院の実習に参加した。実習目標の到達は、個人差が大きいものの、全員実習目標を到達し、学生は積極的に学ぶ姿勢があった。県立病院および大分赤十字病院の実習指導者からも大変熱心な指導が得られている。大分赤十字病院は2月から電子カルテが導入され、新たな環境で実習を行った。

## 4 卒業研究

- ・患者が待つということ ―ナースコールに焦点を当てて―
- ・生と死の教育と子どもたち
- ・日本の看護師がとらえる清拭という看護行為の意味
- ・無医地区に住む人々の受診行動と医療ニーズ
- ・正しい手指衛生を身に付けるには ―文献検討に基づく考察―
- ・口腔に関するフィジカルアセスメントの文献検討

## 1 教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を修得することを目的としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人・老年援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。成人看護学実習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱにおいて必要となる専門的な知識及び援助技術をより確実なものとするためにまた、臨床家に即した看護実践を修得できるように、学内実習を可能な限り取り込むことに配慮している。さらに、教員以外に実際の医療職者（医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士）等の学外講師による講義を取り入れ、実際の医療・福祉現場の現状に即した対象者の理解や援助方法の実際を理解できるようにしている。

## 2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学の学習範囲は非常に広範である。幅広い年齢層の対象理解や多様な疾患とそれぞれの治療法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例や実際の医療・看護器具の提示を行い学生の学習意欲を高め、印象に残るような講義を工夫している。学内実習・指導技術の準備及び発表が講義のコマ数、進級テストの日程、卒業論文指導等の兼ね合いから十分に学生の準備・指導を行えなかったことから、今後準備・指導及び発表に関する時間確保の検討が必要である。また、試験問題・解答についての解説時間の確保についても工夫が必要である。援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別ごとに急性期と慢性期に必要な看護援助について、教授しているが、各2コマずつの割り当てで進めている場合が多く、学生が欠席した場合、その部分の学習が欠けることになる。そこで、欠席者には、その講義内容に関連するテーマを与え、ハンドアウトの資料やテキストで自己学習させ、レポートを提出させている。

## 3 科目の教育活動

### 1) 成人看護学概論

2年次 前期前半

赤司 千波

概論においては、一連の成人・老年看護学を学ぶための基礎となる内容として、成人期における身体的・心理的・社会的特徴や健康問題の特徴などを教授した。

### 2) 老年看護学概論

2年次 前期前半

赤司 千波

概論においては、一連の成人・老年看護学を学ぶための基礎となる内容として、老年期における身体的・心理的・社会的特徴や健康問題の特徴などを教授した。

### 3) 成人・老年看護援助論Ⅰ・Ⅱ

2年次 前期後半～後期

小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、江月 優子、牧野 由佳里、赤司 千波

成人・老年看護援助論Ⅰ・Ⅱにおいて、身体機能別ごとの健康問題をもつ対象者について、急性期と慢性期に必要な看護援助について教授した。看護援助がより理解しやすいように、講義媒体の工夫、援助技術の演習、外部講師による講義ではより講義内容が理解できるように事前学習としてレポートを課すなどを行った。出席票を兼ねた質問カードやメール等を用い、学生の質問には随時答え、学生の援助論に対する理解を促した。確実な技術習得を目的とした学内実習の実施にあたっては、援助論のオリエンテーション（OR）の際に学内実習のORを同時に行い、準備期間を多く取れるようにした。学内実習では3事例に対する患者指導を各グループごとに計画立案・実施、ロール・プレイ形式の発表を取り入れたことで、個別的な患者指導の必要性やその方法について教授できたと考える。

### 4) 成人・老年看護学演習

3年次 前期後半

赤司 千波、小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、牧野 由佳里、江月 優子

成人老年看護学演習においては、臨地実習で看護過程をスムーズに展開し、看護実践ができるように、ペーパーペーシェントを用いた事例による看護過程の展開を、講義、自己学習、グループワークによって指導を行った。講義では、事例を用いた看護過程の展開について教授し、自己学習では、グループごとに担当教員による個人面接や課題の提出によって個別的な指導を行った。演習最終日に、各グループの事例に対する看護過程の展開の発表をディベート形式で行い、異なる視点による看護過程の展開があることなどを学ぶ場を設けた。本年度は、研究室の全教員が担当したため、一人の教員が担当する学生数が減じ、より個別的な指導ができたと考えられる。事例については、3年間変更していないことから、次年度以降見直す必要がある。

### 5) 成人看護学実習

3年次 前期後半～後期前半

赤司 千波、小野 美喜、福田 広美、朝見 和佳、安部 恭子、江月 優子、小野 さと子、甲斐 和美、河野 梢子、高波 利恵、牧野 由佳里、吉田 智子

成人看護学実習においては、9病棟で実習行うため1病棟当たり学生4～5名の配置で、担当教員と臨床側の実習指導者で実習指導を行った。専任教員を本年度は3名とし、実習担当教員や学生と密接に関われるようにした。また実習担当教員にあつては、基礎看護学研究室所属の教員が基礎看護学の講義のために帰学することなく終日実習担当とした本学の方針により、基礎看護学研究室所属の教員が担当している病棟の学生の、一時期担当教員が変わることで実習が能率的に行えていない部分が改善されたと考えられる。担当教員は、新任の担当教員を含め、担当病棟で2～10日間の研修を行い、実習指導に備えるとともに、実習指導者と指導案を作成し実習指導に臨む者もいた。

急性期と慢性期の病棟でそれぞれ3週間ずつの期間で、対象者を1～2名受け持ち、健康問題を理解し、健康段階に応じた適切な看護が実践できるように指導を行った。入院期間の短縮が進み、受け持ち対象者が2名以上の学生もいるなど、対象者の選定がより困難性を増したと思われる。

援助技術の確実な習得のために、本年度も「看護技術の修得確認シート」を厚生労働省医政局看護課の報告書をもとに更新し、実習マニュアルを修正した。

実習施設との実習前の実習説明及び実習後の意見交換会を設けたことによって、例えば、ICUは実習の場ではないが実際受け持ちの対象者が入室している場合、学生は訪室し見学あるいは看護師から説明を受けるなどを行っているが、その学びのフィードバックがないという意見が聞かれたなど、実習施設側と密に意見交換を行うことができたことから、本年度の実習の改善と次年度の実習指導の示唆を得るなどできたと考えられる。

## 6) 老年看護学実習Ⅰ

3年次 前期後半～後期前半

赤司 千波、小野 美喜、福田 広美、朝見 和佳、安部 恭子、江月 優子、小野 さと子、甲斐 和美、河野 梢子、高波 利恵、牧野 由佳里、吉田 智子

老年看護学実習Ⅰにおいては、9病棟で実習を行うため1病棟当たり学生4～5名の配置で、担当教員と臨床側の実習指導者で実習指導を行った。専任教員を本年度は3名とし、実習担当教員や学生と密接に関われるようにした。

実習担当教員にあっては、基礎看護学研究室所属の教員が基礎看護学の講義のために帰学することなく終日実習担当とした本学の方針により、基礎看護学研究室所属の教員が担当している病棟実習においては、一時期担当教員が変わることで実習が能率的に行えていない部分が改善されたと考えられる。担当教員は、新任の担当教員を含め、担当病棟で2～10日間の研修を行い、実習指導に備えるとともに、実習指導者と指導案を作成し実習指導に臨む者もいた。

急性期と慢性期の病棟でそれぞれ3週間ずつの期間で、対象者を1～2名受け持ち、健康問題を理解し、健康段階に応じた適切な看護が実践できるように指導を行った。入院期間の短縮が進み、受け持ち対象者が2名以上の学生もいるなど、対象者の選定がより困難性を増したと思われる。

援助技術の確実な習得のために、本年度も「看護技術の修得確認シート」を厚生労働省医政局看護課の報告書をもとに更新し、実習マニュアルを修正した。

実習施設との実習前の実習説明及び実習後の意見交換会を設けたことによって、例えば、ICUは実習の場ではないが実際受け持ちの対象者が入室している場合、学生は訪室し見学あるいは看護師から説明を受けるなどを行っているが、その学びのフィードバックがないという意見が聞かれたなど、実習施設側と密に意見交換を行うことができたことから、本年度の実習の改善と次年度の実習指導の示唆を得るなどできたと考えられる。

## 7) 老年看護学実習Ⅱ

4年次 前期前半

小野 美喜、福田 広美、井伊 暢美、牧野 由佳里、江月 優子、赤司 千波

老年看護学実習Ⅱは、介護老人保健施設3施設、介護老人福祉施設2施設において、クラスを前半のグループと後半のグループに分割し、6～11名の学生の配置で実習を行った。施設ごとの実習体験から得た課題や疑問については、実習最終日に学内で実習の学びの発表を行うと同時に討論・検討する場を設け、学びと課題の共有を図った。その発表については、今年度は前半・後半のグループ共に、午前中準備、午後発表としたことで、学生に対して公平にかつ十分に準備・検討する時間が確保できたと考えられる。

実習終了後に、実習の評価と実習の改善点を明らかにするために、学生と施設に対して意見を募った結果、例えば、施設側としての受け入れ学生数の多さを指摘された。それらの意見は、次年度の実習依頼時に考慮できる範囲で検討することを説明した。

施設に関しては、今年度は施設側の都合により介護老人保健施設1施設の変更を行ったが、次年度以降には受け入れ学生数や施設側の指導力等も考慮し、介護老人福祉施設1施設の変更の検討が必要と考えられた。

## 4 卒業研究

- ・看護学生の入院体験から生じる看護に対する気持ちの変化
- ・乳がん体験者が社会復帰をする過程における家族との関わり
- ・重症心身障害児（者）が通所している施設に対して母親が望む支援—学齢期終了時に焦点をあてて—
- ・緩和ケアにおける音楽を利用した症状別看護の可能性—音楽療法の文献研究を通して—
- ・看護大学4年生の就職活動に関する実態調査—学生が目指す看護職の専門性と職場選択に影響する要因—
- ・一般病棟の看護師が死生観を形成する過程—臨床経験20年以上の看護師の体験から—
- ・看護大生の看護職への適性感と志向性に関する研究—学年比較による検討—
- ・手荒れを経験したことのある看護師のハンドケアに関する研究

## 3-5-11 小児看護学研究室

### 1 教育方針

小児看護学は専門看護学講座に位置づけられ、成長・発達過程にある小児のそれぞれの特殊性を理解できること、さらに、病気の小児と家族への小児看護や小児の健康増進を援助するために必要な専門知識と判断能力、援助技術を身につけることを目的としている。そのために概論、発達援助論、演習、実習をとおして、小児の発達理論を学び、小児と家族を一つのユニットとして対象と考える小児看護の特殊性について、学生の理解を深めることができるように配慮している。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し看護実践ができるように期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず、小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を体得できるように教授している。

### 2 教育活動の現状と課題

小児看護学はカリキュラム上、専門看護学の一領域に位置づけられており、基礎科学、基礎看護学で学んだ知識と技術に加え、より専門性の高い看護の内容を教授することになる。学生ははじめて小児に関して興味をもつ者も多い。2年次前期の小児看護学概論では、小児を取り巻く保健、福祉、教育、看護などの諸課題を学び、学生が自己の「子ども観」をレポートし、自己の特性を認識するように工夫している。3年次の1年間は、小児についての発達理論から、小児看護の専門的な知識と看護技術の習得に向けて多くのことを学ぶ。特に小児看護学実習では、それまで講義や演習で学んだ専門的知識を実践レベルで判断し、対象を受け持ち看護に応用することが求められる。学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護で自分に何ができるか悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長する。

近年は少子化で兄弟姉妹も少なく、子どもが周りにいないや接したこともないという学生もあり、講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。子どもの不慮の事故を予防することや小児看護における倫理など学ぶため、毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時には質問に答え、学生の疑問を残さないようしている。多くの学生が小児看護への興味と関心を持ち、将来、小児看護がしたいと思えるような講義、演習、実習の展開が目標である。



### 3 科目の教育活動

#### 1) 小児看護学概論

2年次 前期前半

高野 政子

小児看護学の学習範囲は非常に広範である。本講義では、小児看護の特質と概要を理解することを目的としている。小児と小児を取り巻く家族や社会的、生物的環境を考え、小児医療、小児保健の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は、1) 小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2) 世界の子どもの健康と医療ではユニセフからビデオを貸し出してもらい視聴した。3) 子ども観の変遷と子どもの権利、4) 日本の小児保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、特に小児虐待について解説した。5) 小児の成長と発達総論、6) 小児の形態的・機能的発達、7) 心理的・社会的・言語的発達、最終回には小児専門看護師について紹介した。また、学生のレポートの発表を行い意見交換して、街中でも子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

#### 2) 発達と援助論

3年次 前期前半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛

小児の成長・発達の各期の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程による日常生活の保育理論と技術を講義した。また、健康障害のある小児の病態とその看護や、障害児とその家族への看護などを教授した。主な講義内容は、1) 小児期の主要な発達理論、2) 小児各期の発達アセスメント、3) 乳児期、幼児期、の保育理論と技術、4) 学童期、思春期の保健と看護、5) 病気の子どもと家族、6) 小児の健康障害と看護、7) 障害のある子どもと療養生活の援助、8) 親子関係に問題のある場合の看護ほかである。24コマで構成される講義であるので、3回に分割して筆記試験を行い、主要理論など知識の定着をねらい、最後に総合試験をして評価した。最終評価は出席状況も考慮した。

#### 3) 小児看護援助論

3年次 前期後半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛、岡本 文恵

小児看護援助論では、前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義を行い、その後学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習を行い、発表する演習形式ですすめた。後半には、臨床現場でよく出会う疾患の5事例を提供し、小児の看護過程の展開について、グループワークで検討し発表した。2つのグループワークでは学生は積極的な参加を求められる。次の小児看護学実習において1学生1事例の展開ができるように、この演習では、教員による個人指導も行った。

学内の技術演習は、TA 4名の協力を得て7名で指導した。指導内容は事前に打ち合わせ会を行い指導内容、要点を統一した。約20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で行った。一方、看護過程の発表は1疾患ずつ5事例を発表し意見交換を行った。

#### 4) 小児看護学実習

3年次 後期前半

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛、岡本 文恵

小児看護学実習は、大分市立保育所（9施設）で3日間健康な小児とその保育について理解することを目的に保育所実習を行い、その後大分県立病院と別府発達医療センターの2施設で7日間の病気を持つ子どもと家族への小児看護を実施した。小児看護学実習は、本学の第4段階の専門看護学実習に位置づけられ、学生76人は1グループ12～13人、合計6グループに配置され3ヶ月間でローテーションする。小児看護学実習は3名の実習担当教員と1名の専任教員、臨床実習指導者の連携により指導を行った。

近年小児の入院期間も大人同様に短期化しており、開学以来学生1人に対象児1人を受け持つように配慮していることで、学生の受け持ち患児を決定する際、担当教員および病棟師長や臨床指導者は困難さを実感している。1施設への配置が8名と多い場合は小児外科の3日間入院の同じ疾患2事例を受け持つなど工夫して、学生の学ぶ環境を確保している。障がい児の看護ができる別府発達医療センターと一般的な小児看護を実施できる県立病院との調整は、中間カンファレンスで情報を共有している。学生の中には、障害児の看護を経験しなかったなど要望があったので、次年度は実習前に事前調査を行い改善する。

小児看護に特有の看護技術は、実習終了後に記録物の集計を行い小児科外来実習を半日加えたことで技術の実施や見学できた学生が増えていることが明らかとなった。技術の実施についても積極的に実施する姿勢を育成し、動機づけすることが必要である。

#### 4 卒業研究

- ・小児の訪問看護の実態と看護師の自律性に関する検討
- ・月経教育に関する文献的検討
- ・母親の食意識と3歳児の肥満と食行動
- ・「母乳が不足している」という母親の母乳育児に関する認識

#### 3-5-12 母性看護学・助産学研究室

##### 1 教育方針

母性看護学・助産学は、専門看護学講座の4科目群の中の1科目群に位置している。

母性看護学では、女性のライフサイクル及びマタニティサイクルにある母性各期・新生児の健康現象に対する援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。母性看護学の実習は周産期に重点を置いて展開している。

助産学（選択科目）では、独自の判断で助産（妊娠・分娩・産褥・新生児期）過程を展開し、さらに広く母子及び家族の健康と福祉を促進するための理論と方法について学ぶことを目的としている。保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で、実習中分娩の取り扱いについて、助産師又は医師の監督の下において、学生一人につき、正期産を10回程度直接取り扱うことが定められており、本学では9例以上を目安とすることを基本的考え方としている。助産師教育は、卒業時点までにどこまでできることが望ましいかを基本にすえ、最小限、社会ニーズの変化に対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。しかし、現在おこなわれている4年制大学の教育環境下では、実習期間（8週間）内では、妊娠期の経過診断の訓練や分娩介助10例程度が守れず、夏休みを利用して10例に達するという現状の問題点を抱えており、選択科目としての課題について継続検討中である。

## 2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論を、実習で実践し理論と実際を結びつけることを目標としているが、今年度は、実習期間中の分娩が少なく正常分娩見学ができない学生が74名中16名にのぼった。そのため看護過程の展開は異常の妊婦・帝王切開後の産婦を対象に行った。看護過程展開に関する参考文献検索等の自主的学習姿勢に学生間の差が見られた。改善点としては、更なる個別指導の重視に心がけたい。

今年度の助産学専攻者は学部生15名とダブルの学生2名計17名である。助産学教育は先ず、3年次から母性看護学援助論と同時並行で、助産学概論、助産診断・技術学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの講義が開始されている。9月末から12月まで第4段階実習（母性看護の実習）を終え、また、1月から3月まで助産診断・技術学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの講義が継続して行われている。4年次の4月から5月中旬まで助産診断・技術学Ⅳ（助産過程、及び分娩介助演習）が組み込まれている。本年度の助産学実習は、昨年のやり方を踏襲した。助産過程演習（16時間）ではテキストに準じた情報の枠組みを作成しペーパーペーセントで2事例を展開し、助産学実習で活用した。しかし、6単位の实習期間では6人で安全性の判断をし、実施できるところまでは無理であり、目標をどこに置くかが大変難しい。また、分娩介助を10例程度（9例以上）取りあげるために実習期間が夏休み休暇に14日間延長したこと等、学部の助産学教育が非常に過密であることは例年と同じく大きな課題である。今年度の1学生の分娩介助数は9例から12例であり、平均9.9例で文部省に報告した。母性看護学実習も助産学実習も少子化の影響が大きく、実習効果はその実習調整の努力に負うところが大きい現状である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 母性看護学概論

2年次 前期

宮崎 文子、林 猪都子

母性看護学の基本概念として、人間の性と生殖（種族保存）の側面から女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点をおき、母性看護の役割と重要性について系統的に教授した。実施状況は次のとおりである。1. 母性とは・母性看護とは（倫理面の強化）、2. 母性看護の変遷、3. 人間の性と生殖の概念と意義、4. リプロダクティブヘルス・ライツの概念、ジェンダーとSex、5. 家族関係の理論とサポートシステム、6. 母性看護の理論と実際、7. 胎児の成長・発達（母子の歯科保健を含む）、8. 母性愛着行動と母子関係、9. 思春期の特徴とその対応、10. 家族計画と受胎調節、11. 人工妊娠中絶の諸問題、不妊症、12. 更年期・老年期の特徴とその対応、13. 母性の環境と諸問題（労働・環境汚染・文化）、14. 母子保健に関する諸制度である。評価は、講義中1回、終了後1回の2回である。講義終了後全体の授業評価を行った。その結果、出席状況は3.9（5点満点）で講義の満足度は83.9（100満点）で大変興味を示して望んだ。

本年度の改善点：試験を2回行ったこと。母性看護の内容は学生自身であり極力学生参加型の授業となるように、質問形式の授業展開を心がけた。今後の課題としては、社会変化に対応した教授内容の精選と判断力・思考力に重点を置いた教授法の更なる継続検討である。

## 2) 母性病態論

2年次 後期

堀永 孚郎、肥田木 孜、谷口 一郎、宇津宮 隆史、関屋 伸子、戸高 佐枝子、上野 佳子

母性看護に関連する主要な疾患に関する理解を目的とした。対象とした疾患は、女性のライフサイクルにそって、思春期から更年期までの疾患と異常妊娠・分娩・産褥に大別した。教員に加えて地域の産婦人科医および臨床心理士を非常勤講師とし、子宮ガン検診の動向や性感染症の実態、最先端の不妊治療などを教材として取扱うことで学生の興味・関心を引き、より一層、疾患の病態・生理に対する理解を深めるよう工夫した。さらに、主要な疾患の検査・治療の理解から対象の看護に学生の関心や理解が繋がるよう配布資料を作成した。

## 3) 母性看護援助論Ⅰ

2年次 後期後半

関屋 伸子

妊娠の成立を理解するために、生殖器の解剖生理およびホルモン動態等の生殖機能から教授した。初回の調査から学生の約3割が身近に妊婦や新生児と接した経験がないという結果を得た。これを踏まえて、妊娠・分娩・産褥・新生児の特徴を学生がより具体的に理解できるように、ビデオ・模型等の視聴覚教材を頻回に利用した。このような視聴覚教材の使用は、妊産婦および胎児の看護について講義内容のわかりやすさや関心に繋がったことが学生評価から把握できた。

## 4) 母性看護援助論Ⅱ

3年次 前期前半

関屋 伸子、高瀬 恵子、渡辺 しおり、武石 美智代

分娩期から産褥期における母子およびその家族の特徴とその看護について教授した。地域で活躍する助産師を非常勤講師に招き、トラブルを抱える母子や母乳育児に関して臨床における看護の実際を具体的な事例を通して学ぶ機会を得た。また、新生児の生理的特徴については正常新生児だけでなく核黄疸や先天性代謝異常等の異常症状と比較することで、早期新生児期におけるアセスメント能力が身に付くように工夫した。褥婦の看護に関しては実習施設のタイムテーブルを示すことで、より身近に対象を感じる事ができるよう配慮した。

## 5) 臨床母性看護総論

3年次 前期前半

関屋 伸子、高瀬 恵子、戸高 佐枝子、梅野 貴恵

狭義における母性看護として、主に周産期における母子とその家族を対象とした。学生は、セルフケア能力が高い対象に対し看護の必要性を理解し難いことからウェルネスの視点で母性看護を捉えることに力を注いだ。臨床施設に準じた記録様式を用いてペーパーペーシェントの看護過程の展開をグループワークや個人学習にて行った。また、臨床において特に用いられる母性看護技術について小グループ毎に教員の指導のもとに演習として学んだ。看護過程の展開および看護技術についてはそれぞれレポート課題とし、学生が思考を整理する機会を作った。グループワークにおいて学生は積極的に学習する姿勢が見られた。

## 6) 助産学概論

3年次 前期前半

宮崎 文子

助産および助産の基本概念について、歴史的変遷から概説し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性について、更に助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。内容は次に示すとおりである。1. 助産学の構成、2. 助産の本質・意義・対象、3. 助産の原理原則、4. 助産の歴史とあり方、5. 助産風俗、6. 母子保健の動向と諸制度、7. 助産師の職制と業務（諸外国と日本）8. 助産師教育（諸外国と日本）、9. 助産学を構成する理論・助産過程の基本、10. 助産師と倫理、11. 諸外国の助産師活動、12. ICM（国際助産師連盟）の活動、13. 日本の助産師の現状と課題、14. 助産学と研究。評価は試験1回と課題レポートである。出席状況は100%出席で、講義内容には大変興味を持って参加した。

本年度の改善点：昨年同様課題を与えレポートを課し、文献検索・思考力の訓練の強化を図った。今後の課題は情報化時代の講義内容の精選である。

## 7) 助産診断・技術学Ⅰ

3年次

林 猪都子、戸高 佐枝子

助産診断に基づいて、助産を実践するための基本的な知識と技術を理解するために、妊娠期、分娩期の助産診断、援助技術、保健指導についての講義と演習を行った。妊娠期の確定診断、時期診断、経過診断の内容に加え、妊娠期の超音波診断ができるように妊娠期の超音波診断の講義を充実させた。分娩期は分娩経過診断ができるために、分娩経過と児頭回旋、内診所見の関係が理解できるように骨盤模型や内診モデルを使用して講義を行った。今年度は、分娩期の呼吸法の演習を充実させた。学生は関心をもって積極的に参加していた。

## 8) 助産診断・技術学Ⅱ

3年次

小西 清美、高瀬 恵子、武石 美智代

思春期、マタニティサイクル、更年期の時期における女性の内分泌の変動に伴う自律神経の変化や助産ケアのEBNについて強調した。産褥期は外部講師に依頼し母乳哺育支援について、2コマ実施した。学生は「母乳育児を成功させる10か条」について、具体的に理解できたと思われる。新生児の病態については、自己学習と発表の時間を設けた。結果、全ての学生が熱心に授業に参加し、広範囲に学習を深められた。新生児の演習では、全ての学生が出生直後の新生児の取り扱い、新生児の蘇生、計測を体験した。産褥期の退院指導では、グループで事例を通して、指導計画案、パンフレット、指導案を作成し提出するとともに、ロールプレイにて発表させた。本年度から保健指導のロールプレイによる発表を行ったが、指導方法（指導内容、指導場所、指導教材、媒体等）について、色々な視点から意見交換があった。

## 9) 助産診断・技術学Ⅲ

3年次

佐藤 昌司、飯田 浩一、馬場 真澄、豊福 一輝、軸丸 三枝子、林下 千宙、宇津宮 隆志、山口 裕子、中村 聡、後藤 清美、嶺 真一郎

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と異常及び新生児医療について、それぞれの専門とする医師によって講義された。学生全員とも熱心に講義を受け、成績は全員60点以上であった。

## 10) 助産診断・技術学Ⅳ

3年次 後期後半

林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子、高瀬 恵子

分娩期の助産診断の講義と症例を用いて、入院時から分娩経過の予測と助産診断が行えるように、助産過程の展開を行い、実際に助産学実習で活用できるように教授した。「助産診断システム研究会」の助産診断の概念枠組みを用いて、時期診断、状態適応診断、経過予測診断が行えるように、1事例をグループ学習で展開し、1事例を個人課題として取り組んだ。グループ学習での事例展開の内容解説を最終日に行い、学生の学習理解を深めた。

分娩介助演習では、側面介助法（1日4コマ）、正面介助法（1日4コマ）の2通りの介助法を習得させている。演習方法では、1コマ目は、分娩介助の方法を解説し、教員がデモンストレーションを行った後、残りの3コマの演習は、直接介助、間接介助、新生児の役割などを決めて、教員の指導のもとで全員が最初から最後までの一連の流れを実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、次の段階では助言なしで一通りの分娩介助技術が行えることを目標に、分娩介助評価表を用いて、5回以上の直接介助を実施した。技術の評価は、グループの評価者、教員が技術チェックを行った。

## 11) 地域助産活動論

4年次 後期前半

宮崎 文子、小西 清美、戸高 佐枝子

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理（経営管理）の歴史的変遷、開業権を持つ専門職業としての概括的な知識・考え方および地域助産活動に必要な理論と方法について教授した。

講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意している。

改善策は、特に助産師の自立の視点から助産所の経営管理の中でマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。課題としては、今後は経営管理の理解を深めるためには助産所実習との関連性を強化し、助産所実習期間（現在3日を1週間に）の延長をしたいがカリキュラム上の制約のため希望実習で補充したい。

## 12) 母性看護学実習

3年次 後期

高瀬 恵子、戸高 佐枝子、梅野 貴恵 宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子

母性看護学実習の実習施設は2施設である。今年度は、施設毎に1グループ5～8名の学生と1～2名の担当教員という組み合わせで、2週間（延べ12週間）の実習を行った。

実習は学生に1名の妊産褥婦を受け持つように配慮し、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開の実際を体験学習させた。今年度は実習期間の少子化の影響で16名の学生が分娩見学実習が出来なかった。全ての学生に生命誕生の場面を通して自己を振り返ることで母性看護の概念を認識できた実習ができなかったことが残念である。しかし、母性各期の保健指導はそれぞれが工夫し取り組みが出来た。

実習施設と学生数（実習延べ期間12週間）

大分県立病院4階東病棟、産科外来（学生数43名）：16名の学生が分娩見学できなかった。

堀永産婦人科医院（学生数31名）

## 13) 助産学実習

4年次 前期

高瀬 恵子、戸高 佐枝子、梅野 貴恵 宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子

助産学実習は、妊娠中から産後までの家族を含めた継続的な援助および、安全で安楽な「いいお産」が出来る助産能力を身につけるための実践実習を重視した。

本年度の助産学専攻学生は17名（ダブルスクール2名含む）である。実習施設は、分娩状況からみて以下の5施設で学生、担当教員、専任教員の組み合わせで指導に当たった。少子化が急速に進行する現状での分娩介助10例程度（規定：9例以上）は助産学実習の課題である。今年度も実習期間中の分娩件数不足が予測されたため夜間実習を余儀なくした。また学生の希望実習（夏休み14日間）により17名が達した分娩介助件数は9例から12例であった。昨年の反省から産褥期の記録物の簡易化を図り、大幅な記録物提出の遅れは見られなかったが、分娩進行におけるアセスメントが弱い傾向にあり、今後の課題である。

<実習施設と学生数>

1)大分県立病院4階東病棟：異常妊婦・NICU実習（1学生母体搬送・帝王切開受け持ち 1例含む）、産科外来で1学生10日間 延べ2週間：学生数17名（ダブル含む）

分娩介助実習（前期学部学生9名、後期学部学生4名、ダブルスクール学生後期：2名）

2)堀永産婦人科医院（6週間）：前期2週間4名、後期4週間6名、

ダブルスクール学生前期6週間：2名

3)くまがい産婦人科医院（6週間）：前期2週間学部学生2名、後期4週間学部学生3名

4)別府医療センター4週間：後期学部学生2名

5)生野助産院（1学生2日間 述べ2週間）：学部学生数8名、

ダブルスクール学生（発達看護学演習）9～10月に1週間：2名

6)渡辺助産院（1学生2日間 述べ2週間）：学部学生7名

ダブルスクール学生（発達看護学演習）9月～10月に1週間：2名

7)友成助産院（1学生1日間 述べ15週間）：学部学生15名

## 4 卒業研究

- ・ 妊婦の入浴における不便さに関する研究
- ・ 分娩介助実習における助産学生の内診法習得状況と不安
- ・ 産褥早期における清拭が心身に及ぼす影響
- ・ 産褥早期における足浴による乳房皮膚温の経日的変化
- ・ マタニティビクスを継続した女性における産後のアフタービクスの効果 —ストレス測定器を用いて—
- ・ 産褥3日目における足浴による乳房への効果
- ・ 妊娠経過・運動回数別マタニティビクスの精神的効果 —ストレス測定器を用いて—
- ・ 妊娠末期における初産婦の睡眠と母性不安の検討

## 3-5-13 精神看護学研究室

### 1 教育方針

卒後の進路にかかわらず「人のこころの健康に関する援助」についての視点・知識・技術・態度を培うことは重要なので、そのことを目標に2つの講義と演習・実習を一連の流れとして意図して、授業構成している。特に、精神疾患やこれを有する人に対する偏見を払拭することを、重要な目標の一つとし、精神科医療の現場で学生が体験したことが、長く心の傷となったり新たな偏見の種になったりしないよう注意を払っている。また、精神科病棟以外の「生活の場」に目を向けること、精神科医療以外の場でもこころの健康に配慮する習慣を培うことを重視している。

### 2 教育活動の現状と課題

全科目に共通することとして、a) 精神障がい（者）に対する偏見の是正、b) 学生が興味と関心を持って自律的に学べる工夫、c) 授業の前後や途中で学生の関心・希望・理解度等を把握しタイムリーに授業へフィードバックすること、の三点に配慮するよう心がけている。2年次の講義までの既習知識（人間心理学など）に個人差が大きく、3年次後期の実習までにクラス全体を一定のレベルまで高めるには講義・演習の時間に不足を感じるが、学習内容の精選を図りながら努力している。演習・実習を通じて、学生が精神看護以外の領域で学んだはずの知識・技術が十分応用されない傾向と、逆に他の領域で学んだことを単純に精神看護の領域にも当てはめてしまう問題の両方の課題がある。したがって、“精神看護の考え方の特徴は何か”という点と、“精神科での看護とはどのような実践か”という点のそれぞれについて、実践経験の少ない学生に具体的なイメージを効果的に伝える工夫が課題である。また、このイメージを学生が確認する機会としての演習・実習について、学生がどのような取り組み方をすれば効果的な学習になるか、ということ“学生に伝わりやすい語彙”で説明する、という面でさらに工夫の必要がある。



### 3 科目の教育活動

#### 1) 精神看護学概論

2年次 後期前半

影山 隆之

オリジナルテキストを毎年改訂しているが、今年度は順序性を変更し、医学モデルとこれに基づく症状論・疾病論を先に学習して、心の健康を理解するための他のモデルおよび精神看護の歴史を後から学習した。学生にはこの順序のほうが理解しやすいようだった。ただし今年度は、担当教員が3年次実習の現場に出る必要があったため、2年次のこの講義は大幅な休講・補講を余儀なくさせられ、学生にも不便をかけた。この影響で、授業時間内に小レポートを提出されても翌時間に返却する時間の余裕がないので、今年度はこれを実施できなかった。精神疾患をもつ当事者が出演するビデオは学生にインパクトが大きいようだった。前年度に続き筆記試験を2回に分けたことも、学習意欲を引き出すためには有効だった。

#### 2) 精神看護援助論

3年次 前期前半

大賀 淳子

昨年度の反省（講義範囲、内容ともにボリュームが多く、一部の学生から「重要なポイントが掴みにくかった」という批評があった）を踏まえ、扱う疾患の数を減らした。また、初回講義で「精神障がい者に対する看護学生のイメージ、社会的態度」を扱い、これらを測る尺度を学生に実際に使用させ、その結果をフィードバックすることにより、講義への意識づけを図った。また、前年度までと同様、毎回ミニテスト・レポートを課し、その結果を次時間に学生へフィードバックし、学生の学習範囲が広がるようにした。その結果、学生による授業評価では、「関心」「具体例」「学生の参加」などで高い得点を得ることができた。しかし、「内容の整理」「ポイント提示」の得点は、同学年の平均値より低く、学生が不満を抱いている点であり、さらに改善する必要がある。

#### 3) 精神看護学演習

3年次 前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、内田 竜子

講義で学んだ基礎知識を土台とし、事例の見立てと看護計画の立案・展開能力を高めるために、実践で出会う可能性の高い事例や場面を想定しながら進めた。

事例の見立てと看護計画の立案についての演習では、段階的に少しずつ課題を発展させながら、最終的には実習のワークシートと同じ様式で看護計画を立てるところまでを目標とした。同一事例について、さまざまな学生・グループによる見立てを討論する過程は、学生にとって興味深い学習になったようだった。ただし、精神看護以外の領域との用語の異同は、学生にとって使い分けがむずかしいようだった。また、事例の提示の仕方や演習での討論が、かえって学生の視野を規定してしまい、他の事例に対しても捉え方・考え方が固定的になってしまう危険もあることが示唆された。提示情報については継続的に精選してゆく必要がある。

コミュニケーションについての体験学習では、ロールプレイを通して「聴く」「聴いてもらう」経験を味わい、インタビューの大切さと難しさを共有できたようだった。ただし、全学生が一つのフロアに散らばる空間は講堂か体育館しか得られないのだが、必ずしも演習に適切な空間とは言えない。この課題については今後検討の必要がある。

#### 4) 精神看護学実習

3年次 後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、小野 富美子、木下 結花里、廣瀬 真弓

大分丘の上病院において、病棟、外来、デイケア、訪問看護の各部門での実習を通して、精神科医療施設での看護だけでなく社会の中での精神看護の役割について学ぶことを目標とした。ただし、実習直前に院内体制の再編成があったことと、担当教員の変更や病欠といった条件が重なり、“準備万端”とは言えない指導体制での12週間だった。1)一部の学生について、教員による指導に継続性が欠けたことにより不利益を与えた面があった。教員の人員確保に加え、教員間の連携を支援するためのマニュアル等を充実する必要がある。2)病院の電子カルテ導入に伴い、学生の記録閲覧に制約が大きくなったので、次年度はこれに対応した事前学習を検討する必要がある。3)訪問看護での学びを再開できたことについては、学生に好評であった。4)精神看護以外の領域で学んだはずの知識・技術を十分に活用できていない学生や、時間に遅刻する学生が見られた。演習から実習に至る流れの中で再確認する必要がある。5)デイリーカンファレンスや中間カンファレンスは時間超過することが多かったが、常に十分な成果を挙げたとはいえない。3,4とも関連することとして、学生間の情報交換や学生同士の協力の意義と、実習中のカンファレンスの持ち方について、事前学習を確かなものにする必要もある。

#### 4 卒業研究

- ・大分県における自殺対策のために一性・年齢階級別の「病苦」自殺率および「経済・生活苦」自殺率の検討
- ・ある化学系工場における交替勤務者の夜勤中の眠気と関連要因
- ・森林浴の心理的効果に個人特性が及ぼす影響－山村育ちと都市育ち－
- ・看護学生の倫理的場面での葛藤と性格特性との関連
- ・子どもたちとの世代間交流をするボランティア活動が中高年参加者の精神健康に寄与する可能性について

#### 3-5-14 保健管理学研究室

##### 1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術の習得を目的として、学生自らが考え実践することを重んじた教育プログラムを組み立てている。1年次は、講義により健康という概念を理解するとともに、実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多様な健康ニーズを学び、今後の学習の動機付けができることを目指した。また、2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習では健康教育の展開を通して、実践に必要な看護技術を体験的に習得することを目標にしている。

## 2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容を検討している。また、他の講義や実習との結びつきを考えて、1年次、2年次では基礎的知識を、3年次ではより実践に視点をあてた保健活動が理解できるように、講義・演習の内容を組み立てている。3年次の演習では、健康教育を課題とし具体的な事例検討を通して実践能力を養うとともに、これまで学習した保健・医療・福祉のシステムや看護職の役割を理解するため、一人ひとりに課題を出し資料作成するなど、課題の構成に配慮したことはその一環である。しかし、1年次、2年次で学習した内容から、3年次以降の講義・演習を通して、地域で活動する看護職の活動の理解にはうまく結びついていない状況があり、いかに学生が具体的に実践をイメージし理解しながら知識と技術を獲得し、さらに地域実習につなげていけるよう教授していくかが課題である。

## 3 科目の教育活動

### 1) 健康論

1年次 前期前半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

健康の概念と健康に対する考え方の歴史の変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。

担当（講義回数）と概要

草間 朋子（1）大分県立看護科学大学における教育方針、

桜井 礼子（5）看護の視点から健康を考える、ライフサイクルと健康、健康づくりと健康日本21の展開、

健康づくり 健康と運動、喫煙、飲酒、こころの健康

平野 互（2）疾病構造とライフスタイル、健康度の評価、

高波 利恵（1）健康と環境

朝見 和佳（1）健康と栄養

坪山 明寛（1）看護職の役割と感性

宮崎 文子、高野 政子、赤司 千波、影山 隆之、工藤 節美、李 笑雨 各専門分野における健康課題と看護職の関わり

## 2) 保健福祉システム論

2年次 後期

平野 互

まず「権利」について論じたのちに、憲法に謳われた基本的人権である生存権を実現するための制度的保障すなわち社会保険、社会福祉、国家扶助および保健・医療を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。社会保障制度が大きく転換し、医療法や保健関連法規も毎年のように変わっているため、法体系と諸制度を体系的に理解できるよう整理するとともに、国家試験の出題傾向に対応できるよう講義を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要なリスクマネジメントや、インフォームド・コンセントと個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など患者・障がい者の諸権利の諸相について論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

学生の授業評価からは、おおむね学生が講義の意図を理解し、少なくとも権利や社会保障制度に対する関心を高めて、制度の枠組に対する理解ができたことが伺えた。その一方、例年同様に学習意欲が低く成績も良好でない学生は存在し、学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るためのさらなる工夫の必要性があると考えられる。

## 3) 保健活動論

3年次 前期・後期

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践ができるよう演習を行った。

担当（講義回数）と概要

桜井 礼子 (9) 地域保健活動、救急医療と災害看護活動、学校保健

平野 互 (2) 健康教育

高波 利恵 (4) 産業保健活動

内田 勝彦 (1) 保健所の役割と活動の実際（宇佐豊後高田県民保健福祉センター所長）

日本赤十字社(4) 救急救命処置の基礎（講義1，実技演習3）

## 4) 看護の倫理

3年次 前期

平野 互、小西 恵美子

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、7回の講義と3回の事例演習を行った。講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「患者の権利：個人の尊重と自己決定権」および「出生と死に関わる倫理」を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」、「看護師の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小西が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに、志願者を募ってスモール・グループによる発表・討議を9題行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

## 5) 保健管理学演習

3年次 後期後半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から個人および集団の健康問題について多面的に検討し、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習は、地域、学校、産業などの保健活動の場での健康教育の実際を学ぶために、具体的な事例を用いて、それぞれの健康問題を明確化し、どのような健康教育を行うか、小グループに分かれてグループワークを行った。また、保健活動の根拠法、社会制度や社会資源の活用について理解するために、事例を展開するために必要な事項に関して学生一人ひとりに課題を提示し、レポートにまとめ、学生間で共有する資料を作成した。最後に発表会で各事例についてロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、他のグループの学びを共有するとともに、ディスカッションを通してより深い考察ができるような場とした。

学生は、対象が個人及び集団へのアプローチとなるため、対象の具体的なイメージを持つことが難しく、健康教育の展開については、今後第4段階の地域実習で学びが深まることを期待したい。

## 6) 初期体験実習 Early Exposure

1年次前期（7月10日（火）～7月18日（水）の6日間）

朝見 和佳、安部 恭子、安東 恵子、内田 竜子、江月 優子、江藤 真紀、大賀 淳子、岡本 文恵、小野 さと子、小野 富美子、河野 梢子、木下 結加里、後藤 愛、高波 利恵、田中 美樹、福田 広美、牧野 由佳里、松尾 恭子、八代 利香、吉田 智子、平野 互、桜井 礼子

初期体験実習は、3日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解することを目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、各施設での学びを共有し、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。初期体験実習は学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員に密に係わってもらいながら実習をすすめている。今年度は、実習施設として大分銀行が加わっている。

実習施設：20ヶ所

事業所：九州電力株式会社、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所、大分銀行

保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター

健診機関：大分労働衛生管理センター、大分県地域成人病検診センター

学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター

病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園、大分赤十字病院

介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑

地域保健：大分市、佐賀関病院

## 4 卒業研究

- ・ 広汎性発達障害児保護者の児の障害に対する受容プロセスに関する実態調査
- ・ 自閉症による生活障害の客観的評価に関する研究
  - －施設入所の自閉症者の支援ニーズからみた障害評価－
- ・ 高齢者サロンでの「お元気じゃんしゃん体操」の普及のための自己チェック表の利用とその効果
- ・ 中高年女性の腹筋力の実態とトレーニングの効果
  - －自宅で簡単にできる腹筋トレーニングを試みて－
- ・ 三次元動作解析を用いた中高年女性の歩行能力と筋力との関連
  - －大腿筋力トレーニング前後の比較から－
- ・ 労働者の健康行動の現状　－大規模事業所と中小規模事業所の比較－
- ・ 乳がん検診の受診行動に影響を与える要因の分析

## 3－5－15 地域看護学研究室

### 1 教育方針

個人、集団、地域へと視点を広げ、地域を包括的に捉えた看護活動を行うために必要な基本的な考え方、援助方法を身につけることを目的に、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論Ⅰ、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習の科目を設けている。特に、在宅看護論、地域生活援助論Ⅰでは、実践現場で活動する訪問看護師や市町村保健師の講義を取り入れ、地域看護の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目及び関連領域の科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習・実習の内容や方法を工夫を行っている。

### 2 教育活動の現状と課題

在宅看護論、地域生活援助論Ⅰの講義では、実践活動との連動性を重視し現場の訪問看護師や市町村保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人、集団、地域を対象とした具体的な看護展開ができるようするために、学内演習で実習場面を意識した内容を取り入れている。例えば、実習直前の演習では、地域の健康問題を踏まえた活動内容を理解できるよう、実際に学生各自が実習を行う地域の既存資料をもとに、地域看護診断を行っている。また、個人を対象とした援助では、育児不安や生活習慣病のペーパーペイシエントを用いた看護過程の展開、家庭訪問場面における保健師が行う保健指導のロールプレイ、入浴、移動の基本的看護技術を取り入れ、地域における看護活動の視点や、具体的な援助技術について理解し習得できるよう工夫している。実習終了後には、今後の演習内容を検討するため、学生が訪問看護ステーションで体験した看護技術の項目や実施頻度について調査を実施した。今後も、社会や地域の動向に合わせて、常に教育内容を見直し検討していく必要がある。

### 3 科目の教育活動

#### 1) 地域看護学概論

2年次 後期前半

工藤 節美

地域における個人や家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的内容について講義した。主な内容としては、地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルス・プロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人と家族、集団、地域）、地域看護の変遷、大分県の地域看護活動である。資料やパワーポイント、ビデオ等を活用して、学生の地域看護学についての理解を深め、地域看護活動をイメージを膨らませるための工夫を行った。

#### 2) 家族看護学概論

3年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に、家族看護過程の演習では、「家族を一つのユニット」として捉えて援助するカルガリー家族アセスメントを取り上げ、その意義や方法を理解させるためにロールプレイによる家族インタビューを用いて、具体的な体験を通して家族看護学についての理解が深まめられるよう工夫した。

#### 3) 在宅看護論

3年次 後期後半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、安東 恵子、岡本 文恵、工藤 武子

□疾病や障害をもちながら在宅療養する人々とその家族に対する看護を行うために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、在宅看護の概念、在宅看護の活動の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、生活支援の方法、医療依存度の高い人のケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際、在宅看護過程の演習である。在宅看護過程の演習では、グループワークの方法を用いて、在宅療養を行っている高齢者の事例（ペーパーペイシエント）に対する具体的な看護計画を立案した。さらに、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際では、大分県看護協会訪問看護ステーションで活動している訪問看護師を講師として招き、具体的な活動内容や今後の課題等について学びを深めさせた。

#### 4) 地域生活援助論I

3年次 後期後半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、岡本 文恵、安東 恵子、古庄 康子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習を行った。主な内容としては、地域看護活動の展開、地域看護活動の展開の演習、健康相談と家庭訪問、地域看護活動とヘルスプロモーション、母子保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、感染症保健活動の演習、精神保健活動、障害者保健活動、地区組織化活動とセルフヘルプグループの育成、災害看護活動、市町村における地域活動である。市町村における地域看護活動では国東市の保健師を講師として招き、地域看護活動の実際や今後の課題について講義を行った。地域看護活動の展開の演習では、大分県内のA町を事例として用い地域看護診断を行い、既存資料の分析、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を学ばせた。感染症保健活動の演習では、感染症法にて二類感染症に位置づいている結核に罹患した高齢者の事例（ペーパーペイシェント）を用いて看護過程の展開を行い、具体的な支援方法について学ばせた。また、地域看護診断と感染症保健活動の演習では、演習終了後に学生の振り返りの時間を設けて演習内容の評価をフィードバックし学びが深まるよう工夫した。

教育方法については、学生の知識やイメージを深めさせるためにパワーポイント、ビデオや資料等は活用した。その結果、「具体的な活動のイメージができた」「保健師の仕事に魅力を感じた」等の感想があった。今後も、授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の精選（質・量）と効果的な活用方法について検討していき。さらに、法改正や保健事業の見直し等によりますます複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解させるための授業内容の検討を行う必要がある。

#### 5) 地域生活援助論II

4年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、安東 恵子、高波 利恵、朝見 和佳

地域看護学実習前の演習として位置づけ、実習地域の既存資料を用いた地域看護診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導、高齢者の入浴介助等のロールプレイを行った。各演習は、グループワークを中心に進め、教員が各グループを担当して学生の理解度、技術習得状況に応じてきめ細かな指導を行った。特に、既存資料を用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導に反映させていただく資料とする等、地域看護学実習との有機的な連動に努めた。さらに、新生児家庭訪問での母親に対する育児指導では「児の成長発達を理解したうえでなければ、対象者に中心の保健指導ができないことを痛感した」等の感想があり、知識と技術の統合の重要性を学生自ら実感できる機会となった。



## 6) 地域看護学実習

4年次 前期前半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、安東 恵子、岡本 文恵、桜井 礼子、平野 亙、高波 利恵、朝見 和佳、八代 利香、安部 恭子、内田 竜子、小野 さと子、小野 富美子、河野 梢子、田中 美樹、吉田 知子

大分県下全域の県民保健福祉センター（保健支所を含む）及び保健所13と大分市保健所及び保健福祉センター3、市町保健センター及び支所24、訪問看護ステーション26の計66カ所の施設に、それぞれ学生を2～4名配置して1～2週間（大分市保健所及び保健福祉センターのみ3週間）の実習を行った。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職が実習場で直接的な指導を行い、担当教員は各施設を巡回して、中間及び終了カンファレンス指導、記録指導、実習施設や指導者との調整等を行った。実習内容は、市町と訪問看護ステーションではそれぞれ少なくとも1名の対象者への訪問指導、また市町では地区視診と集団を対象とした健康教育を必ず体験することとした。

今後は、保健所の再編や機能強化、法改正や保健事業の見直し等の社会の変化や保健医療福祉システムを踏まえ実習内容や実習形態の工夫が必要である。

## 4 卒業研究

- ・高齢者の主観的転倒予測と転倒恐怖感の関連性の検討
- ・在宅終末期がん患者家族への訪問看護師の援助内容の分析
- ・10代の母親に対する看護職の育児支援の検討
  - 母親の生活と育児への思いに焦点を当てて -
- ・介護予防活動に関わっているボランティアの自己の健康意識と生活習慣の関連
- ・高齢者における転倒と身体バランスおよび足部柔軟性との関連
- ・介護をおこなっている家族を評価する尺度についての文献検討

## 3-5-16 国際看護学研究室

### 1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, develop an understanding of global health issues and strategies; realize roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses. Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a trans-cultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

## 2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities:

Texts, presentations, questions and answers are carried out in English.

To promote the understanding, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual lectures.

English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study;

Detailed seminar orientation such as on the themes of self-study, references, methods of presentation, and a locus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-study and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students;

Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

## 3 科目の教育活動

### 1) 国際看護学概論

2年次 後期

Lee So Woo, Professor,

Objectives and contents;

1. to develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
2. to describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
3. to understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. to develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. to develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation, Introduction to the International Nursing
2. Relations Some Factors in International Nursing
3. Concepts related to International Nursing and Health
4. Globalization in Nursing and Health
5. Risks to Health and Life in the World
6. International Health Networks; World Health Organization
7. International Nursing Networks; International Council of Nurses
8. Wrap-up, evaluation of the course

## 2) 國際看護比較論

3年次 後期

Lee So Woo, Professor,

Objectives:

1. to develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. to develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. to develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Orientation to the course and overview of international nursing
2. Issues and Challenges for Health Development
3. Global health strategies for all
4. Human resources; planning and development for global health and nursing
5. International relief organizations; activities during war and disasters (JICA)
6. International relief organizations; activities during war and disasters (IFRCS)
7. Global Nursing Workforce; status, issues and strategies
8. Wrap-up, evaluation of the course

Evaluation;

Written test on the course content

Written Reports submitted by the students of the 9th International Nursing Forum

### 3) 国際看護学演習

3年次 後期

Lee So Woo, Professor,

Objectives of the Course:

1. to develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. to develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. to develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Human resources for health or/and nursing of a nation
- IV. Foreign Country' s Impact and context of aids by JICA

Evaluation;

Group-work reports; contents (reports), participation, presentations in the class room (oral presentation with visual aids) with English

### 4 卒業研究

- Japanese Nurses Job Satisfaction compare with Korean Nurses  
日本の看護師の職務満足に関する検討ー日本と韓国の職場満足度の比較からー
- Study on Nurses' Care Approach to Terminally Ill Children in Korea and Japan  
小児科看護師の終末期の子どもに対するアプローチー日本と韓国の看護師に着目してー
- Literature Study on Ghana Maternal and Child Health  
ガーナにおける母子保健の動向に関する文献研究

### 1) 自然科学の基礎

1年次 前期前半

甲斐 倫明、岩崎 香子、定金 香里、吉武 康栄、品川 佳満、吉田 成一、佐伯 圭一郎、中山 晃志

人間科学講座の教員で分担講義を行った。入学直後の全体の学力を調べるための試験を行い、講義の参考にした。講義内容は次の通りである。

(1) 20世紀の自然観革命、(2) 生命の誕生と遺伝子の起源、(3) 生物の多様性と進化、(4) 体細胞分裂とDNAの複製、(5) 配偶子形成と個体発生、(6) 力とは何か、(7) 熱とは何か、(8) 情報とは何か、(9) 化学の基礎、(10) 有機化合物の構造、(11) 有機化合物の反応性、(12) 身の回りの化学反応、(13) 確率の基本-1、(14) 確率の基本-2、(15) 数学における2つの重要な記号、(16) 微分・積分法の意味とその応用、(17) 試験

### 2) 健康科学実験

2年次 後期

高橋 敬、安部 眞佐子、岩崎 香子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明、稲垣 敦、吉武 康栄

本健康科学実験では、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、10テーマからなる実験を行った。

1) 組織学実習(担当者:岩崎 香子、高橋 敬)、2) 血液生化学実験(担当者:安部 眞佐子)、3) 血液検査(担当者:定金 香里)、4) 基礎微生物学実習(担当者:吉田 成一)、5) ラットの解剖(担当者:市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里)、6) 室内空気汚染と水質汚染(担当:甲斐 倫明)、7) 放射線(担当:小嶋 光明)、8) 染色体異常(担当者:伴 信彦)、9) 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定(当者:稲垣 敦)、10) 心電図の成り立ちと心拍解析(担当者:吉武 康栄)

### 3) 総合人間学

4年次 後期前半

市瀬 孝道(学部長)

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回10月1日「カメルーンが来た村 坂本 休 (財)中津江村地球財団理事長

第2回10月15日「看護政策」清水嘉与子 清水 かよこ政策研究会 会長

第3回10月22日「動物と共に生きる」神田 岳委 アフリカンサファリ 獣医

第4回10月29日「外から見た大分の魅力」辻野 功 別府大学食物栄養科学部教授

第5回11月5日「聴こえないということ ～聴覚障害者のよりよい医療受診を目指して～」

佐藤 厚子 大分県聴覚障害者認定講師、矢津田 明子 大分県聴覚障害者認定講師 手話通訳

第6回11月12日「がんの外科治療の進歩」森 正樹 九州大学生体防御医学研究所分子腫瘍学教授

第7回11月19日「看護職の接遇マナー」釘宮 史子 大分エアビジネス学院 学院長

第8回11月26日「大分市における神経難病在宅人工呼吸管理と自動喀痰吸引装置の開発について」

山本 真 大分協和病院 院長

#### 4) 総合実習

4年次 前期後半

市瀬 孝道 (学部長)

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第4段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設(部署)には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育研究委員会所管の総合実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担し、学生は配置決定後の2月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行なった。実習に際して、担当教員は学生に同伴しないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の42施設の協力を得て実習を行なった。

#### 5) 看護研究の基礎 I

3年次 後期後半

市瀬 孝道 (学部長)

本科目は、卒業研究の意義や論文作成迄の一連の過程で必要とされる基本的な考え方、進め方、知識や技術を修得することを目的としている。2日間の集中講義で行なった。講義のテーマと講師は以下のとおりである。

平成20年2月18日

- |                  |         |
|------------------|---------|
| (1) 卒業研究の意義      | : 赤司 千波 |
| (2) 研究の倫理と安全     | : 平野 互  |
| (3) 実験研究の進め方の基礎  | : 吉武 康栄 |
| (4) 文献的研究の進め方の基礎 | : 高野 政子 |

平成20年2月19日

- |                    |         |
|--------------------|---------|
| (5) 調査研究の進め方の基礎    | : 江藤 真紀 |
| (6) データ解析の基礎       | : 佐伯 圭一 |
| (7) 文献検索の方法・文献の入手法 | : 影山 隆之 |
| (8) 論文のまとめ方・発表の方法  | : 林 猪都子 |

#### 6) 看護研究の基礎 II (原著購読)

4年次 前期～後期前半

市瀬 孝道 (学部長)

本科目は卒業研に究関連する原著、原書を検索、選択、購読し、専門論文の大意を把握し、研究を進める上での論理的な展開法、論文の書き方、作成法を学ぶことを目的としている、学生は卒論の研究期間中に3編の論文についてまとめ、それぞれの研究室で行なう抄読会で発表した。

## 7) 看護研究の基礎Ⅱ (総合看護学)

4年次 後期前半

市瀬 孝道 (学部長)、桜井 礼子、藤内 美保、大賀 淳子、小野 美喜、木下 結加里、関屋 伸子、田中 美樹、松尾 恭子

総合看護学は、基礎看護教育の総まとめとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、看護過程を展開、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことを目的としている。

グループワークとロールプレイを含むプレゼンテーション及びディスカッションにより、医療・保健現場において遭遇しやすい状況(場面、事例)を通して、多角的な見方や論理的な考え方を深め、適切にアセスメントする能力を身に付け、対象者のニーズや状況にあわせて判断し、安全安楽な看護技術を提供できることを目指した。

グループワーク9時間、発表に6時間で構成しているが、教員が適宜関わり、学生は課題のまとめやロールプレイの練習など熱心に取り組み、それぞれのグループがプレゼンテーションに望むことができていた。また、事例設定や発表会でコメントなど、各領域の先生方に協力をいただき、運営を行うことができた。

事例

- ・在宅：ターミナル事例
- ・慢性期：血液疾患事例
- ・急性期：循環器系事例
- ・急性期：呼吸器系事例
- ・小児事例
- ・母性事例

## 3-6 大学院における教育活動

### 3-6-1 博士(前期)課程

#### 1) 看護アセスメント特論

1年次 前期後半

小西 恵美子、伊東 朋子、高野 政子、藤内 美保

オムニバス形式で行った。

小西：院生の実施している研究を通し、研究方法論、研究にはらむ倫理、及び看護アセスメントの側面から、講義およびディスカッション形式で授業を行った。

高野：集中講義の形式で2コマ行った。内容は、1)小児のフィジカルアセスメントの基礎、2)小児のバイタルサイン測定の実際、3)小児の心音の正常と循環器疾患の異常、4)小児の呼吸音の聴取、正常と異常、これらの講義後に院生との意見交換を行った。

伊東：1つの論文を与え、その論文から学生の自由な発想で自分の研究に関連するクライテリアをどう構築していくかなどを発表させた。学生は一方的に発表して終わるのではなく、なぜか?と質問されることで思考を練る機会と修士論文の研究計画を立てる上で参考になるような助言を与えた。

藤内：集中講義で、呼吸器系のフィジカルアセスメント、循環器系のフィジカルアセスメント、消化器系のフィジカルアセスメント、感覚器系のフィジカルアセスメントを講義・演習形式で行った。人体モデルを使用し、眼底鏡で網膜、耳鏡で鼓膜などの観察や直腸診なども行い、最後にフィジカルアセスメントについてディスカッションを行った。

## 2) 精神保健学特論

1年次 前期

影山 隆之、大賀 淳子

前半では精神保健看護学の研究方法について、およびストレス・睡眠など最近の精神保健領域におけるトピックについて、オリジナルのハンドアウトに基づく講義と、具体的な研究論文の紹介を行った。参加者が少人数なので、具体的で深い討論が可能であった。

後半ではKeltner, N. L. et al. (1991). *Psychiatric Nursing: Fifth Edition.* の原著講読を行った。各参加者が選択した章（「Survivors of Violence and Trauma.」、「Child and Adolescent Psychiatric Nursing」）について、日本語訳の説明の後、ディスカッションを行った。

## 3) 基盤看護学演習

2年次 前期

小西 恵美子、影山 隆之、藤内 美保、松尾 恭子

オムニバス形式で行った。

小西:事前に、学生が経験した事例を文献検討とともに記述、提出させ、それをもとに、看護援助 Case studyをおこなった。

影山:質問紙による睡眠評価法の演習、および産業精神保健で使うストレス評価法の演習を行った。

藤内:解剖生理の基礎的知識の確認をし、対象を理解するために、観察すること、アセスメントすることについての演習を行った。インタビュー、視診、触診、打診、聴診など五感を使い観察する方法を実際に行った。

松尾:看護の視点を法的根拠に基づいて考えることで、問題解決方法を考える機会とした。講義では、自分自身が興味関心を持っている研究テーマが、どのような法律に関係しているのかを調べ考えることを討議のテーマとした。提出レポートからは、看護行為が多くの法律に基づいて行われていることを再認識するとともに研究に対する姿勢等も考察されていた。

## 4) 成人老年看護学特論

1年次 後期前半

赤司 千波

成人発達とエイジングについて講義・討論を行い、成人・老年期の発達課題・健康問題への理解を深めるために教授した。加えて、学生による課題発表を通して成人・老年期の発達課題・健康問題の理解を深める工夫を行った。



5) 生殖看護学特論

1年次 後期前半

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子

テキスト：「助産師外来」メデイカ出版 1998、「病院・診療所における助産師の働き方」日本看護会助産師職能委員会、2006、その他資料配布

履修学生：2名

今年度は夜間を中心に行った。

近年の産科医師不足に伴う助産師の有効活用が推進されている現状から、今年度は「助産師外来・院内助産」を取り上げ、その現状と問題点から説き起こし、助産師外来の立ち上げ方、院内助産についての理論と方法について教授し、併せて現在先駆的に実施されている全国の助産師外来・院内助産施設のモデルを選び、施設見学と発表を行い、レポートを課し、理想とする「助産師外来・院内助産」を展望することをねらいとした。

6) 母性看護学特論 1

開講せず

7) 母性看護学特論 2

開講せず

8) 母性看護学特論 3

開講せず

9) 母性看護学特論 4

開講せず

10) 母性看護学演習 1

開講せず

11) 母性看護学演習 2

開講せず

12) 母性看護学演習 3

開講せず

12) 母性看護学演習 3

開講せず

13) 母性看護学演習 4

開講せず

14) 母性看護学実習

開講せず

15) 発達看護学演習

1年次 後半前期

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子

演習場所：生野助産院、大分県立病院周産期母子センター

- ①助産院・病院において、妊娠期の経過診断についてMEの演習・訓練（助産選択者2名）
- ②修士論文テーマについて文献検討、原書講読を行った（宮崎 文子）。

16) 地域看護学特論

開講せず

17) 国際看護学特論

開講せず

18) 放射線保健学特論

1年次 前期前半

甲斐 倫明、伴 信彦、草間 朋子

医療で用いられる放射線・放射性物質及び環境中の放射線源とそれから被ばくに伴う健康影響についての基礎的な知識を講義した。さらに、医療および原子力災害において看護職が患者等との対応に必要な知識と放射線の健康リスクについて講義した。内容は次の通りである。(1)放射線とは何か、(2)放射線の健康影響、(3)労災補償、(4)妊娠と放射線、(5)医療放射線のリスクベネフィット、(6)放射線従事者の健康診断、(7)緊急医療と防災

19) 広域看護学演習

開講せず

## 20) 生体機能学特論

1年次

高橋 敬

生体機能学特論は1) 内部環境、2) ホメオスターシス、3) ヒエラルキーを中心に、生体を構築する「シート」形成について言及した。パワーポイントと動画を使い、フォーラム的な講義形態をとった。

## 21) 病態機能学特論

1年次

市瀬 孝道、吉田 成一

生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギーについてハンドアウトを用いて詳しく講義した。また、我々が用いる実験研究の生体成分の分析手法が看護研究にも応用可能であることを理解させた。更に、生体反応学研究室で行われている研究成果を個体、細胞、分子レベルで紹介し、研究を行う意義や必要性について教授した。

## 22) 健康増進科学特論

1年次 前期（昼間）・後期（夜間）

稲垣 敦

科学的な考え方から始め、看護職が臨地で健康増進活動を進める上で重要な概念や項目の解説と測定実習をおこない、レポートを作成した。

来年度は、心理学的なテーマも取り入れ、論文精読も入れる予定である。

## 23) 人間関係学特論

開講せず

## 24) 保健情報学特論

1、2年次 前期（夜間）

佐伯 圭一郎、品川 佳満

以下の内容を取り扱った。受講者が1名であるため、ディスカッションを増やし、演習を組み合わせ実施した。今回は受講者にあわせた調整を行って、情報処理、統計解析など、看護研究の実施に必要な能力の完成を目指した。

- ・統計学、疫学の基本と研究計画における留意点
- ・サンプルサイズ的设计 ・尺度の作成と評価
- ・SPSS応用と多変量解析 ・因果推論
- ・保健医療看護における情報システム

## 25) 看護科学研究特論

1年次 前期前半（夜間）

小西 恵美子、佐伯 圭一郎、稲垣 敦、伴 信彦

EBNの基礎となる看護科学研究の理論及び手法を概観し、研究を進める上で必要な技術的側面について教授した。8名の教員が分担し、それぞれの専門性を活かして講義した。

研究の意義	赤司 千波
研究の倫理と安全	平野 互
実験研究の進め方の基礎	吉武 康栄
調査研究の進め方の基礎	江藤 真紀
文献的研究の進め方の基礎	高野 政子
データ解析の基礎	佐伯 圭一郎
文献検索の方法・文献の入手法	影山 隆之
論文のまとめ方	林 猪都子

## 26) 看護管理学特論

前期

栗屋 典子、平野 互

看護管理の基本的理論、看護業務の安全管理、社会保障制度の方向性と問題点、看護倫理とくに生殖医療に関連する事項などについて教授し、レポートで単位認定を行なった。受講生が少数であり、講義とディスカッションを組み合わせ、理解を深めることができたと考える。

## 27) 看護理論特論

開講せず

## 28) 看護教育特論

開講せず

## 29) 看護コンサルテーション論

開講せず

## 30) 看護倫理学特論

開講せず

## 31) 看護政策論

開講せず

### 32) 特別研究

1～2年次

各担当教員

6名が修士論文の指導を受けて提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

1) 安倍 富美

20～35歳の未産看護職者の月経随伴症状

主指導教員：宮崎 文子、副指導教員：伴 信彦

2) 江藤 由布子

後陣痛と子宮復古に関する要因との関連

—分娩所要時間・子宮収縮剤・児体重について—

主指導教員：林 猪都子、副指導教員：吉村 匠平、小西 清美

3) 原田 修子

基本健康診査における壮年期受診者の受診行動に影響を及ぼす要因

—A市中央地区の初回受診者と継続受診者の受診行動の分析から—

主指導教員：工藤 節美、副指導教員：佐伯 圭一郎、高野 政子

4) 軽部 薫

産後の姿勢と体形に及ぼすアフターピクスの効果

主指導教員：林 猪都子、副指導教員：稲垣 敦、安部 眞佐子

5) 松永 光代

子宮がん検診時に導入する卵巣がん検診の費用便益分析

主指導教員：桜井 礼子 副指導教員：甲斐 倫明、伊東 朋子

6) 小野 翠

未熟児訪問における熟練保健師の次回訪問のアセスメント

—必要性と訪問時期の判断視点に着目して—

指導教員：藤内 美保、副指導教員：佐伯 圭一郎、赤司 千波

### 3-6-2 博士（後期）課程

#### 1) 生命病態学特論

1年次

高橋 敬

構造形成のリモデリングと嚥下障害に関するサブスタンスP（SP）の定量、コンピュータシミュレーションなどについての方法論および実際問題に言及した。

#### 2) 健康増進学特論

1学年 前期（昼間） 後期（夜間）

安部 眞佐子、稲垣 敦

栄養学的側面から健康について教授し、栄養指導法について理解させた。また、トレーニング理論や運動療法について教授し、運動指導ができるように指導した。

#### 3) 保健情報科学特論

開講せず

4) 精神保健学特論

1年次 前期

影山 隆之

精神保健看護学の研究方法について、概論と、实例（論文例）に基づく紹介・討論を行った。履修者の実務的な課題に応じてインタビューや質的データの分析に関する方法論を特に扱った。

5) 放射線保健学特論

3年次 前期

甲斐 倫明、草間 朋子

看護職としての放射線保健政策上の役割について最近の話題を提供し、討論した。とくに、労災補償問題について日本および国際的な動向について文献を読み、それについて指導を行った。

6) 看護基礎科学演習

開講せず

7) 生活支援看護学特論

開講せず

8) 看護管理学特論

開講せず

9) 生殖看護学特論

後期

宮崎 文子

前半はリプロダクティブヘルスにおける看護職の役割と援助のあり方について教授し、後半は受講者のニーズにそい成熟期に視点をあて課題を発見、問題解決の方策について探求した。

10) 発達看護学特論

開講せず

11) 国際看護学特論

開講せず

## 12) 看護専門科学演習

開講せず

## 13) 特別研究

1～3年次

各担当教員

1名が博士論文の指導を受けて提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

福田 広美

Fatigue Assessment for Nurses by Biomarkers in Urine and Saliva

(和文)客観的な指標を用いた看護職者の疲労評価

主指導教員:市瀬 孝道、副指導教員:草間 朋子、桜井 礼子

## 3-7 ボランティア活動

### 1) 第22回Young Wing Summer Camp

高野 政子、脇屋 里菜（3年）、齋籐 由貴（3年）、山田 剛弘（2年）、鹿島 小百合（2年）、緒方 文香（2年）

このサマーキャンプの活動は、開学以来毎年学生と小児看護学研究室の教員が参加している小児糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプを支援するボランティア活動である。本年も5名の学生が5月の準備段階から関わり、役割をもって8月7日～12日まで5泊6日の日程で行われたキャンプに参加した。学生は大分大学、別府大学などの学生と協力して、サマーキャンプの成功に貢献した。本年は他の大学事業がありサマーキャンプの参加は学生のみであった。教員は学生の相談や、主催の大分大学の医師との連絡を行った。

### 2) こどもの健康週間2007

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛、阿南 良枝（4年）、森崎 美紀（4年）、衛藤 琴美（4年）、山本 浩世（4年）、越智 功太郎（2年）

“こどもの健康週間”は日本小児保健協会の発案による活動で、大分県では特に全国でも珍しい取り組みを行っている。毎年、体育の日に健康な子どもも病気の持つ子どもも一緒に、家族と共に戸外で楽しく過ごし、戸外活動をとおして体力をつけるようなきっかけにしたいというものである。大分県内の小児科医師、看護師、保育士、大分大学医学部の医学生、看護学生、国立病院機構看護専門学校生など多くのボランティアが協力している。内容は、てんかん、川崎病、心疾患など小児慢性特定疾患の親の会の活動報告や救急法の指導、クイズやウォークラリーなどが企画された。本学も学生と教員が参加し、遊び・ゲームコーナー担当を担った。今年は途中より雨が降ったが、多くの参加者があり成功裏に終了した。

### 3) ボランティアサークル(神経難病研究会)

伊東 朋子、越智 巧太郎(2年)、近藤 美里(4年)、西平 俊哉(4年)、森 由美子(4年)、森崎 美紀(4年)、西岡 菜々子(4年)、高石 奈々(3年)、田口 美和子(3年)

ボランティア活動として、第3回大分地区患者交流会、第13回日本ALS協会大分県支部患者・家族のつどい(平成19年5月20日)に参加し、会場設営、受付、患者移送、物品販売、司会進行補助、後片付け等を行った。

### 4) 日本自閉症協会 九州大会in鹿児島

平野 亙、高石 奈々(3年)、前田 結佳里(3年)、越智 功太郎(2年)、鷹取 希美(2年)、竹下 亜希子(2年)

平成19年6月23日(土)・24日(日)の両日、鹿児島市で開催された日本自閉症協会九州協議会の主催する九州大会にボランティアとして参加し、九州各県から来た学生ボランティアと共同して、保護者が大会に参加する時間帯にレスパイト・ケアを行なった。

### 5) 自閉症児療育キャンプ

平野 亙、小野 里奈(4年)、山口 智治(4年)、江藤 紘文(4年)、釜堀 真由美(4年)、佐藤 優(4年)、森崎 美紀(4年)、吉永 礼香(4年)、渡邊 裕美(4年)、越智 功太郎(2年)

大分県自閉症児・者親の会が主催する年少児の療育キャンプに参加した。この療育キャンプは大分市「のつはる少年自然の家」において平成19年8月18日(土)・19日(日)の1泊2日で行われ、学生は自閉症児またはきょうだい児とペアを組み、食事介助、音楽療法・運動療法やレクリエーションに取り組みながら、保護者が学習会に参加する時間帯にはレスパイト・ケアを行ってキャンプの運営を支えた。



## 4 学内セミナー

### 4-1 英語多読教材貸し出し

この企画は、本学教職員の自己研鑽を目的として、英語多読教材を教職員に貸し出すもので、本学言語学研究室の宮内講師が中心となって行っている。英語を母語とする児童・生徒用に作られた児童書や、英語を外国語として学習している人のために語彙数、総語数、文法内容を厳選した多読教材(Graded Readers)を、自分の好みや技量に合わせて選び、読んでいくものである。読みやすい本を大量に読むことにより、英語への抵抗感や苦手意識を軽減し、同時に英文処理スピードと英語運用能力の向上を期待する。「楽しむ」ことを基本にしており、学習動機の長期維持が可能である。目標は総読書量100万語を超えること、辞書なしでペーパーバックが読めるようになることである。1年次生、2年次生に対する英語授業の一環として、この多読(Extensive Reading)が導入されている。

## 5 学内プロジェクト研究

### 5-1 健康増進プロジェクト（旧・野津原プロジェクト）

研究者 稲垣 敦（健康運動学）、桜井 礼子、平野 亙、高波 利恵、朝見 和佳（保健管理学）、  
工藤 節美、江藤 真紀（地域看護学）、品川 佳満、中山 晃志（健康情報科学）、安部  
恭子（看護アセスメント学）、岩崎 香子（生体科学）、松尾 恭子（基礎看護学）

#### 1. 活動計画

##### 1) 介護予防事業の推進

高齢者の健康増進を目指し、介護予防事業プログラムの開発と大分県内での普及を中心にプロジェクト活動を展開する。また、介護予防事業を支えるボランティアの育成も合わせて取り組み、サロン等で行われる介護予防事業を支援し、活動の継続を図る。

##### 2) 健康診査での健康関連体力の測定項目の提案

これまで実施してきた高齢者を対象とした健康関連体力の測定値を用いて、健康診査での体力測定項目の検討を行う。

#### 2. 活動実績

##### 1) 介護予防事業の活動

別府ビーコンプラザで高齢者3000名を対象に介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の指導をしたほか、県内30箇所介護予防運動の指導および指導者研修会を開催した。また、体操を掲載したカレンダーを作成して研修会等で配付し、普及に活用した。さらに、大分フットボールクラブによる介護予防事業を支援した。

また、大分市野津原地区で大分市社会福祉協議会のサロン等を中心に、転倒予防教室を6回開催した。

##### (2) 介護予防事業の推進のための研究活動

介護予防事業を支えるボランティアの育成のために、高齢者サロンのボランティアに意識調査を実施した。また、介護予防のための運動プログラムの開発とその効果評価のために「高齢者の主観的転倒予測と転倒恐怖感の関連性の検討」「高齢者における転倒と身体バランスおよび足部柔軟性」「動作解析を用いた運動介入前後の歩行の比較」「介護予防のための健康チェックシートの試作とその効果の検証」等の調査を実施した。

##### 2) 基本健康診査での健康関連体力の測定項目の提案

これまで実施した高齢者の健康関連体力の結果をもとに、ADLとの関連性および実用性の点から、基本健診時に相応しい体力テストについて検討した。

## 6 先端研究

### 6-1 肘屈曲動作における効率的な力発揮 ～より負担度の少ない介助動作の開発を目指して～

研究者 藤内 美保（看護アセスメント学）、宮腰 由紀子（広島大学）、吉武 康栄（健康運動学）

力発揮は、筋の形状（筋の長さ・腱の伸張）に大きく依存するため、関節角度の違いによって同一負荷に対する身体的負担度が異なる。本研究では、現状より負担度の少ない介助動作を生理学的な視点から開発することを最終目的とし、今回はその第一段階として肘屈曲筋群に着目し、効率的な姿勢（関節角度）を探索することを目的とした。

被験者は若年成人男性8名を対象とした。主動筋である上腕二頭筋長頭の起始は肩甲骨の関節上結節である。そこで、肩の上がった状態と肩の下がった状態を設定することで筋を外因的に形状変化させ、(a)できるだけ瞬時に最速の力発揮を行うBallistic課題と、(b)最大の力発揮(MVC)を行うMVC課題を行い比較することで、肘屈曲動作時の効率的な姿勢を評価することにした。その際、力および主働筋である上腕二頭筋の短頭および長頭から筋電図を導出した。なお、Ballistic課題では力の上昇率の最大値、筋放電開始から力発揮が起こるまでの時間(EMD)も同時に算出した。Ballistic課題において、力の上昇率および上腕二頭筋長頭の筋電図振幅値は肩下げ時のほうが肩上げ時よりも有意に高かった( $P < 0.05$ )。EMDは、肩下げ時のほうが肩上げ時よりも有意に小さかった( $P < 0.05$ )。この結果から、肩下げ時のほうが力の伝達効率が高いことが推察できる。MVC課題において、MVCの値およびその時点の上腕二頭筋の筋電図振幅値は、肩下げ時のほうが肩上げ時よりも有意に高かった( $P < 0.05$ )。

以上の結果より、肩下げ時のほうが最大の力発揮を行うポテンシャルが高いことが示唆された。今後は、特に腰部の筋活動と筋疲労との関連性に着目し、介助者に負担の少ない介助動作の探求を継続する予定である。

### 6-2 マウス白血病特異的遺伝子変異のin vivoスクリーニング

研究者 伴 信彦（環境保健学研究室）

ヒト白血病の動物モデルとして重用されるマウスの骨髄性白血病は、Sfp1遺伝子の変異による造血細胞の分化・アポトーシス抑制が主要な原因とされている。放射線による白血病誘発機構解明のためには、放射線照射後、どのようなタイミングでこの変異が生じるのかを知ることが重要である。そこで、wild-type blocking PCR法によって変異型の遺伝子を選択的に増幅することにより、放射線を照射後長期間飼育したマウスの造血細胞中に、白血病特異的な変異細胞が潜在するかどうかを調べた。

Wild-type blocking PCR法による選択的増幅は不完全で、野生型細胞のみを鋳型とした場合でも多サイクルの反応では増幅が見られた。しかし、増幅産物を制限酵素処理することにより、試料中に変異型細胞がわずか(DNA質量比で1/10,000)でも存在すれば、野生型由来のバンドと区別して検出することが可能であった。この方法を用いて、ガンマ線照射後56週間飼育したマウスのDNA試料を分析したところ、12匹中1匹に骨髄性白血病に特有なSfp1の変異が検出された。

### 6-3 マタニティービクスの精神的効果～ビアンカZ（ストレス測定器）を使用して～

研究者 宮崎 文子、稲垣 敦、高瀬 恵子

妊娠中は心理的にも身体的にも、また社会的にも大きく変化する期間であり、妊婦の感情は、不安定になることが多い。ビアンカZは先行研究により妊娠中の体重増加の予防等身体的効果と同時にストレス発散などの精神効果も存在することで推奨されている。そこで今回は妊娠中におけるストレスがマタニティービクスを継続することにより軽減されるか否かをアンケートとビアンカZ（アウトバーン社）によって検証する。さらに妊娠期の女性における「ビアンカZ」の妥当性についても考察した。

方法：調査期間は平成19年8月17日から平成20年1月31日である。対象はA産婦人科医院マタニティービクス教室の参加者44名で正常妊娠中の初産婦とし、マタニティービクス参加回数は1回目18名、5回目13名、10回以上が13名である。方法はマタニティービクス実施まえと後30分の2回ビアンカZを用いてストレス度を測定し、その時の不安等の心理状態についてアンケート調査を行った。なお今回は、マタニティービクス参加回数の違いによる横断的調査である。

#### 結果・考察

①ビアンカZの妥当性、②マタニティービクスの即時的効果、③マタニティービクスの継続的効果の側面から結果及び考察を行った。その結果マタニティービクスは妊婦のストレスを低減する即時的効果があり、ビクスを継続することで妊娠不安を減らすことができる可能性が示された。しかし今後適切な妥当基準を設定して、ビアンカZの妥当性を検証することも必要と考える。

## 7 奨励研究

### 7-1 筋萎縮性側索硬化症と自律神経機能障害との関連

研究者 伊東 朋子

筋萎縮性側索硬化症（以下ALS）は、典型的な神経難病であり、その病因は未だ明らかになっていない。ALSは、従来、運動神経系の活動のみ侵され、内臓などの活動に関連する自律神経系の活動は正常であると考えられてきた。しかし、最近、血圧・心拍・筋交感神経活動、皮膚交感神経活動などによる自律神経機能検査の成績から自律神経も異常をきたしていることが示唆されるようになってきている。特に、その原因が脳の中樞自律神経線維網（Central Autonomic Network: 以下CAN）の障害によるのではないかと指摘されている。しかし、ALSの自律神経異常がCANの障害によるものであることを証明した研究はなく、未だ仮説の段階である。本研究ではALSの自律神経異常とCAN機能との関連を明らかにすることを目的とした。方法はCNSが制御している生体リズムに着目し、ALS患者の生体リズムが健常者と同様に形成されているか比較検討することにより行う。なお、生体リズムの抽出は、24時間心電図の周波数解析により行う。ALS患者および自律神経機能に異常をきたしていない健常成人（コントロール群）に対して24時間の心電図計測を行い、周波数分析から生体リズム成分を算出し（実験1）、それらとALS患者のCT画像とを疾患の進行程度から比較検討して、自律神経機能を評価し（実験2）、ALSの自律神経異常とCANとの関連を明らかにしていく。結果は疾患の進行程度に伴い、計測値に有意な変動がみられた。罹病期間や呼吸器装着の有無、身体状態の違いとしてのTLS (totally locked-in state: 完全な閉じ込め状態) において、自律神経機能異常を示唆する変化がみられた。しかし、健常成人での計測、及び詳細なスペクトル解析、CT画像との比較検討は未だ実施しておらず、研究途中である。疾患の進行程度による自律神経機能異常の存在とCANとの関連についての説明が求められる。

### 7-2 尿毒症物質と骨代謝

研究者 岩崎 香子

透析骨症（Renal osteodystrophy: ROD）は透析患者の代表的な合併症の1つであり、中でも無形成骨症（Adynamic bone disease: ABD）がRODの大半を占める。ABDの特徴として骨芽細胞数および機能の低下による骨形成の極端な低下がみられること、これらに起因して骨のカルシウム緩衝容量の減少をもたらす易高カルシウム血症性の上昇、血管の異所性石灰化を誘導する可能性が危惧されている。実際の臨床所見ではABDの患者は血管の石灰化を呈しているものが多い。しかしながらABDの発症ならびに進展機序については未だ不明な点が多く残されている。そこで本研究ではABDの発症・進展機序の解明を目的とし、腎不全病態で血中に蓄積する尿毒症物質（Uremic Toxins: UTx）の骨代謝への影響を検討した。ABDモデル動物の開発に取り組みにその過程でUTxの蓄積と骨代謝回転低下が関連することを見いだした。またUTx蓄積を防止すると骨代謝回転が改善することも確認した。さらに初代培養骨芽細胞を用いた実験よりUTxによる機能遺伝子発現が抑制されること、加えて間葉系細胞から骨芽細胞への分化を誘導する骨誘導タンパク質の作用を抑制することを確認した。これらの結果から腎機能低下によって血中に蓄積するUTxは骨芽細胞分化、機能抑制を引き起こし骨代謝回転を低下させることが明らかとなった。

### 7-3 森林歩行のストレス低減効果

研究者 稲垣 敦

本研究では、これまで森林浴の研究では使われていない唾液中クロモグラニンA (CgA) を用い、森林と市街地での歩行を比較し、森林歩行のストレス低減効果を明らかにすることを目的とした。被験者は、同意の得られた22~23歳の健康な女性4名であった。実験条件は、市街地(大分駅周辺)での歩行(約1.7km)の前後と、森林(由布市山下池周辺)での歩行(約1.5km)の前後であった。歩行コースは指定し、歩行速度は被験者の心地よい速度とした。各条件では、唾液採取、血圧・心拍数測定、POMSの記入を行った。唾液はサリベッテに入れて冷蔵保存し、精神ストレスの指標となるCgA濃度を測定した。実験は、市街地と森林の2日間に分け、ほぼ同じ時刻に実施した。分析はSPSS11.0で二要因の反復測定分散分析を行った。森林歩行で拡張期血圧が低下し、森林で収縮期血圧や抑うつが低い傾向が認められた。唯一有意な交互作用の認められた拡張期血圧は末梢動脈の血管抵抗を多分に反映することから、森林歩行では都市歩行よりも血管収縮に関わる交感神経活動が抑制されたと考えられた。また、唾液中CgA、緊張、活気、混乱では歩行による改善が森林で大きい傾向が見られた。一方、市街地歩行では抑うつ、怒り、疲労の低下が森林よりも顕著であったが、歩行前の水準が森林よりも著しく高く、歩行後は森林と同水準になったことから、市街地にいるだけで抑うつ、怒り、疲労が高い、あるいは森林にいるだけでこれらが低下する可能性が考えられた。本研究の結果から、森林歩行にはストレス低減効果がある、森林にいても、また、歩くだけでも、ストレス低減効果のある可能性が示唆された。

### 7-4 放射線誘発DNA初期損傷の修復動態に関する研究-バイスタンダー効果による損傷が修復されない可能

研究者 小嶋 光明

近年、数 mGy という極めて低い線量の放射線で生じた DNA 初期損傷が、24 時間以上経過した後にも修復されず残存し続けることが報告された。この現象は、数 mGy の放射線が遺伝子変異を蓄積させる可能性があることを意味しており、低線量放射線の発がんリスクを考える上で重要な問題である。昨年度、当研究室では、数 mGy の線量域で観察される DNA 初期損傷の大半が、放射線に直接引き起こされたものではなく、バイスタンダー効果によって間接的に引き起こされたものであることを明らかにした。そこで、本研究ではバイスタンダー効果によって引き起こされた DNA 初期損傷が修復されないものであるかを検討した。その結果、バイスタンダー効果によって引き起こされた DNA 初期損傷が、照射直後から 24 時間の間修復されていないことが分かった。従って、数 mGy の放射線で観察された修復されない DNA 初期損傷は、放射線に直接引き起こされたものではなく、バイスタンダー効果によって間接的に引き起こされたものである可能性が考えられた。

## 7-5 ボランティアに生きるある余命を宣告された方から得られたケーススタディ

研究者 河野 梢子、安部 恭子、藤内 美保、小西 恵美子

自分の余命があと1年に満たないことを宣告されているにもかかわらず、最期のときがくるまでボランティア活動を続けた、ある一人の男性を対象にしたケーススタディ。なぜ彼は自分の命があとわずかであることを知りながらも、自分を切り離して他人のためにつくすことができるのだろうか。彼の生が閉じるまでのおよそ半年、計10回のインタビューを行った。

対象はK氏、享年67歳男性。平成16年肺がんを発症、右肺葉部分摘出。平成18年7月、体力の衰えを感じ検査のため入院。新たに肝臓、胃へのがんを認め、余命1年の宣告を受ける。K氏に非構造的に面接した逐語録、参加観察で得た情報、彼をとりまく人たちからの情報、彼に関する新聞記事を含む文書、およびフィールドノートとデータとし、質的に分析した。

彼の語りから、①病気に対する揺れる思い、②ボランティア活動について、③自分自身に対する思い、の3つのテーマがオーバーラップして全ステージを通し表われた。今回は②に光をあてたところ、彼にとってボランティアとは、「自分が今あるのはみなさんのおかげ、そのことに気がついただけ、気がついたらじっとしていられなかつただけ、ただそれだけこと」というきわめてシンプルなものであった。

## 7-6 ディーゼル排気微粒子抽出物が誘発するアトピー性皮膚炎増悪作用におけるTSLPの関与について

研究者 定金 香里

TSLP(thymic stromal lymphopoietin)は、表皮角化細胞から分泌されているサイトカインで、最近、in vitroでアトピー性皮膚炎を惹起する一つの要因であることが示唆されている。本研究では、ディーゼル排気およびその中に含まれる微粒子の抽出物により、TSLPの産生に増加が見られるか検証した。実験系として、既にディーゼル排気曝露あるいは微粒子抽出物の皮膚への塗布が、アレルギーの症状や病態を増悪(症状スコアの上昇、病理所見、Th2サイトカイン産生および抗体産生の増加、Th1サイトカイン産生の低下)することがわかっている実験系を用いた。その結果、ディーゼル排気の曝露やディーゼル排気微粒子抽出物塗布は、アレルギーを増悪するが、TSLP産生には影響が見られなかった。また、本研究では、アトピー性皮膚炎の誘発に、ハプテンを繰り返し皮膚塗布しアトピー性皮膚炎を誘発する方法と、アレルギーを皮下に頻回投与方法との二つの動物モデルを用いたが、アトピー性皮膚炎は誘発されたにもかかわらず、TSLPの産生増加は認められなかったことがわかった。以上の結果から、TSLPは、ディーゼル排気およびその中に含まれる微粒子の抽出物によるアトピー性皮膚炎増悪作用には関与しないことが示唆された。また、現存の動物モデルでは、TSLPによるアトピー性皮膚炎への惹起は認められないことも示唆された。

## 7-7 アスベストによるマウス雄性生殖機能への影響

研究者 吉田 成一

アスベストによる健康被害の問題は労働環境問題の他に一般環境・公衆衛生問題として捉える必要がある。しかし、アスベストの健康被害としては肺がんと肺の中皮腫に着目され、それ以外の健康影響に関してはほとんど検討されていない。そこで、本研究では、アスベストをマウスに気管内投与し、雄性生殖機能におよぼす影響を検討した。

5週齢のICR系雄性マウスにアスベスト（白石綿および青石綿）0.05mgまたは0.2mgを1週間に1度、4回気管内投与した。全てのマウスを最終投与の翌日に、心臓採血屠殺後、精巣および精巣上体を摘出した。精巣重量の測定、精巣病理像の観察、精巣1日精子産生能（DSP）の測定および血清中テストステロン濃度を測定した。

2種類のアスベストを投与したところ、全ての濃度群において精巣重量、血清中テストステロン濃度、精子性状に変動は認められなかった。一方、DSPは青石綿0.05、0.2mg投与群においてコントロール群と比較し有意に低下した。白石綿投与群では有意な変動は認められなかった。また、精巣組織像の病理解析を行ったところ、精上皮に接着性の低下、精巣白膜からの精細管の離脱等、異常所見が白石綿、青石綿投与群で観察された。

以上のことから、アスベストの気管内投与は雄性生殖機能に影響を与えることが示された。今後、認められた所見の発症機序を解明する必要があり、また、雄性生殖機能への影響が長期に及ぶものか検討する必要がある。



## 8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第7巻2号が9月に刊行された。本年度はPubMed掲載の申請も行った。論文、執筆要項等は本学ホームページ (<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、ダウンロードすることができる。

第7巻2号

短報

体力テストを用いた体脂肪率の推定：1. 理論と方法  
稲垣 敦

トピックス

新型インフルエンザパンデミックの可能性とその対策  
古澤 忍

大分県立看護科学大学 第8回看護国際フォーラム

「看護職の自律性と看護実践のあり方」(Dr. Carol Lynn Savrinの講演から)  
高野 政子

「韓国における保健医療制度改革と看護職のあり方」(Dr. Euisook Kimの講演から)  
赤司 千波

「医療制度、介護保険制度等の改革と看護職の役割」(田村やよひ先生の講演から)  
工藤 節美

## 9 業績

### 9-1 著書

伊東 朋子

平成19年度供給本「家庭看護・福祉 新訂版」, 実教出版, 東京, 2007

岩崎 香子

Clinical Calcium, 医薬ジャーナル, 東京, 2007

甲斐 倫明 (分担、編集委員長)、日本リスク研究学会編

リスク学用語小辞典, 丸善株式会社, 東京, 2008

リスク学入門5 科学技術からみたリスク 第4章 低線量放射線のリスク評価とその防護の考え方, 岩波書店, 東京, 2007

小西 恵美子

日本の研究倫理審査の現状と課題: 研究実施者として倫理審査を受ける立場から, 看護研究, 40(5), 425-429, 2007

草間 朋子、太田 勝正、甲斐 倫明、伴 信彦

看護実践に役立つ放射線の基礎知識 患者と自分をまもる15章, 医学書院, 東京, 2007

小西 恵美子

看護職と倫理綱領: In: 加藤尚武他編、応用倫理学事典, pp. 232-233, 丸善, 東京, 2007

ペンダー, In: 筒井真優美編、看護理論-理論の理解とその応用, 南江堂, 東京, 2007

看護倫理, In: 高橋照子編、看護学原論-創造性と看護実践, 南江堂, 東京, 2007

看護倫理-よい看護・よい看護師への道しるべ, 南江堂, 東京, 2007

看護職者の連帯, In: 加藤尚武他編、応用倫理学事典, p. 234-235, 丸善, 東京, 2007

土居 雅広 他4名編、秋葉 澄伯、甲斐 倫明、伴 信彦 他17名執筆

虎の巻 低線量放射線と健康影響 先生、放射線を浴びても大丈夫? と聞かれたら, 医療科学社, 東京, 2007

濱田 達二 他10名編、芦澤 潔人、安藤 秀樹、伴 信彦 他23名執筆協力

放射線影響・放射線防護用語辞典，放射線影響協会，東京，2007

平野 亙

小西恵美子編「看護倫理 よい看護・よい看護師への道しるべ」，南江堂，東京，2007

## 9-2 翻訳

なし

### 9-3 研究論文

- Anne J Davis, (訳)小西 恵美子、和泉 成子, アン・デービス博士との研究倫理についてのQ&A, 看護研究, 40(5), 459-468, 2007
- T. Nii-Kono, Y. Iwasaki, M. Uchida, A. Fujieda, A. Hosokawa, M. Motojima, H. Yamato, K. Kurokawa, M. Fukagawa., Indoxyl sulfate induces skeletal resistance to parathyroid hormone in cultured osteoblastic cells., *Kidney Int* , 71(8), 738-743, 2007
- R. Yanagisawa, H. Takano, T. Ichinose, K. Mizushima, M. Nishikawa, I. Mori, K. Inoue, I. K. Sadakane, T. Yoshikawa, Gene expression analysis of murine lungs following pulmonary exposure to Asian sand dust particles, *Exp Biol Med*, 232(8), 1109-1118, 2007
- S. Yoshida, S. Hirano, K. Shikagawa, S. Hirata, S. Rokuta, H. Takano, T. Ichinose, K. Takeda., Diesel exhaust particles suppress expression of sex steroid hormone receptors in TM3 mouse Leydig cells., *Environ Toxicol Pharmacol*, 24, 292-296, 2007
- Y. Yoshitake, M. Shinohara, M. Kouzaki, H. Fukuoka, T. Fukunaga., Modulation of muscle activity and force fluctuations in the plantarflexors after bedrest depends on knee position., *Muscle and Nerve*, 35(6), 745-75, 2007
- 安部 恭子、大島 操、新居 富士美, 養護学校における医療的ケアにかかわる看護師の役割, 第38回日本看護学会論文集(看護教育), 141-143, 2007
- 石川 幸、平井 信幸、宮崎 文子、稲垣 敦、草間 朋子, 加齢に伴う子宮口の高さの変化とその要因の分析, 助産雑誌, 61(8), 701-706, 2007
- 稲垣 敦, 体力テストを用いた体脂肪率の推定  
梅野 貴恵、宮崎 文子、草間 朋子、甲斐 敏明、, 母乳育児期間と更年期症状の関係についての検討—人工栄養児との比較から—, 日本更年期医学会誌, 15(2), 2007
- 及川 力、橋本 有紀、齊藤 まゆみ、稲垣 敦, 聴覚障害児童・生徒の体格、体力・運動能力に関する調査研究, リハビリテーションスポーツ, 26(1), 2-12, 2007
- 大塚 みゆき、高野 政子、山下 早苗、中原 基子, 4ヶ月児を持つ母親の母子保健サービスの利用実態とサービスに対するニーズ, 第37回日本看護学会(小児看護)論文集, 119-121, 2006
- 小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明, 低線量X線照射によるDNA二重鎖切断にバイスタンダー効果は寄与しているか?, 放射線生物学研究, 42, 213-219, 2007
- 甲斐 仁美、桜井 礼子、藤内 美保、草間 朋子, 急性の痛みを伴う患者のアセスメント過程の分析, 看護教育, 48(3), 257-264, 2007
- 小西 恵美子, 日本の研究倫理審査の現状と課題:研究実施者として倫理審査を受ける立場から, 看護研究, 40(5), 425-429, 2007
- 小西 恵美子、八尋 道子、小野 美喜、田中 真木, 「和」と日本の看護倫理, 生命倫理, 17(1), 2007
- 小西 恵美子、八尋 道子、中嶋 尚子、小野 美喜, 「和」と日本の看護倫理, 生命倫理, 18(1), 74-81, 2007
- 桜井 礼子、加藤 沙耶香、草間 朋子、小林 敏生, 基本健康診査における高齢者の貧血検査実施の意義, 広島大学保健ジャーナル, 7(1), 23-29, 2007

実崎 美奈、宮崎 文子、林 猪都子、 挙児希望女性における不妊治療専門医受診前の心理、母性衛生、47(4)、2007

品川 梨沙、高野 政子、山下 早苗、中原 基子、 小児看護師のタッチに関する研究、第38回日本看護協会論文集（小児看護）、119-120、2007

白石 智子、森 淳一、安部 眞佐子、 栄養ケアマネジメントと摂食・嚥下リハビリテーションにおける職種間連携、日本健康・栄養システム学会誌、7(2)、24-28、2007

高田 早苗、勝原 裕美子、川上 由香、小西 恵美子、小笹 由香、田村 恵子、ウィリアムソン 彰子、石井 トク、星 和美、和泉 成子、 医療機関における看護研究倫理審査の実態、看護研究、40(5)、435-435、2007

高波 利恵、緒環 祥子、木村 厚子、草間 朋子、 基本健診で実施可能な全身持久力測定方法の検討ー足踏みの際の心拍数・収縮期血圧を利用してー、保健師ジャーナル、63(6)、546-551、2007

高屋 李奈、藤内 美保、小西 恵美子、 「最期の言葉」に対する家族の思い ー対処行動と思いの変化のプロセスをたどってー、第38回日本看護学会論文集（看護総合）、81-83、2007

田中 美樹、佐藤 香代、 NICU退院児と母親に対する育児支援に関する研究～NICU看護師のインタビューを通して～（第1報）、福岡県立大学研究紀要、4(1)、28-34、2007

玉井 保子、影山 隆之、前田 ひとみ、 新人看護師に対する先輩看護師の自己表現態度についてーアサーシオンの観点からの検討、こころの健康、22(2)、66-79、2007

藤内 美保、桜井 礼子、高野 政子、林 猪都子、赤司 千波、江藤 真紀、小野 美喜、甲斐 倫明、工藤 節美、宮内 信治、草間 朋子、 大学院修士課程におけるナースプラクティショナー養成教育 大分県立看護科学大学の取組み、看護展望、33(4)、25-31、2008

仲本 博、岩村 吉晃、河野 孝幸、品川 佳満、太田 茂、 微弱近赤外光を用いた門脈近傍における血流変化の解析、川崎医療福祉学会誌、17(1)、147-152、2007

外薮 菜緒、安部 恭子、小西 恵美子、 「よい助産師」とは-助産師専攻学生と非助産師専攻学生との比較-、第38回日本看護学会論文集（看護教育）、117-119、2007

本田 裕子、安部 恭子、藤内 美保、 多床室に入院している患者の年齢差からみるプライバシーの認識の違い、第37回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ）、283-285、2007

山口 香里、安部 恭子、小西 恵美子、 臨地実習を通して看護学生がみた「よい看護師」、第38回日本看護学会論文集（看護教育）、120-122、2007

#### 9-4 その他の論文

甲斐 倫明、川口 勇生, 発がん数理モデルの理論とデータ解析の現状, 放射線生物研究, 42(3), 248-263, 2007

影山 隆之, エネルギーベースの騒音評価指標と睡眠影響との関係, 騒音制御, 31, 426-430, 2007

影山 隆之, 小中高校生の自死予防のために保健体育でできること, 東書Eネット, <http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/downloadfr1/htm/chdf0658.htm>, 2008

桐田 久美子、岡崎 寿子、八代 利香、宮内 信治、G. T. Shirley, 臨床現場における外来語・略語・隠語の使用状況と看護師の認識 - 用語集の作成 -, 日本農村医学会雑誌, 55(6), 2007

草間 朋子、林 猪都子、赤司 千波、小野 美喜、甲斐 倫明、工藤 節美、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、宮内 信治、八代 利香, 日本でナースプラクティショナーが果たす役割, 日本医事新報, 4365号, 77-80, 2007

草間 朋子、林 猪都子、藤内 美保, 日本におけるナースプラクティショナー（高度実践看護師）の実現を目指して, 日本医事新報, 4328, 79-84, 2007

桜井 礼子、藤内 美保、伊東 朋子, 看護基礎教育における看護技術の到達目標達成のための教育実践, 「総合看護学」, 看護展望, 32(3), 84-89, 2007

平野 互, 守秘義務と個人情報保護 - 患者のプライバシー権について考える, 作業療法ジャーナル, 42(3), 220-224, 2008

宮崎 文子, 今、求められている助産師の自律-再活性化への体言-, 日本助産学会誌, 21(1), 83-91, 2007

柳澤 利枝、市瀬 孝道、定金 香里、西川 雅高、森 育子、日吉 孝子、高野 裕久, 黄砂はアレルギー性気道炎症を増悪する, 日本衛生学雑誌, 62(2), 430, 2007

## 9-5 学会発表

- N. Ban, M. Kai, Model analysis of hematopoietic cell kinetics in mice in the context of radiation leukemogenesis, The 2nd DOE-EURATOM Joint International Workshop on Systems Radiation Biology, Washington D.C. USA, 2008.1
- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusama, R. Sakurai, K. Anndow, N. Akiyoshi, Assessment of fatigue in acute care department nurses by measuring urinary cytokine levels and bio-psychological markers, ICN 24rd Quadrennial Congress, Yokohama, 2007.5
- H. Fukuda, T. Ichinose, T. Kusama, R. Sakurai, K. Anndow, N. Akiyoshi, The relationship between job stress and urinary cytokines of nurses in Japan: a cross-sectional study, International conference to celebrate the 100th anniversary of college of nursing, Seoul national university, Seoul, Korea, 2007.10
- A. Inagaki, R. Sakurai, T. Kageyama, W. Hirano, R. Takanami, W. Asami, Y. Shinagawa., T. Nakayama, K. Abe, Y. Iwasaki, and T. Kusama., ADL-related critical points of physical fitness for the elderly., International conference to celebrate the 100th anniversary of college of nursing, Seoul national university, Seoul, 2007.10
- Y. Iwasaki, H. Yamato, M. Fukagawa, Administration of pravastatin inhibits suppressed osteoblast dysfunction and bone turnover in uremic rats., American Society Bone and Mineral Research 29th Annual Meeting, U.S.A. (Hawaii), 2007.9
- E. Konishi, M. Ono, Japanease Nurses' Perception of the Good Nurse, International Council of Nurses, Tokyo, 2007.5
- E. Konishi, M. Ono, M. Yahiro, N. Nakajima, Harmony: The East Asian traditional value and its implications for nursing ethics, International conference to celebrate the 100th anniversary of college of nursing, Seoul national university, Seoul, Korea, 2007.10
- M. Konno, S.W. Lee, R. Yatsushiro, A Comparative Survey Study between Japan and Korea College Student' s Perception of the Menstruation Image and Self-Care, The 4th Oita Society of Maternal Health Academic Conference, Oita, Japan, 2007.10
- S. Kudo, A. Ichiki, S. Numata, The study on the community based health services for the mothers and children utilizing day-nursery facilities, The 6th International Nursing Conference , Korea Seoul, 2007.11
- S. Kudo, R. Yatsushiro, A. Yamamoto, The lifestyle habits of pre- elderly people one year after receiving a blood pressure result of "guidance needed" on a physical examination, ICN CONFERENCE AND CNR 2007, 横浜市, 2007.5
- S.W. Lee, Development of a Web Site for Depressive Symptom Management of the Family with Terminally Ill Patient, The 7th Asia Pacific Hospice Conference, Manila, Philippine, 2007.10
- S.W. Lee, Incidence of Depression among the Korean Population, International Conference to Celebrate 100th Anniversary of College of Nursing Seoul National University, Seoul, Korea, 2007.10
- S.W. Lee, Perspectives of Globalization for International Nursing, Special lecture for Graduate Students in Department of Nursing, Injae University of Korea, 2008.03

- F. Miyazaki, K. Saiki, Autonomy of Midwives in Hospitals:Relevance of the Number of Deliverier Supported, Confidence in Physical Assessment, and autonomy Buiddings, Internationl Conference to Celbrata 100th Anniversary of Coiiege Nursing National Univeysity Excellencc in Nursing through Collaboration, Seoul Korea, 2007.10
- M. Ojima, N. Ban, M. Kai, Bystander effect in normal human fibroblast cells induced by very low doses of X-ray irradiation, 13th International Congress of Radiation Research, San francisco, 2007.7
- M. Otuka, S.W. Lee, R. Yatsushiro, K.D. Hee, A Comparative Study between Japan and Korean Nurse' s Negative Feeling toward Patients, The 6th International Nursing Conference, Seoul, Korea, 2007.11
- T. Saito, M. Sato, Ten-year GHQ-28 follow-up study of mental health in patients with thalidomide embryopathy -In the case of the limb deformities group, World Psychiatric Association International Congress 2007, Melbourne, 2007.11
- R. Takanami, Does Talking about health topics at work raise health consciousness? - Investigating workers of small and medium sized enterprises-, International conference to celebrate the 100th anniversary of college of nursing, Seoul National University, Seoul Korea, 2007.10
- M. Takano, Y. Tanaka, Y. Miyakoshi, Effectiveness of Measuring Masticatory Ability in Children with Cleft lip and Palate with the use of Color-changeable Chewing Gum, The 6th International Nursing Conference, Seoul, korea, 2007.11
- M. Tonai, Y. Miyakoshi, Clinical Judgment among Relatively Inexperienced Nurses: Towards the Development of Educational Methods to Teach Critical Thinking , ICN, 横浜, 2007.5
- S. Yoshida, T. Ichinose, Effects of Asian Sand Dust on the Male Reproductive Function of Mice., International conference to celebrate the 100th anniversary of college of nursing, Seoul, Seoul, Korea, 2007.10
- Y. Yoshitake, M. Shinohara., Role of individual muscles for fluctuations in net force may be examined with temporal correlation between rectified EMG and differentiated force, Annual meeting of Neuroscience, San Diego, CA, USA, 2007.11
- Y. Yoshitake, M. Shinohara., Preadolescent children with habitual physical activity have comparable force fluctuations but different neural strategy than young adults, Annual meeting of American College of Sports Medicine, New Orleans, LA, USA, 2007.5
- 赤司 千波、畝 博、松岡 緑、長弘 千恵、大島 操, Study on the oral health conditions of elderly people in elderly care facilities, The 6th International Nursing Conference, Seoul, Korea, 2007.11
- 赤司 千波、畝 博、松岡 緑、長弘 千恵、大島 操, 「高齢者の口腔健康状態に関する研究 -口腔健康状態と認知症及びQOLとの関連 -, 日本老年看護学会, 神戸, 2007.11
- 赤司 千波、村嶋 幸代、堀内 成子、草間 朋子、林 猪都子、桜井 礼子、高野 政子、藤内 美保、小野 美喜、, 大学院修士課程における高度な実践看護職の育成に向けて, 第27回日本看護科学学会学術集会 (交流集会) , 東京, 2007.12
- 安部 恭子、山口 香里、小西 恵美子, 臨地実習を通して看護学生がみた「よい看護師」, 第38回日本看護学会論文集 (看護教育) , 千葉県, 2007.8
- 安部 恭子、大島 操、新居 富士美, 養護学校における医療的ケアにかかわる看護師の役割, 第38回日本看護学会論文集 (看護教育) , 千葉県, 2007.8



天尾 豊、定金 香里、色が変わる人工花束、大分県理科・化学懇談会夏休み子供サイエンス2007、大分市、2007.8

市瀬 孝道、吉田 成一、赤峰 由佳、アスベストによる肺の炎症とサイトカイン産生、フォーラム2007衛生薬学・環境トキシコロジー、大阪、2007.11

稲垣 敦、地域における体力テストデータの活用とそのポイント、日本体育学会第58回大会測定評価分科会シンポジウムB「測定データの指導現場、地域への還元と活用」、神戸市、2007.9

稲垣 敦、介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果、日本体育学会第58回大会、神戸市、2007.9

稲垣 敦、桜井 礼子、影山 隆之、平野 亙、品川 佳満、高波 利恵、草間 朋子、介護予防のために基本健診時に相応しい体力テストは何か？、第65回日本公衆衛生学会総会、松山市、2007.10

井上 健一郎、高野 裕久、日吉 孝子、柳澤 利枝、角 大悟、市瀬 孝道、定金 香里、小池 英子、戸村 成男、熊谷 嘉人、大気浮遊粒子状物質由来9、10-ナフトキノンが喘息マウスに及ぼす影響、第57回日本アレルギー学会秋季学術大会、横浜市、2007.11

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一、ナノ粒子が呼吸器疾患に与える相乗影響、第14回日本免疫毒性学会学術大会、神戸市、2007.9

岩崎 香子、岡崎 寿子、安部 恭子、高波 利恵、佐藤 みつよ、中学生の骨量に対する体格指数、部活動および栄養摂取状況の影響、第9回日本骨粗鬆症学会、東京都、2007.11

岩崎 香子、岡崎 亮、菅野 三喜男、西島 冬彦、渡辺 牧子、大和 英之、経口吸着剤投与による腎機能低下の遅延は糖尿病性腎症に伴う骨代謝回転低下を抑制する、第25回日本骨代謝学会、大阪、2007.7

衛藤 菜々恵、林 猪都子、小西 清美、宮崎 文子、産褥期入院中における褥婦の睡眠の量と質、第22回日本助産学会学術集会、神戸市、2008.3

大賀 淳子、看護学生の精神病に対するイメージの変化の実態、第27回社会精神医学会、福岡、2008.2

大賀 淳子、清水 さとみ、精神科デイケアにおけるスポーツ活動による利用者の気分の変化、第66回日本公衆衛生学会、松山、2007.10

岡田 麻依、影山 隆之、大分県における性・年齢階級別の「病苦」自殺率および「経済・生活苦」自殺率の検討、第53回大分県公衆衛生学会、大分市、2008.2

小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明、低線量域におけるDNA初期損傷の線量・反応関係は線型ではない、第41回日本保健物理学会、東京、2007.6

小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明、低線量放射線の線量反応関係?DNA初期損傷に着目して?、第44回放射線影響懇話会、鹿児島、2007.7

小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明、低線量放射線が誘発するDNA初期損傷にバイスタンダー効果が関わっている、第50回日本放射線影響学会、千葉、2007.11

小野 さと子、小西 恵美子、在宅高齢者のQOLと終末期ケアの意識との関連、第33回日本看護研究学会学術集会、岩手県盛岡市、2007.7

小野 美喜、日本の「よい看護師」の特質の変遷:過去100年の教科書の分析から、日本看護研究学会、盛岡市、2007.7

甲斐 倫明, ICRP新勧告に見る放射線防護研究の現状と将来, 日本原子力研究開発機構原子力工学基礎研究部門放射線工学ユニット研究会, 茨城県東海村, 2007.6

甲斐 倫明、吉野 辰亮、伴 信彦, BRCA1/2遺伝子突然変異保有者の放射線感受性を考慮した放射線誘発乳がんリスクの理論的考察, 日本保健物理学会第41回研究発表会, 東京, 2007.6

影山 隆之, 職場の定期健診における簡易質問紙DSS高得点者への構造化面接の試み; 希死念慮や抑うつ状態のスクリーニングは可能か?, 第80回日本産業衛生学会, 大阪市, 2007.4

影山 隆之、玉井 保子, 新人看護師に対する先輩看護師の自己表現態度—アサーション的観点からの検討, 日本精神衛生学会第23回大会, 東京, 2007.11

蒲池 知子、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一, ナノサイズの二酸化チタン粒子(TiO<sub>2</sub>)がバリア機能破綻時に皮膚炎に及ぼす影響, 第19回日本アレルギー学会春季臨床大会, 横浜市, 2007.6

蒲池 知子、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、小池 英子、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一, ナノサイズの二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)がバリア機能の破綻を想定した皮膚炎モデルに及ぼす影響, 第14回日本免疫毒性学会学術大会, 神戸市, 2007.9

上泉 和子、鄭 佳紅、坂下 玲子、内布 敦子、桜井 礼子, Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた過程評価の分析, 第11回看護管理学会, 高知市, 2007.8

工藤 節美、木下 結加里、坂口 友香, 介護予防ボランティアに対する研修プログラムの検討—老人サロン協力者の経験年数と介護予防活動への関心に焦点をあてて—, 第49回日本老年社会学会大会, 札幌市, 2007.6

小西 恵美子, 八尋 道子、中嶋 尚子、小野 美喜, 日本の看護倫理の探求: 「和」に光をあてて, 日本看護研究学会学術集会, 盛岡, 2007.7

小西 恵美子, 田中 真木、八尋 道子、和泉 成子, 日本と韓国の患者がとらえる「よい看護師」, 日本看護科学学会・第26回学術集会, 東京, 2007.12

小西 恵美子, 和泉 成子、八尋 道子、小玉 真木, がん患者にとっての「よい看護師」, 第21回日本がん看護学会学術集会, 東京, 2007.2

小西 恵美子, 八尋 道子、小野 美喜、田中 真木, 徳の倫理の復興と看護の課題, 日本生命倫理学会第回, 東京, 2007.11

小西 清美、林 猪都子、吉留 厚子, 性周期および性差によるワーキングメモリへの影響, 第22回日本助産学会学術集会, 神戸市, 2008.3

佐伯 圭一郎, 看護系大学ウェブサイトにおける一般市民向けコンテンツの現状, 第72回日本民族衛生学会総会, 富山, 2007.11

桜井 礼子、栗屋 典子、坂下 玲子、鄭 佳紅, Web版「看護ケアの質評価総合システム」におけるアウトカムの評価指標の検討, 第11回日本看護管理学会, 高知市, 2007.8

定金 香里、市瀬 孝道、柳澤 利枝、井上 健一郎、高野 裕久, ビスフェノールAおよびフタル酸ジイソノニルがアトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼす影響, 第57回日本アレルギー学会秋季学術大会, 横浜市, 2007.11

佐藤 美穂、宮崎 佳子、原田 清実、大隈 紘子、大嶋 美登子、影山 隆之, 大分県精神保健福祉センターにおける自死遺族のつどいの現状と課題, 第53回大分県公衆衛生学会, 大分市, 2008.2

品川 梨沙、高野 政子、山下 早苗、中原 基子, 小児看護師のタッチに関する研究, 日本看護学会—小児看護—, つくば市, 2007.9

- 城下 智世、山下 早苗、高野 政子、中原 基子、小児がんと診断されてから現在までの家族関係の変化、第3回日本小児がん看護研究会、仙台市、2007.12
- 関根 剛、受刑者の被害者認知と講話による認知の変化、日本犯罪心理学会第45回大会、郡山市、2007.9
- 関根 剛、吉村 匠平、佐藤 みつよ、生徒の抱える問題に対する認識の違いー養護教諭とスクールカウンセラーの比較ー、九州心理学会第68回大会、別府、2007.11
- 高波 利恵、健康意識を高める環境(職場風土)づくりの支援方法の検討、日本健康教育学会、大阪市、2007.7
- 高波 利恵、職場での健康に関するコミュニケーションは男性の健康的な生活習慣を促進する、第80回日本産業衛生学会、大阪市、2007.4
- 高屋 李奈、藤内 美保、小西 恵美子、「最期の言葉」に対する家族の思い 対処行動と思いの変化のプロセスをたどって、日本看護協会(看護総合)、沖縄、2007.7
- 田中 真木、安部 恭子、藤内 美保、小西 恵美子、学生からみた「よい臨地実習指導教員」とは、第27回日本看護科学学会、東京、2007.12
- 藤内 美保、小西 恵美子、山下 早苗、高波 利恵、小林 三津子、看護臨地実習に対する非看護系教員の協力の教育的試み、第27回日本看護科学学会、東京、2007.12
- 中尾 絢、高橋 敬、脂肪細胞の分化にともなって変化する細胞外マトリックスに対する細胞接着性の変化、日本形態機能学会学術集会、松山市、2007.9
- 林 猪都子、吉田 稔子、衛藤 菜々恵、小西 清美、宮崎 文子、分娩第1期における産婦の身体活動量の検討、第22回日本助産学会学術集会、神戸市、2008.3
- 伴 信彦、柿沼 志津子、大町 康、甲斐 倫明、マウス造血細胞中の白血病特異的遺伝子変異の検出、日本放射線影響学会第50回大会、千葉市、2007.11
- 伴 信彦、甲斐 倫明、放射線誘発骨髄性白血病の年齢依存性に関する考察、日本保健物理学会第41回研究発表会、東京、2007.6
- 外菌 菜緒、安部 恭子、小西 恵美子、「よい助産師」とは-助産師専攻学生と非助産師専攻学生の比較-、第38回日本看護学会論文集(看護教育)、千葉県、2007.8
- 松尾 恭子、排尿に関するケア、第1回訪問看護ステップ1、大分県看護協会、2007.6
- 松尾 恭子、排尿に関するケア、第2回訪問看護ステップ1、大分県看護協会、2007.11
- 松尾 恭子、看護の活躍と今後の展望について、総合的な学習の時間、別府羽室台高校、2007.7
- 宮内 信治、英語教育における発音記号の扱われ方、看護大学生の実態、第10回日本英語音声学会関西・中国支部研究大会、箕面市、2007.5
- 宮内 信治、英語多読と学習者の意識の変化、第33回全国英語教育学会 大分研究大会、大分市、2007.8
- 宮崎 典子、影山 隆之、子どもたちと世代間交流をするボランティア活動が中高年参加者の精神健康に寄与する可能性、第53回大分県公衆衛生学会、大分市、2008.2
- 宮崎 文子、高野 政子、関屋伸子、大分県内における妊婦への産後ケアとケア価格のニーズ調査、大分県母性衛生学会、大分市、2007.12

宮崎 文子、関屋 伸子、顧客重視 (CLIENT FOCUS )から見た開業助産師と勤務助産師の実態, 日本助産学会, 神戸市, 2008.3

宮崎 文子、高野 政子、関屋 伸子, 大分県における妊婦への産後1ヶ月のケアと価格のニーズ調査, 大分県母性衛生学会, 大分市, 2007.10

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一, フタル酸ジエチルヘキシル (DEHP) の乳児期曝露がマウスアトピー性皮膚炎モデルに及ぼす影響, 第19回日本アレルギー学会春季臨床大会, 横浜市, 2007.6

柳澤 利枝、高野 裕久、水島 かつら、井上 健一郎、小池 英子、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一, ディーゼル排気微粒子がアレルギー性気道炎症モデルに及ぼす影響に関するGeneChipを用いた遺伝子発現解析, 第14回日本免疫毒性学会学術大会, 神戸市, 2007.9

吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、押尾 茂、武田 健、市瀬 孝道, カーボンナノ粒子のマウス雄性生殖系に及ぼす影響, フォーラム2007, 衛生薬学・環境トキシコロジー, 大阪府大阪市, 2007.11

吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、菅原 勇、押尾 茂、武田 健、市瀬 孝道, カーボンナノ粒子の胎仔期曝露が雄性生殖機能に及ぼす影響, 日本薬学会第128年会, 神奈川県横浜市, 2008.3

吉武 康栄, 児童の運動習慣の有無が力調節能力に及ぼす影響, 第62回日本体力医学会大会, 秋田, 2007.9

吉村 匠平、小林 由佳、関根 剛、佐藤 みつよ, 患者から見た病室形態の相違 一 個室・個室的多床室・従来型多床室の比較から一, 九州心理学会第68回大会, 別府市, 2007.11

鄭 佳紅、上泉 和子、坂下 玲子、内布 敦子、桜井 礼子, Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護ケアの評価ー構造・過程・アウトカムの関係ー, 第11回看護管理学会, 高知市, 2007.8

## 9-6 学術講演等

T. Ichinose, H. Takano, R. Yanagisawa, M. Nishikawa, Effect of Asian Sand Dusts on Respiratory System, 第48回大気環境学会年会・第3回合同国際シンポジウム, 岡山市, 2007.9

M. Kai, Current risk estimate of radiation-related cancer and our insight into the future, The First International Symposium of Nagasaki University Global COE Program "Global Strategic Center for Radiation Health Risk Control, Nagasaki, 2008.1

S.W. Lee, 2007 Annual Nursing Symposium of Cedars-Sinai Medical Center, Cedars-Sinai Medical Center, Los Angeles, California, USA, 2007.5

S.W. Lee, Introduction of Nurse Practitioner in Korea, 1st International Seminar of Kagoshima University Conference, Korea, 2008.3

S.W. Lee, the 6th Annual Evidence Based Practice Conference, panel discussion, UCLA Healthcare, Nursing Practice and Research Council, UCLA, USA, 2007.4

P. Samantha, E. Konishi, U. Y. Rhan, S. Yueh, et al, Cross-cultural dialogue on nursing ethics with vulnerable patients, East west dialogue on nursing ethics, The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, 2007.8

甲斐 倫明, 放射線科医が知っておくべき放射線被ばくの知識 1. 管理 —放射線リスクと管理基準, 第66回日本医学放射線学会, 横浜市, 2007.4

甲斐 倫明, ICRP新勧告のポイント, 荷重係数等, 日本保健物理学会シンポジウム「ICRP新勧告が出されこれからの放射線防護を考える」, 東京, 2008.2

影山 隆之, 施設職員のメンタルヘルス, 第9回九州ブロック介護老人保健施設大会in大分, 別府市, 2007.6

影山 隆之, へらせる死、語れる死をめざして—自殺と予防活動, 久留米大学心理教育相談室研修会, 久留米市, 2007.9

影山 隆之, 心理社会的ストレスと健康影響, 広島大学保健学科環境生態学セミナー, 広島市, 2008.1

宮崎 文子, 助産師教育における助産実践能力の獲得に向けて—助産実習における妊婦健診能力を如何に身につけさせるか—, 第32回全国助産師教育協議会研修会, 名古屋市, 2007.2

宮崎 文子, 今求められている助産師の自律, 第21回日本助産学会学術集會会長講演, 大分県別府市, 2007.3

## 10 地域貢献

### 10-1 講演等

- 安部 恭子、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ、高波 利恵 保健体育科授業における解説・指導，保健体育科授業における解説・指導，大分大学教育福祉科学部附属中学校，2008.2
- 伊東 朋子、松尾 恭子 知っていますか、正しい手洗い，平成19年度大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2007.7
- 稲垣 敦 介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市木の上新町公民館，2007.4  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市ふじが丘西区公民館，2007.4  
介護予防運動指導，ひた運動リーダー養成事業，日田市役所，2007.5  
介護予防運動指導，大分県立看護科学大学公開講座，大分県立看護科学大学，2007.5  
介護予防運動指導，人生いきいきはつらつスクール，大分市社会福祉協議会，2007.6  
運動指導・体力テスト，大分丘の上病院スポーツデー，大分丘の上病院，2007.6  
介護予防運動指導，ひた運動リーダー養成事業，日田市役所，2007.6  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防事業，神崎小学校，2007.10  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，明礮公民館，2007.10  
介護予防運動指導，トリニータ介護予防事業，神崎小学校，2007.10  
介護予防運動指導，第2回大分県高齢者福祉大会，別府ビーコンプラザ，2007.10  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市東部保健センター，2007.10  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，佐伯市社会福祉協議会，2007.10  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，大分市西部保健センター，2007.11  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，日出町保健福祉センター，2007.11  
介護予防運動指導，大分県立看護科学大学第2回地域ふれあい祭，iichiko総合文化センター，2007.11  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，新川公民館，2007.11  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，荏隈公民館，2007.11  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，日田市大山B&G海洋センター，2007.11  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，大分県竹工芸・訓練支援センター，2007.11  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，玖珠町メルサンホール，2007.12  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，由布市役所庄内支所，2007.12  
介護予防運動指導，大分市介護予防事業，畑中公民館，2007.12  
介護予防運動指導，大分県介護予防事業，山国町コア山国，2008.1  
体力テストとニュースポーツ指導，丘の上病院スポーツデー，大分丘の上病院，2008.1  
介護予防運動指導，国東市老人クラブ連合会健康づくり講習会，国見B&G海洋センター，2008.2  
介護予防運動指導，平成19年度第3回大在校区ボランティア研修会，大在公民館，2008.2  
エクササイズガイド2006の栄養指導への有効活用，特定給食施設栄養士研究会，別府県民保健福祉センター，2008.3  
トレーニングの理論と実践，竹田市アクティブ竹田会総会，竹田市総合社会福祉センター，2008.3

- 岩崎 香子、佐藤 みつよ、岡崎 寿子 美しい骨づくり，大分県立看護科学大学公開講座，大分県，2007. 7  
丈夫な身体作りをめざして，大分大学教育福祉学部附属中学校健康教育講話，大分市，2008. 2
- 大賀 淳子 職場のメンタルヘルス，大分県新任課長補佐級研修，大分市，2007. 4  
看護記録，大分下郡病院研修会，大分市，2007. 6  
体力テストおよび運動指導，大分丘の上病院スポーツデイ，大分市，2007. 6  
体力テストおよび運動指導，大分丘の上病院デイケアスポーツデイ，大分市，2008. 1  
看護職に求められる「うつ」への視点と対応，看護職のための自殺・うつ対策研修会，玖珠町，2008. 2  
看護研究の進め方，日本精神科看護技術協会大分県支部研修会，大分市，2007. 9  
精神科における看護記録，日本精神科看護技術協会大分県支部研修会，大分市，2007. 12  
看護記録，佐伯保養院研修会，佐伯市，2008. 3  
看護研究の進め方，佐藤病院看護研究発表会，大分市，2008. 3  
認知症予防には何ができるか，大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2007. 7  
看護記録，加藤病院研修会，竹田市，2008. 3
- 小野 さと子 栄養ケア・マネージメントの展開方法について，大分県老人保健施設協会栄養・給食部会研修，大分市原新町，2007. 7
- 小野 美喜 告知とインフォームドコンセント，平成19年度大分県がん看護実務研修，大分市，2007. 11  
訪問看護の対象者の理解，第1回訪問看護研修ステップ1，大分市，2007. 5  
実習指導計画，実習指導者講習会，大分市，2007. 6  
たんの吸引の基礎，平成19年度第2回医療的ケア研修，大分市，2007. 7  
人の呼吸を助ける：看護の技，大分県立日田高等学校：大学出張講義，大分市，2007. 8  
学生指導を楽しもう，大分赤十字病院：臨地実習指導者研修，大分市，2007. 9  
対象者の理解，平成19年度看護力再開発講習会，大分市，2007. 10  
訪問看護の対象者の理解，平成19年度第2回訪問看護研修ステップ1，大分市，2007. 11
- 甲斐 倫明 ICRP新勧告の動向，平成19年度放射線安全管理講習会，福岡，2007. 11
- 影山 隆之 職場のメンタルヘルスー管理監督者の役割，大分県職員研修所平成19年度新任所属長研修，大分市，2007. 5  
相談の受け止め方，由布市総合相談支援センター研修会，由布市，2007. 7  
職場のメンタルヘルスと管理職の役割，平成19年県立学校教頭研修，別府市，2007. 7  
希死念慮者との関わり等、自殺予防活動の演習，大分県精神保健福祉センター 自殺・うつ対策専門研修会，大分市，2007. 9  
心の健康づくりー職場の管理監督者にできること，平成19年度大分市管理職員メンタルヘルス研修，大分市，2007. 10

職場のメンタルヘルスと過重労働，大分県警察共済組合巡回教養講演（大分南署），大分市，2007.11  
 職場のメンタルヘルスと過重労働，大分県警察共済組合巡回教養講演（県警本部），大分市，2007.12  
 看護職員のためのストレスマネジメント，竹田地域看護管理者連絡会平成19年度看護職員研修会，竹田市，2007.12  
 メンタルヘルス，平成19年度大分県行政事務能力向上研修，大分市，2007.12  
 自殺の予防と対応，厚生労働省 働く人の自殺予防に関するセミナー，大分市，2007.12  
 うつへの対応と自殺企図者への関わりについて，平成19年度竹田市介護支援専門員協議会第3回研修会，竹田市，2007.12  
 ラインによる部下へのケアおよび職場改善のヒント集，平成19年度玖珠町職員健康管理研修会，玖珠町，2007.12  
 病院職員のためのストレスマネジメント，大分県病院局メンタルヘルスマネージャー研修，大分市，2007.12  
 休養の確保－睡眠と健康・安全の関連を中心に，大分産業保健推進センター衛生管理者研修会，大分市，2008.1  
 睡眠について，平成20年度佐伯市ヘルスアップ推進員学習会，佐伯市，2008.2  
 自殺の現実と予防，平成19年度大分県自殺対策関係団体連絡会，大分市，2008.2  
 産業保健概論 過重労働・メンタルヘルス等，精神科医等のための産業保健研修会，大分市，2008.3  
 身近な心の病気～うつ病を知る～みんなを守り自分を守るために，平成19年度大分県自殺・うつ対策研修会，九重町，2008.3  
 自死遺族支援－いま、私たちにできること，自死遺族支援全国キャラバンシンポジウム in 大分，大分市，2008.3  
 産前産後の精神的問題をどう見立てるか，平成19年度大分県母子メンタルサポート研修会，大分市，2008.3

河野 梢子

冬を元気にすごそう！，介護予防デイサービス団体 健康教室，野津原，2007.12

工藤 節美

家族の特性と支援の方法，平成19年度第1回訪問看護研修ステップI，大分市，2007.5  
 保健師教育課程，平成19年度実習指導者講習会，大分市，2007.5  
 訪問看護過程①、②，平成19年度第1回訪問看護研修ステップ1，大分市，2007.6  
 臨床における実践的看護研究 質的研究の方法，平成19年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストI，大分市，2007.7  
 呼吸管理における制度等の動向と実態，平成19年度訪問看護研修ステップ2 呼吸管理，大分市，2007.7  
 看護教育課程 - 保健師，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.7  
 健康なまちづくりを目指して - 継続性のある保健活動，平成19年度地域保健総合推進事業 保健師等ブロック別研修会，大分市，2007.8  
 呼吸管理実習I，平成19年度訪問看護研修ステップ2 呼吸管理，大分市，2007.8  
 看護教育方法 - 在宅看護論，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.9  
 高齢者とは，ななせ生きがいクラブ研修会，大分市，2007.9  
 在宅看護論演習，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.11  
 家族の特性と支援の方法，平成19年度第1回訪問看護研修ステップ1，大分市，2007.11



専門領域別演習 - 在宅看護, 平成19年度大分県看護教員養成講習会, 大分市, 2007. 11-12

保健指導の実践評価, 特定保健指導実践者育成研修会 1, 大分市, 2007. 12  
訪問看護過程①、②, 平成19年度第 1 回訪問看護研修ステップ 1, 大分市, 2008. 1

保健指導の実践評価, 特定保健指導実践者育成研修会 2, 大分市, 2008. 3  
健康の輪! 広げて生きよう 六郷の里, 東国東地域健康づくり推進大会, 国東市, 2008. 3

#### 小西 恵美子

看護実践における倫理的意思決定, 九州大学九大病院別府医療センター, 別府, 2007. 9  
看護倫理, 鹿児島大学病院看護部講演会, 鹿児島, 2007. 11

#### 桜井 礼子

大学の教育課程・自己啓発, 臨床実習指導者講習会, 大分市, 2007. 5  
健康とはー疾病予防と健康増進ー, JICA「看護教育改善プロジェクト」セミナー, ウズベキスタン共和国タシケント市, 2007. 9  
介護保険制度について, 多世代交流プラザ ボランティア教育, 大分市, 2007. 10  
看護とは, 大分西高校 模擬授業, 2007. 12

#### 関根 剛

援助の組み立て方～実際の事例を通して, 埼玉犯罪被害者援助センター, さいたま市, 2007. 4  
学校に行けない子どもたちへの対応, 大分県教育センター, 大分市, 2007. 5  
面接技術, 大分県看護協会訪問看護研修ステップ 1, 大分市, 2007. 5  
被害者支援の実情と問題点, 大分県検察庁, 大分市, 2007. 5  
グループエクササイズ, 別府鶴見高校人権教育校内研修会, 別府市, 2007. 6  
心理的支援の基礎・倫理とストレス管理・支援の実際, はーとらいん山口被害者支援研修会, 山口市, 2007. 7  
直接的支援の方法, 紀の国被害者支援センター, 和歌山市, 2007. 7  
直接的支援について, 京都被害者支援センター継続研修会, 京都市, 2007. 7  
思春期のころと行動について, 大分市教育相談センター, 大分市, 2007. 7  
不登校について, 速見郡学校保健会, 日出町, 2007. 7  
ナントカしたいけど、ドウニモならない、をドウニカしよう, 公立学校共済組合大分支部健康増進セミナー, 別府市、佐伯市、日田市, 2007. 7-8  
死にたい電話を受けた相談員の反応とサポート, 全国いのちの電話協会指導者研修会分科会, 奈良市, 2007. 8  
スクールセクハラのおよぼす影響と具体的事例への対応, 大分県教育庁スクールセクハラ防止相談窓口担当者研修, 大分市, 2007. 8  
リーダーシップ研修, いのべ病院院内研修会, 大分市, 2007. 8  
「コミュニケーションとは」「コミュニケーション実践」, ななせ生きがいクラブ研修会, 大分市, 2007. 9  
二次的被害を防ぐために②～カウンセリングの技法～, 大分県男女共同参画課DV被害者地域サポーター養成講座, 大分市, 2007. 10  
コミュニケーション, 大分市保健所ヘルスボランティア育成講座, 大分市, 2007. 7, 10  
犯罪被害者への総合的支援の今後のあり方, 和歌山犯罪被害者支援フォーラム/パネルディスカッション, 和歌山市, 2007. 11  
子どものころといのちを守るー学校・家庭・地域で考える危機管理ー, 九州心理学会公開シンポジウム, 別府市, 2007. 11

直接的支援（面接／同行サービス、生活支援など），石川被害者サポートセンター継続研修会，金沢市，2007.12  
つぐないの気持ちを育む指導（犯罪被害者に対する理解）：4回，大分少年院，豊後大野市，2007.12  
生活指導等における児童及び保護者への対応，白杵下北小学校教職員研修会，白杵市，2008.1  
各支援センター・全国ネットワークの将来像：パネラー，全国被害者支援センター公開フォーラム，長野市，2008.2  
クライアントのことがわかるということー共感とニーズの明確化、質の高い支援につなげるために，おうみ犯罪被害者支援センター研修会，守山市，2008.2  
被害者の心情を理解するためのプログラム：5回，大分刑務所ゲストスピーカー，大分市，2008.3

高波 利恵 臨床における実践的看護研究 量的研究の方法，大分県看護協会 ジェネラリストⅠ，大分市，2007.7

高波 利恵、岩崎 香子、佐藤 みつよ、岡崎 寿子、安部 恭子 「丈夫な身体づくりをめざして」，大分大学教育福祉学部附属中学健康教育講和，大分市，2008.2

高野 政子 指導の実際ー小児看護ー，大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2007.6  
看護学教育方法-小児看護学-，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.9  
食を通して子どもの心身の発達を考える，大分市生石保育所保護者研修会，大分市，2007.11  
専門領域別演習 - 小児看護学 - ，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.11-12  
医療的ケアに関する研修会- 障害児の経管栄養の基礎と実際 - ，大分県立大分養護学校教員研修会，大分市，2008.1  
小児肥満の予防と食育の支援，平成19年度 盲・聾・養護学校支部部会研修会，大分市，2008.2

高野 政子、田中 美樹、後藤 愛 医療的ケア・経管栄養の実際，第2・3回医療的ケア研修会，大分市，2007.7

藤内 美保 自律した専門職育成のための実習教育のあり方，大分リハビリテーション専門学校，大分市，2007.4  
フィジカルアセスメントⅠ，大分県看護協会 第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2007.5  
フィジカルアセスメントⅡ，大分県看護協会 第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2007.6  
実習指導計画・指導案Ⅰ，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市，2007.6  
実習指導計画・指導案，大分県看護協会 実習指導者講習会，大分市，2007.6  
呼吸器・循環器・頭頸部のフィジカルアセスメントの実際，大分赤十字病院院内研修 レベルⅡ，大分市，2007.6  
バイタルサインとフィジカルアセスメント，大分赤十字病院院内研修 レベルⅠ，大分市，2007.7

循環器のフィジカルアセスメント, アルメイダ病院師長レベル, 大分市, 2007. 7  
 循環器・消化器のフィジカルアセスメント, アルメイダ病院スタッフレベル研修, 大分市, 2007. 7  
 呼吸器系のフィジカルアセスメント, 大分医療センター 実務研修, 大分市, 2007. 7  
 継続教育 専門知識や技術の伝承は可能か, 川崎医療福祉大学, 岡山市, 2007. 8  
 循環器系のフィジカルアセスメント, 大分医療センター 実務研修, 大分市, 2007. 8  
 臨地実習における学生へのアセスメントの指導, 別府医療センター, 別府市, 2007. 9  
 看護過程と看護記録, 大分県看護協会主催 看護力再開発講習会, 大分市, 2007. 10  
 事例によるフィジカルアセスメント, 大分県立病院看護師研修会, 大分市, 2007. 11  
 フィジカルアセスメントI, 大分県社会福祉介護研修センター研修会, 大分市, 2007. 11  
 フィジカルアセスメントII, 大分県社会福祉介護研修センター研修会, 大分市, 2007. 11  
 フィジカルアセスメントI, 大分県看護協会主催 第2回訪問看護研修ステップI, 大分市, 2007. 11  
 フィジカルアセスメントII, 大分県看護協会主催 第2回訪問看護研修ステップI, 大分市, 2007. 11  
 修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ, 広島大学大学院, 広島市, 2007. 12  
 看護過程(1), 大分健生病院リーダー研修会, 大分市, 2007. 12  
 看護過程(2), 大分健生病院リーダー研修会, 大分市, 2008. 1  
 看護過程(3), 大分健生病院リーダー研修会, 大分市, 2008. 2  
 看護過程(4), 大分健生病院リーダー研修会, 大分市, 2008. 3

#### 林 猪都子

助産師教育課程, 平成19年度大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2007. 5  
 大分市立植田南中学校(2年生)「今を大切に生きる」, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2007. 7  
 助産師教育課程の変遷と助産師教育制度, 平成19年度大分県看護教員養成講習会, 大分市, 2007. 7  
 看護教育方法(母性)演習, 平成19年度大分県看護教員養成講習会, 大分市, 2007. 9-10  
 女性特有の病気と予防法, 女性学級11月講座(玖珠町中央公民館), 玖珠町, 2007. 11  
 妊娠期の看護, 潜在助産師再就業サポート研修会, 大分県立看護科学大学, 2007. 12  
 思春期の性について, 県立三重農業高校久住分校「性教育」, 竹田市, 2007. 12

#### 伴 信彦

医療における放射線の影響と防護, 大分大学医学部平成19年度放射線業務従事者教育訓練講習会, 由布市, 2007. 5  
 小論文の書き方, 大分県看護協会平成19年度准看護師研修会, 大分市, 2007. 10

平野 互

納得のいく医療を受けるために、大分市野津原公民館のつはる七瀬大学，大分市，2007.5  
福祉における権利擁護－権利としての自立，大分県社会介護研修センター県・市町村福祉担当新任職員研修会，大分市，2007.5  
発達障がい児の未来のために～専門職に寄せる親の願い～，大分県発達障がい者療育専門員養成研修，大分市，2007.6  
リスクマネジメント教育，大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2007.7  
患者の権利～医療をめぐる人権問題，大分県教育庁人権教育専門講座，大分市，2007.7  
メタボリック症候群と健康づくり，大分県臼杵保健所管内栄養士研修会，臼杵市，2007.7  
学校と保護者の連携－広汎性発達障がい児の生きる力を育てるために－，大分市立滝尾小学校特別支援教育研修，大分市，2007.8  
自閉症児の特性と学齢期の中心的課題への対応－子どもの生きる力を育てるために－，大分県教育委員会自閉症教育研修，大分市，2007.8  
医療と福祉、今何が起きているのか，患者の権利オンブズマン大分第2回市民のための患者塾，大分市，2007.9  
福祉サービス第三者評価基準ガイドラインの理解～第三者評価基準の理解と判断のポイント，大分県会福祉サービス第三者評価調査者養成研修会，大分市，2007.9  
苦情調査事例から「人間の尊厳」を学ぶ，NPO法人患者の権利オンブズマン2007年度患者（利用者）アドボカシー研修講座，福岡市，2007.10  
地域での健康づくり，大分市ヘルスボランティア育成講座，大分市，2007.10  
訪問看護における患者の権利と意思決定の支援，大分県訪問看護ステーション看護職員研修会，大分市，2007.12  
地域での健康づくり，大分市ヘルスボランティア育成講座，大分市，2007.12  
自閉症児の特性と学齢期の中心的課題への対応－子どもの生きる力を育てるために－，大分県立南石垣養護学校特別支援教育研修会，別府市，2007.12  
発達障がい児の特性と学齢期の中心的課題への対応－子どもの生きる力を育てるために－，大分県立大分工業高等学校特別支援教育研修会，大分市，2008.1

福田 広美

平成19年度訪問看護研修ステップ2「呼吸管理」，大分県立看護科学大学，2007.8

松尾 恭子、高波 利恵

看護研究とは，看護研究とは，大分赤十字病院，2008.3

宮崎 文子

助産師教育課程，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.5  
思春期の性－健全意思決定のために－，大分県楊志館高校2年生講演会，大分市，2007.6  
思春期の性－健全意思決定のために－，大分県楊志館高校1年生講演会，大分市，2007.7  
母性看護教授法・母性看護の実習指導法・評価，JICAウズベキスタン国看護教育改善プロジェクト・母性看護責任者，ウズベキスタン共和国タシケント市，2007.8  
看護教育方法・演習，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.9  
専門領域（母性看護）研究演習，平成19年度大分県看護教員養成講習会，大分市，2007.11  
あなたと私の更年期，地域ふれ合い祭り：地域マラソン講座，大分市，2007.11

吉村 匠平 構成的エンカウンターグループ体験 1, 社会福祉法人皆輪会つくし保育園職員研修, 福岡, 2007. 4  
 構成的エンカウンターグループ体験 2, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 5  
 カウンセリングスキルアップ研修 1, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修1, 福岡市, 2007. 6  
 カウンセリングスキルアップ研修 2, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 7  
 カウンセリングスキルアップ研修 3, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 8  
 カウンセリングスキルアップ研修 4, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 9  
 カウンセリングスキルアップ研修 5, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 10  
 援助要請行動について, 平成19年度保健室相談活動研修会, 大分市, 2007. 10  
 発達障害について 1, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 11  
 子離れについて, 下郡小学校PTA高学年部講演会, 大分市, 2007. 12  
 発達障害について 2, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2007. 12  
 発達障害について 3, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 1  
 発達障害について 4, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 2  
 発達障害について 5, 社会福祉法人皆輪会 つくし保育園職員研修, 福岡市, 2008. 3

S. W. Lee Trends of International Nursing, Special lecture for Doctoral Students in Department of Nursing, ChungAng University, Korea, 2008. 3

## 10-2 研究指導

伊東 朋子 大分県看護教員養成講習会 専門領域別演習 基礎看護学  
 岩崎 香子 天心堂へつぎ病院  
 梅野 貴恵 国立病院機構 別府医療センター  
 大賀 淳子 加藤病院  
 厚生連鶴見病院  
 日本精神科看護技術協会大分県支部  
 小嶋 光明 国立病院機構 別府医療センター  
 小野 美喜 大分県立病院  
 工藤 節美 国立病院機構 大分医療センター  
 桜井 礼子 国立病院機構 西別府病院  
 品川 佳満 国立病院機構 西別府病院  
 関根 剛 大分県立病院  
 高野 政子 大分県看護教員養成講習会 (小児看護)  
 藤内 美保 大分赤十字病院

中山 晃志	大分市医師会立 アルメイダ病院
伴 信彦	大分赤十字病院
松尾 恭子	大分県看護教員養成講習会 専門領域別演習 基礎看護学
吉田 成一	国立病院機構 大分医療センター
10-3 学会その他の役員等	
赤司 千波	平成19年度実習指導者講習会講師 大分県看護協会主催 平成19年度研修会講師、大分県看護協会 平成19年度看護力再開発講習会講師 平成19年度訪問介護員現任研修講師 大分県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員
伊東 朋子	日本ALS協会大分県支部運営委員 JICAウズベキスタン看護教育改善プロジェクト基礎看護領域 平成19年度大分県准看護師試験問題作成委員
市瀬 孝道	大分県環境審議会委員 環境省黄砂問題検討会委員 大気環境学会九州支部会理事 独立行政法人・国立環境研究所、病態生理研究チーム：客員研究員 大分大学非常勤講師 地域連携コンソーシアム大分コーディネーター
稲垣 敦	日本体育測定評価学会 理事 体育測定評価研究 編集委員 Physical Performance Measurement 編集委員 Nスポーツ 顧問 別府溝部学園短期大学 非常勤講師 看護科学研究 編集委員
江月 優子	大分県少年の船保健係
大賀 淳子	大分県障害児適性就学指導委員 大分県医療的ケア運営協議会委員 大分県看護協会学会委員
小嶋 光明	日本放射線影響学会評議委員
小野 美喜	大分県脳卒中懇話会世話人

甲斐 倫明	九州大学非常勤講師 国際放射線防護委員会（ICRP）第4専門委員会委員 日本放射線影響学会幹事、評議員 放送大学客員教授 文部科学省放射線審議会委員 内閣府原子力安全委員会専門委員 日本リスク研究学会理事 国連科学委員会国内対応委員会委員 財団法人原子力安全研究協会 放射線影響に関する懇談会委員 財団法人放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会委員 独立行政法人放射線医学総合研究所 内部評価委員会放射線防護センター専門部会委員 経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会臨時委員 厚生労働省原爆症認定の在り方に関する検討会委員
影山 隆之	日本精神衛生学会常任理事・編集委員長 日本学校メンタルヘルス学会運営委員 日本自殺予防学会理事 大分県産後うつスクリーニングシステム推進検討会委員 大分県自殺対策連絡協議会副会長 大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員
河野 梢子	ななせ生きがいクラブアドバイザー
工藤 節美	平成19年度大分県准看護師試験委員 大分県看護教員養成講習会検討委員 大分県介護保険審査委員 国東市健康づくり計画作業部会 大分市社会福祉審議会委員 第3期大分市介護保険事業計画及び大分市高齢者保健福祉計画策定委員
小西 恵美子	日本看護科学学会看護倫理検討委員会 日本看護科学学会評議員 日本看護研究学会評議員 独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金審査専門委員 独立行政法人放射線医学総合研究所研修課程評議会委員 日本看護研究学会査読委員 日本放射線腫瘍学会放射線治療看護師教育支援WG委員
桜井 礼子	大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員 大分市建築審査会委員 大分市食育推進計画策定委員会委員 大分地方労働審議会委員 日本災害看護学会第10回年次大会企画委員会委員
定金 香里	大分県理科・化学教育懇談会幹事
品川 佳満	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師

関根 剛	(社) 大分被害者支援センター理事 大分いのちの電話協会スーパーバイザー 全国被害者支援センター研修検討委員会委員 日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究編集委員 大分県臨床心理士会被害者支援担当理事 「民間被害者支援団体における支援者の育成に関する調査研究（内閣府委託事業）」委員 消防庁緊急時メンタルサポートチーム 九州心理学会第68回大会準備委員会委員
高波 利恵	日本看護科学学会法人化準備委員会事務
高野 政子	大分県小児保健協会副会長・理事 九州小児看護教育研究会理事 ウズベキスタン看護教育改善プロジェクトカリキュラム委員
藤内 美保	大分県医療費適正化推進協議会委員 大分県地域ケア体制整備構想策定協議会委員 日本災害看護学会企画委員 JICA ウズベキスタン看護教育改善プロジェクトワーキングメンバー JICA ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
林 猪都子	大分県 潜在助産師再就業サポート研修支援企画委員 第33回全国助産師教育協議会研修会 実行委員
伴 信彦	放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会専門委員（IAEA/RASSC担当） 国連科学委員会国内対応委員会委員 日本放射線影響学会 UNSCEAR等担当委員 日本保健物理学会企画委員 日本災害看護学会第10回年次大会企画委員 日本保健物理学会第42回研究発表会実行委員
平野 互	医療事故防止・患者安全推進学会 理事 大分県発達障がい者支援体制推進会議 副委員長 大分県特別支援連携協議会 委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会委員 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会 委員 九州大学病院 心臓移植外部評価委員 大分健生病院 倫理委員会 委員 別府発達医療センター 安全対策等審議委員会 委員
福田 広美	実習指導者講習運営委員
松尾 恭子	平成19年度大分県准看護師試験問題作成委員



宮崎 文子

全国助産師教育協議会常任理事  
大分県男女共同参画審議会委員  
大分市男女参画推進懇談会委員  
大分市男女参画推進懇談会委員  
大分県地域保健協議会母子保健小委員会  
平成19年度・20年度産科診療所における助産師確保事業検討委員会委員  
全国助産師教育教議会常任理事  
第21回日本助産学会学術集会会長  
大分県母性衛生学会副会長  
大分県看護協会第3副会長  
日本助産学会評議員

吉村 匠平

竹田地区学習障害児等支援体制整備事業に関わる専門家チーム委員  
大学コンソーシアムおおいた 運営委員  
チャレンジ！おおいた大会 選手団担当ボランティア養成協力校連絡会議委員  
九州心理学会第68回大会準備委員会委員

吉田 成一

日本アンドロロジー学会 評議員  
環境省大気汚染物質等文献レビューワーキンググループ委員  
東京理科大学薬学部客員研究員

## 11 外部資金

### 市瀬 孝道

中国メキシコの大气汚染物質によって汚れた黄砂の生体影響に関する研究  
財団法人住友財団 環境研究助成金（2年予定の2年目）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

中国大陸から風送された汚染黄砂による呼吸器疾患の増悪と日本におけるその疫学調査  
日本科学振興会科学研究費補助金 基盤研究（B）（3年の1年目）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトがん発生に関わる環境要因及び感受性要因に関する研究  
国立がんセンター研究所（厚生労働省がん研究助成金 指19-1）（3年予定の1年目）

### 市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

日産ユズの免疫抑制成分を活用したアレルギー低減飲料の開発  
経済産業省 平成19年度地域資源活用型研究開発事業（2年予定の1年目）

### 岩崎 香子

腎不全に伴う低回転骨の骨質に関する研究  
（財）日本腎臓財団

### 江藤 真紀

高齢者の転倒発生における視知覚と姿勢制御と下肢筋力との関連  
文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）（3年予定の3年目）

### 甲斐 倫明

わが国におけるCT診断の患者線量と放射線誘発がんリスク推定システムの構築  
文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（2年予定の2年目）

### 甲斐 倫明

がん放射線診断における患者被ばくの実態調査と放射線誘発がんのリスク推定に関する研究  
厚生労働省がん研究助成金（2年予定の1年目）

### 影山 隆之

簡易問診票による「うつ」症状のスクリーニングの有効性に関する産業看護学的研究  
平成19年度日本学術振興会科研費（2年予定の1年目）

### 影山 隆之

分担：医療職者のエンパワーメントとメンタルヘルスに関する研究－新卒看護職者の自己効力感を高めるプログラムの開発

日本学術振興会科研費（3年計画の3年目）

### 影山 隆之

分担：騒音の睡眠影響の評価に関する総合的研究

日本騒音制御工学会「騒音の影響評価に関する研究委員会」

### 影山 隆之

自殺実態基礎調査

大分県調査委託事業

### 草間 朋子

平成19年国別研修「ウズベキスタン看護教育」コースに係わる委託契約

JICA

### 草間 朋子

21世紀型のナースプラクティショナー教育

大学教育の国際化推進プログラム

### 工藤 節美

国保ヘルスアップ事業のプログラムの効果と検証に関する研究

大分県国東市委託研究

### 小西 恵美子

看護師からみた「よい看護師」に関する記述的研究

平成19年度日本学術振興会科学研究費

### 小西 恵美子

地域看護における体系的倫理教育ラダーの開発と評価

平成19年度日本学術振興会科学研究費

### 桜井 礼子

Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護の質評価に関する研究

文部科学研究費補助金（基盤研究（B））分担

### 定金 香里

カビの吸入と接触によるアトピー性皮膚炎増悪作用に関する研究

日本学術振興会 基盤研究(C)（2年予定の1年目）

## 定金 香里

平成19年度 in vivoスクリーニングによる環境化学物質のアレルギー増悪影響評価  
国立環境研究所委託研究

## 高波 利恵

小規模事業所労働者に対する集団的健康増進活動の支援方法の検討とその評価  
文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））

## 中山 晃志

生物統計学における因果推論に関する手法の改善  
統計数理研究所

## 平野 亙

PDDによる生活障害評価尺度の開発に関する研究  
日本学術振興会科研費 基盤研究C（2年計画の1年目）

## 平野 亙

精神医療に係る患者の利用実態や機能等の評価及びその結果の公表に関する研究  
厚生労働科研費（こころの健康科学研究事業）分担（3年計画の3年目）

## 福田 広美

分担：Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護の質評価に関する研究  
文部科学研究費補助金 基盤研究B

## 吉田 成一

ナノ粒子の生殖系及び内分泌系に及ぼす影響に関する研究  
文部科学省科学研究費補助金若手研究A（3年予定の3年目）

## 吉田 成一

アレルギー増悪因子のスクリーニング法開発  
昭和シェル石油環境研究助成財団（2年予定の2年目）

## 吉武 康栄

筋音図法を応用した力調節安定性の生理学的規定因子の解明  
科学研究費補助金 若手研究（B）（2年予定の2年目）

## 吉武 康栄

レーザー変位計を用いた皮膚表面振動測定による力調節能力評価  
財団法人中谷電子計測技術振興財団 奨励研究助成

吉武 康栄

片側での筋収縮が反対側の筋収縮をも引き起こす生理学的メカニズムの解明  
財団法人スズキ財団 科学技術研究助成金

## 12 各種研究・研修派遣

### 中山 晃志

派遣先 McMaster University, The Shalom Village, Momiji Health Care Society, Canada

派遣期間：2007年7月19日～8月8日

海外の看護系大学の学部や大学院における統計教育や情報教育の現状を知り、本学の講義内容で足りない部分があれば、その部分を補うことにより、学生の統計および情報に関する知識を強化することを目的とした。また、McMaster大学で行われているPBL教育の概念や方法を学ぶことにより、自分の教育方法に反映させることも目的とした。

教育内容に関しては大きな違いがなかったが、学生の授業に対する意欲の違いを感じるが多かった。また、PBL教育の利点の1つである学生の自己学習（予習）という点を講義に取り入れることにより、学生の意欲を向上させることができると考え、実際に帰国後の講義に活用するなど、教育に反映できる貴重な機会となった。

研修内容については、2007年10月24日大分県立看護科学大学にて報告を行った。

### 江藤 真紀

派遣先 McMaster University, The Shalom Village, Momiji Health Care Society, Toronto University, Canada

派遣期間：2007年7月19日～8月8日

オンタリオ州における地域保健の組織や健康計画・サービス、またその中での看護職に期待されていること、看護職の任務について学んだ。また、人々が自らの健康をコントロールし、生活改善することができるようにするプロセスであるヘルスプロモーションにおけるカリキュラムや教育システム、教員に期待されることと役割についての知見を得た。さらには、The Shalom VillageとMomiji Health Care Societyの視察やスタッフとの意見交換からオンタリオ州の高齢者施設の在り方や施設内の看護職者の活動の実際からその役割と共政策の確立を学ぶことができた。

### 安部 恭子

派遣先 McMaster University, The Shalom Village, Momiji Health Care Society, Toronto University, Canada

派遣期間：2007年7月19日～8月8日

海外の看護系大学の学部や大学院における看護学教育の現状を知り、本学での講義の在りかたを検討し、McMaster大学で行われているPBL教育の概念や方法を学ぶことにより基礎看護学教育に関する知識を強化することを目的とした。

McMaster大学で行われているPBL教育の学生の授業の参加観察では、学生の学びに対する意欲の違いを痛感した。今後は、PBL教育の特徴の1つである学生の自己学習（予習）という点を考慮する教育を考える、よい機会となった。

また、オンタリオ州における地域保健の組織や健康計画・サービスについての講義を受け、看護職に期待されていること、看護職の任務などについて学んだ。さらに、The Shalom VillageとMomiji Health Care Societyの視察等を行うなどして、カナダでの高齢者施設設の在り方や施設内の看護職者の役割などを学ぶなどした。

研修内容については、2007年10月24日大分県立看護科学大学にて報告を行った。

## 草間 朋子、甲斐 倫明、宮内 信治

派遣先 The University of Washington, The University of California San Francisco

研修期間：2007年8月20日～8月26日

The University of Washingtonでは、Marie-Annette Brown教授との会談にて、米国におけるナースプラクティショナーの現状、他の医療職者との役割のあり方などを確認した。Doctor of Nursing Practice (DNP 看護実践学博士課程)の開発が進行しているという情報も得た。また、大学付属の婦人科クリニックにて、実際にBrown教授が患者を診察する様子を患者の同意を得て直接見学する機会を得た。ナースプラクティショナーの実際の診療場面に接することで、ナースプラクティショナーの活動を直に知ることができた。

The University of California San Franciscoでは、大学におけるナースプラクティショナー教育の現状について意見を交換した。また、シンガポールなど米国以外でのナースプラクティショナー教育の開発、援助などの実態について情報を得た。

## 藤内 美保

派遣先 Pace University

研修期間：2007年9月24日～10月9日

大学内のクリニックや町で開業しているナースプラクティショナー、ナーシングホームで活躍するナースプラクティショナー等の活動を見聞した。患者へのかかわり方、直ぐに安易に処方するのではなく丁寧な健康教育の必要性も学んだ。またフィジカルアセスメント能力に優れており、医師との連携・ネットワークシステムなども充実していた。またeラーニングを活用した講義形式、学生から質問へ対応や評価方法など、示唆に富む有意義な研修であった。

## 吉田 成一

派遣先 Pace University

研修期間：2007年9月24日～10月9日

ナースプラクティショナーの医薬品に関する取り扱いや養成課程にある学生の学習方法等に関し、情報を収集した。

特に学生の学習方法に関しては、オンライン（eラーニング）の活用が幅広く執り行われており、今後の本学大学院教育においても重要であることを学んだ。

## 大賀 淳子

派遣先 ソウル大学

研修期間：2007年11月4日～11月15日

ソウル大学を拠点として研修を行った。研修目的は、韓国における精神科専門看護師の役割を知り、活躍の実際に触れること、韓国における精神科専門看護師の養成カリキュラムを知り、講義に参加することの2つであった。期間中は3箇所の施設見学、3回の講義への出席および3回のミーティングの機会を得ることができた。韓国では精神科専門看護師（PAPN：Psychiatric Advanced Practice Nurse）の誕生は2006年であり（49名/2007年）、現時点ではその役割は明確になっていない。いっぽう、1995年に法制化されたPMHNP（Psychiastirc Mental Health Nurse Practitioner）が3,000人以上存在し、主に精神障害者のリハビリテーションプログラムの作成段階から関わり、中心的存在となっている。研修期間中、複数のPMHNPの実践に触れ、彼らとディスカッションを行い、その理論的背景や実践について情報を得た。

## 高野 政子

派遣先 Seoul National University College of Nursing, Korea

派遣期間：2007年11月4日～11月13日

研修目的・内容：姉妹校であるソウル大学の小児看護学教授Kyung Ja Han先生を訪問し、韓国における小児看護学の説明を受けた。また、韓国では小児の専門看護師（Pediatric Nurse Practitioner, PNP）の教育が開始されたというので、その教育の実際について意見交換した。ソウル大学では小児看護のPNPコースの開講はまだ行われていなかったが、Asan Medical Centerでは実際に活動している3名のPNPと会い、1日行動を共にして、臨床活動の実際を理解することができた。また、そのPNP3名の経験談を聞くなどして、本学の小児看護のPNPの教育のカリキュラム構築のアイデアを得ることができた。

訪問施設：Seoul National University Hospital (NICU, Children's Hospital), Asan Medical Center

## 小野 美喜

派遣先 Case Western Reserve University : USA

研修期間：2007年2月23日～3月20日

研修目的：1. プライマリケアを行うGNPの活動の実際を学ぶ

2. 大学におけるNPの講義・演習・実習の内容や方法を学ぶ

GNPの活動については、在宅、ナーシングホーム、ホスピス、クリニック外来での診療の実際を見学し、NPとディスカッションする事ができた。高齢者に特徴的な認知症、高血圧、糖尿病などの健康問題へのアプローチが必要性について学んだ。また、眼、耳などの感覚器の診察とケア、フットケアが重要であった。

講義、演習では、FamilyNPとAcuteNPの講義に参加した。各NP領域の特性による教育内容の違いを学ぶことができた。また、GNP講義の担当者とディスカッションする機会をもらい、GNPの講義内容や学習に有効Webサイトなどの情報提供を受けた。



## 伊東 朋子

派遣先 アメリカ合衆国(Case Western Reserve University)

研修期間：2007年2月23日～3月20日

研修目的：1. NP教育及び学部教育（基礎看護学領域）の実際を学ぶ  
2. 臨床現場でのNP活動の実際を学ぶ

修士レベルの教育活動について研修することができた。臨床での実務を抱えた学生がNP資格取得を目指して、講義科目を履修する過程を理解できた。実務経験豊富な学生を教育する上で教員も学術的な知識だけではなく、高度な実務も要求され、教員は実際の臨床を行いながら教育を行っていることを理解した。ナーシングホーム、ホスピス、クリニック外来での診療の実際も見学することができた。学部レベルの教育活動については2年次生の講義・演習(看護技術)に参加した。実際の教育現場を視察することで、学生の行動様式は本邦におけるものとは大いに異なっていることを理解したが、学習する姿勢や態度には、大いに学ぶべきものの存在することを認識した。

## 桜井 礼子

派遣先 韓国:ソウル市Seoul National University Bundang Hospital、南陽州市青鶴保健診療所、光陽市保健所・保健診療所、南海郡保健診療所

平成20年3月23日～3月30日の期間韓国に滞在し、本学のNPコースの教育に役立てることを目的に、主に老年NP（ナースプラクティショナー）および保健診療員の役割と活動の実態について、上記派遣先で研修を行った。

NPは2006年から新たに国家資格として開始されたもので、役割及び活動については、それぞれのNPが活動の場にあった活動を模索している状態であると感じた。しかしながら、今回研修をした病院では、NPは病院および外来で患者を受け持ち、患者のアセスメントとリコメンデーション、医療チームにあってはコンサルテーション的な役割を果たし、その活動は他の職種からも認められる存在であると感じた。

保健診療員は、保健所の支所である保健診療所を拠点として、主に診療およびヘルスポストとしてプライマリ・ヘルスケアの役割を担っている。今回研修を行った施設は、ソウル市近郊の地域と、ソウル市からバスで4～5時間の地域であった。特に高齢者の多い地域においては、それぞれの健康レベルに合わせて、疾病管理を行ったり、家庭訪問を行ったり、健康増進プログラムを実施するなど、活動は多岐に渡っており、また住民からの信頼も得ていることがわかった。

## 工藤 節美

派遣先 Seoul National University bundang Hospital, NamYangju CHClinic, JeonNam Gwang Yang CHClinic, GyeongNam Dongcheon CHClinic

研修期間：2008年3月23日～3月30日

韓国における大学病院のNP(Nurse Practitioner)の位置づけ・活動内容と保健診療員の活動の場・活動内容等について把握し、2008年4月からの大学院NP教育に反映させることを目的とした。大学病院においては、医師や他の専門職者と協働し自立して活動を行っているNPの活動実態を見学すると共に、NPに求められる資質等についてディスカッションを行い今後のNP教育に対する貴重な示唆を得ることができた。さらに、地方における保健診療員の活動の場や活動内容を見学等をとおして、わが国の保健医療福祉システムの中でNPの活動の場や業務範囲、他職種種との連携等のあり方等、今後NPプロジェクトとして取り組むべき具体的な内容や課題を明らかにすることができた。

## 江月 優子

派遣先 九州厚生年金病院

研修期間：2008年2月18日～2月29日

実習や講義で担当する消化器疾患に対する治療・看護を学ぶことを目的とした。消化器内科病棟・内視鏡室・外来化学療法室・血管造影室・手術室で研修を行った。病棟では肝疾患に対して治療を受ける患者の術前、術後の看護を学んだ。内視鏡室・血管造影室・手術室では治療の実際を見学した。

また、自身の研究課題である緩和ケア病棟の看護を学ぶため、緩和ケア病棟での研修も行った。病棟看護師に同行し、清潔援助などのケアに参加した。

## 田中 美樹

派遣先 九州厚生年金病院

研修期間：2008年2月18日～2月29日

実習や講義で担当する小児および新生児疾患に対する最新の治療・看護を学ぶことを目的とした。小児病棟・NICU・小児外来・緩和ケア病棟で研修を行った。小児病棟では子どもとその家族に対する看護を中心に、入院中の子どもの遊びや学習への関わりなどを看護師とともにケアを行いながら学んだ。NICUでは低出生体重児や先天性心疾患児に対する最新の治療・処置・看護、小児外来では医師の診察技術を学んだ。

緩和ケアチームの小児への関わりを学ぶため、緩和ケア病棟での研修も行った。病棟看護師に同行し、清潔援助などのケアに参加するとともに、小児病棟との連携方法などを学んだ。

## 木下 結加里

派遣先 国家公務員共済組合連合会 浜の町病院

研修期間：2008年3月3日～3月14日

急性期医療の現場における、地域生活への移行支援について学ぶことを本研修の主な目的とした。研修場所は、内分泌代謝科病棟・消化器外科病棟・血液内科病棟・地域連携室・健康医学センター等で行った。病棟では入院から退院までの流れに沿って看護師とともにケアに入り、退院調整の会議等にも参加した。地域連携室では、退院調整看護師がどのように院内外と連携をとり活動しているのかを見学し、実際におこなわれている退院支援・退院調整について学んだ。

また、外来化学療法室の看護師や皮膚・排泄ケア認定看護師、慢性疾患看護専門看護師に同行し、高度なケアの実践活動の実際を学んだ。

## 朝見 和佳

派遣先 国家公務員共済組合連合会 浜の町病院

研修期間：2008年3月3日～3月14日

現在の病院での臨床を経験し、各領域での治療・看護を学ぶことを目的とした。内分泌代謝科病棟・消化器外科病棟・血液内科病棟の三病棟で、現在の臨床現場の実際を経験した。その中で、病棟の学生実習担当者、院内の学生実習指導責任者や卒後教育担当者がどのような体制・指導方法を行っているか、現在の問題などを交えて聞く機会を得た。

また、外来化学療法室の看護師や皮膚・排泄ケア認定看護師、慢性疾患看護専門看護師に同行し、先進的ケアの実際を見学し、院内での教育のあり方などを学んだ。

## 13 学外研究者の受入

本学教員 甲斐 倫明

受入者 小野 孝二

所属：大分県立病院放射線技術部 主任臨床放射線技師

研究テーマ：わが国におけるCT診断の患者線量と放射線誘発がんリスク推定システムの構築

受入期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

所属：大分大学工学部知能情報システム工学科 准教授

研究テーマ：低線量放射線の生体影響に関する実験データへの統計的手法の研究

受入期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

## 14 職員名簿

### 1 専任教員

生体科学	教授	高橋 敬	H20. 3. 31 退職
	准教授	安部 眞佐子	
	助教	岩崎 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	講師	吉田 成一	
	助教	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
	助教	吉武 康栄	
人間関係学	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
	助手	佐藤 みつよ	
環境保健学	教授	甲斐 倫明	
	准教授	伴 信彦	
	助教	小嶋 光明	
健康情報科学	教授	佐伯 圭一郎	
	講師	品川 佳満	
	助教	中山 晃志	
	教授	G. T. Shirley	
言語学	講師	宮内 信治	
	助手	岡崎 寿子	
	准教授	伊東 朋子	
基礎看護学	講師	松尾 恭子	
	助手	小野 さと子	
	助手	吉田 智子	
看護アセスメント学	助手	小野 富美子	H19.12. 28 退職
	教授	小西 恵美子	H20. 3. 31 退職
	准教授	藤内 美保	
	助教	安部 恭子	H20. 3. 31 退職
	助手	河野 梢子	H19. 4. 1 採用
	准教授	赤司 千波	H20. 3. 31 退職
成人・老年看護学	講師	小野 美喜	
	講師	福田 広美	
	助手	井伊 暢美	
	助手	牧野 由佳里	H20. 3. 31 退職
	助手	江月 優子	H19. 4. 1 採用

小児看護学	准教授	高野 政子	
	講師	田中 美樹	H19. 4. 1 採用
	助手	後藤 愛	H19. 5. 16 採用
母性看護学・助産学	教授	宮崎 文子	
	准教授	林 猪都子	
	講師	小西 清美	H20. 3. 31 退職
	講師	関屋 伸子	
	助手	高瀬 恵子	H20. 3. 31 退職
	助手	戸高 佐枝子	H19. 4. 1 採用
精神看護学	教授	影山 隆之	
	講師	大賀 淳子	
	助手	内田 竜子	H19. 8. 31 退職
保健管理学	教授	草間 朋子	
	教授	桜井 礼子	
	准教授	平野 互	
	助教	高波 利恵	
	助手	朝見 和佳	
地域看護学	准教授	工藤 節美	
	講師	江藤 真紀	
	助手	木下 結加里	
	助手	安東 恵子	H20. 3. 31 退職
国際看護学	教授	李 笑雨	
	講師	八代 利香	H19. 8. 31 退職

## 2 非常勤講師

大杉 至	人間と社会
西 英久	哲学入門
日高 貢一郎	言語表現法
合田 公計	経済学入門
足立 恵理	文化人類学入門
西園 晃	生体微生物反応論
粟屋 典子	看護情報学概論
宮本 修	音楽とこころ
澤田 佳孝	美術とこころ
吉河 康二	看護と遺伝
吉良 國光	大分の歴史と文化
堀永 孚郎	母性病態論
肥田木 孜	母性病態論

宇都宮 隆史  
上野 桂子  
劉 美貞  
福元 満治

母性病態論  
母性病態論  
韓国語  
保健医療ボランティア論

### 3 事務職員

#### ○事務局

事務局長 高橋 賢一 H20. 3. 31 転出  
統括部長 小野 順一 H20. 3. 31 転出

#### ・経営企画グループ

課長補佐 三浦 始 H19. 4. 30 転出  
主幹 安部 正雄 H19. 5. 1 転入  
副主幹 堀 潔己 H20. 3. 31 転出  
主任 森 清  
事務職員 平川 昌子

#### ・財務グループ

主幹 戸高 晴寿 H19. 4. 30 転出  
主幹 坪崎 勝 H20. 3. 31 転出  
主任 伊藤 慎太郎  
事務職員 石井 健治  
事務職員 池邊 尚美

#### ・教務学生グループ

主幹 佐藤 俊実  
副主幹 佐藤 恭子 H19. 5. 1 転入  
主査 足立 暢久 H19. 4. 30 転出  
主査 梅木 満長 H19. 5. 1 転入  
保健師 原田 幸代  
事務職員 神崎 純子

#### ・図書館管理グループ

主査 小野 永子  
司書 牛島 聡子  
司書 中野 美佐子